

第Ⅲ章 遺 跡 解 説

収録した木器の出土遺跡の概略をのべる。ここでは主として木器が出土した遺構を概観するにとどまり、遺跡全体の性格などについて十分な考慮をはらっていない。すでに報告書などが刊行されている遺跡については、それを簡略化したため表現が不十分であったり誤解している場合もありうる。報告書が未刊行の遺跡については、現時点での調査所見にしたがう。こうしたことから、問題のある木器出土遺跡の検討に対しては報告書の原点に立返られることを期待する。また、未報告遺跡については将来その評価に変更が大いにありうる。

1 三 重 県

A 下郡遺跡 しもごうり

上野市下郡に所在。上野盆地の中央を北流する木津川左岸の標高約150mの微高地に立地する。1978年2月～4月と1980年1月に上野市が調査した。遺跡は縄文時代から中世に至る遺構が重複し、古墳時代の竪穴住居や溝、奈良・平安時代の掘立柱建物や井戸、室町時代の館跡を検出した。収録の木器は平安時代の井戸から出土。井戸は径3.5m、深さ1.7mの掘形の底に礫をしき、横板3段（内法0.9m×0.8m、高さ0.8m）を井籠組にし、その上部の各辺に2枚の板を立てる（内法1.0m×1.1m）。上部の縦板は、内側各辺に4段の横棧をわたして固定。堆積土の下層から「延暦」の紀年木簡とともに、黒色土器・土師器・銅鈴・斎串・櫛・曲物・部材が出土し、上層から10世紀後半の灰釉陶器・黒色土器などが出土した(fig. 58)。

〔木器番号〕 3816, 4711, 6824

〔文 献〕 中森英夫・山田猛・山本雅靖『下郡遺跡発掘調査報告』上野市文化財調査報告5
上野市教育委員会・上野市下郡遺跡調査会（1978年）p. 16～18

2 滋 賀 県

A 湖西線関係遺跡 こせいせん

大津市に所在。1971年・1972年に、湖西線関係遺跡発掘調査団が、大津市錦織から同穴太までの約3.4kmにわたって、日本鉄道建設公団の湖西線開設にともなう事前調査を行った。

大津市北郊の湖西線地域は比叡山系の土砂の流出によって数多くの複合扇状地を形成してお

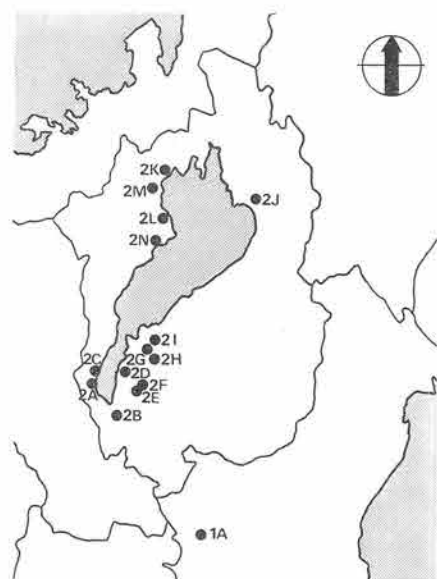


fig. 57 三重県・滋賀県の木器出土遺跡

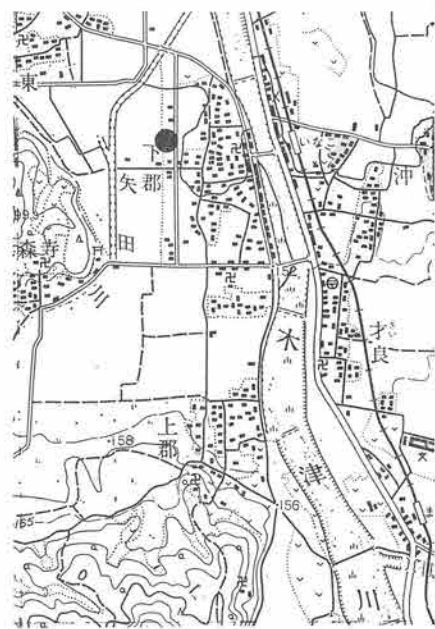


fig. 58 下郡遺跡木器出土地点
(1:25000 伊勢路)

第三章 遺跡解説

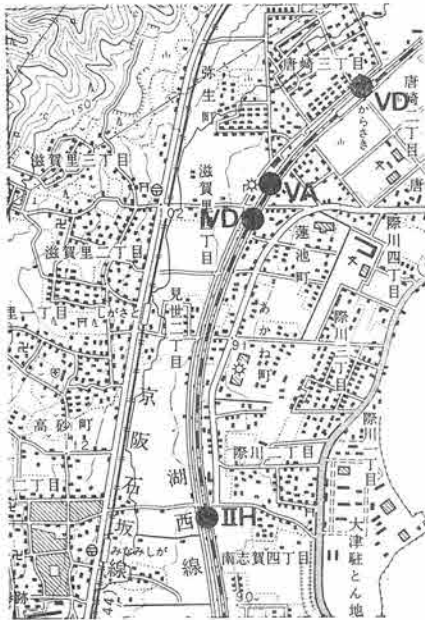


fig. 59 湖西線関係遺跡木器出土地点
(1:25000 京都東北部)

り、その裾部に縄文時代から歴史時代に至る遺跡がある。3.4kmの路線を南から北へⅠ～Ⅴ区の5調査区にほぼ等分し、8地点で各種の遺構を検出した。歴史時代の木器は、各地区の遺物包含層から出土し、その時代は平安時代～中世にわたる。また、ⅤD区の大溝で木器が集中的に発見された。溝は東に流れる幅2～4m、深さ1.2mの人工溝で、木器以外に7世紀後半の須恵器・土師器や土錘・瓦が出土した(fig. 59)。

〔木器番号〕ⅤD区大溝；0113, 1304, 1306, 2314, 4818

ⅤD区土壌；1303

ⅤA区遺物包含層；6102, 7018

ⅣD区遺物包含層；2412

ⅡH区遺物包含層；5722, 6101, 6619

ⅤA・ⅣD・ⅡH区；1916, 1917, 1918, 1919, 1920, 1921

〔文献〕江口千恵子「木器」『湖西線関係遺跡発掘調査報告』滋賀県教育委員会（1973年）
p. 199, 208～209

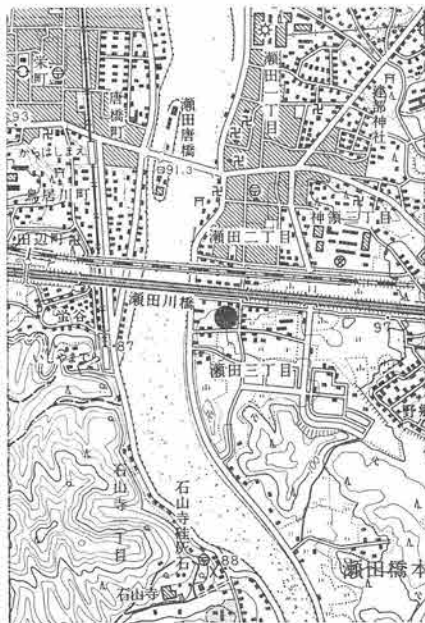


fig. 60 野畑遺跡木器出土地点
(1:25000 瀬田)

B 野畑遺跡 のばたけ

大津市瀬田3丁目に所在。瀬田丘陵から派生した東西にのびる舌状の丘陵上、近江国庁跡の西南1～1.2kmの地点に立地。丘陵西端の北斜面を1981年に滋賀県が調査した。

遺構は、古墳時代（5世紀中葉～6世紀前葉）の竪穴住居群と8世紀中葉～9世紀の掘立柱建物群とにわかれ、後者は近江国庁に関連する官衙跡とかがえられる。後者にぞくする遺構として、3時期ほどの立替えがみとめられる掘立柱建物6棟と、素掘りの井戸2基、横板組の井戸1基を検出し、木器は井戸SE01とSE03とから出土。

SE01は直径1.2m、深さ4.4mの素掘りの井戸。底近くに堆積した青灰色粘土中から、漆塗りの木椀が出土。伴出遺物が少なく時期を限定できないが、他の遺構との関連から8世紀後葉～9世紀前葉に推定される。SE03は上下二段の方形掘形をもつ深さ5.1～6.1mの井戸で、下段の方約2mの掘形内に一辺1.3mの横板組の井戸枠を組む。井戸枠は高さ3.1mをのこす。井戸枠内の堆積土上層から9世紀前葉の黒色土器・緑釉陶器などと木履が、中層から曲物・斎串などが出土している。掘形および井戸の堆積土の遺物によって、8世紀後葉に掘られ、9世紀前葉に廃絶したと推定される(fig. 60)。

〔木器番号〕SE01；2426 SE03；2008, 4717

〔文献〕林博通・栗本政志「近江国府関連官衙跡の調査—大津市瀬田野畑遺跡の調査概要—」『古代文化』第35巻第1号（財）古代学協会（1983年）p. 21～45

林博通「滋賀・野畑遺跡」『木簡研究』第5号 木簡学会（1983年）p. 47



fig. 61 穴太遺跡木器出土地点
(1:25000 草津)

C 穴太遺跡 あのお

大津市下坂本1丁目に所在。比叡山から発する四谷川の氾濫で形成された扇状地に位置する。1982年・1983年に西大津バイパスの道路建設にともなって滋賀県が調査した。地表下5mの縄文時代後期～晩期の遺構と、その上層に形成された6世紀～7世紀の遺構とからなる。6世紀～7世紀の遺構は3層に大別できる。第1層は7世紀中葉の遺構で、切妻大壁造住居3棟をふくむ掘立柱建物・木堀・溝を中心とする。第2層は6世紀後葉から7世紀前葉にかけての遺構で、切妻大壁造住居2棟をふくむ掘立柱建物・礎石建物1棟・木堀・溝がある。第3層は

6世紀後半代の遺構で、掘立柱建物・木堀・溝などを検出した。収録した箕は調査地東北部の、7世紀前葉の遺構面から、土師器・須恵器・木器などとともに出土した(fig. 61)。

〔木器番号〕4108

〔文献〕林博通・吉谷芳幸ほか「最近の滋賀県下における発掘調査の紹介 その1」『滋賀文化財だより』No. 73 (財)滋賀県文化財保護協会 (1983年) p. 1～2

林博通「滋賀・穴太遺跡」『木簡研究』第5号 木簡学会 (1983年) p. 48～49

D 下寺観音堂遺跡 しもでらかんのんどう

草津市下寺町に所在。ほ場整備にともない1975年～1976年にかけて下寺観音堂廃寺の寺域確認調査を滋賀県が行った。寺域に関連する溝を検出したほか、1976年の調査で7世紀後葉から8世紀前葉にかけての、須恵器・土師器・瓦・木器などがまとまって出土した。

木器は調査地内のつぎの溝から出土した。寺域南限内郭の幅 1.35 m、深さ 50 cm の東西溝 SD01 と寺域西限内郭の南北溝 SD03 との合流点。寺域東側の幅 2.3～3 m、深さ 30～50 cm の南北溝 SD06。SD01 に平行して流れる幅 4～5 m、深さ 40～50 cm の溝 SD02(fig. 62)。

〔木器番号〕SD01 ; 7015 SD02 ; 0505 SD06 ; 3004

〔文献〕丸山竜平・岡本隆子ほか「下寺観音堂遺跡」『滋賀県文化財調査年報昭和 51 年度 (本文)』(1978年) p. 337～406

E 矢倉口遺跡 やぐらぐち

草津市矢倉町に所在。1980年に滋賀県が調査した。古墳時代前期から鎌倉時代にわたる遺跡であるが、中心的な時期は8世紀の中葉から後葉とみられる。8世紀の遺構は、掘立柱建物23棟以上・土壇5基・井戸2基などで、木器は井戸 SE02 から出土。

SE02 は直径 3 m、深さ 3.3 m の円形掘形をもち、一辺 80 cm の方形の横板組の井戸枠が5段のこる。井戸内の堆積は6層にわかれ、8世紀中葉まで使われ8世紀後半に廃絶したことがわかる。木履は8世紀中葉の土師器・須恵器と共伴した(fig. 63)。

〔木器番号〕SE02 ; 2007

〔文献〕平井寿一・大橋信弥「草津市矢倉口遺跡発掘調査略報」『滋賀文化財だより』No. 45 (財)滋賀県文化財保護協会 (1980年) p. 1～4

F 下鉤遺跡 しもまがり

栗太郡栗東町下鉤に所在。1982年に栗東町が調査した。遺構は弥生時代中期(第IV様式)の土壇・溝、および調査区の西側で検出した幅20 m、深さ 1.5 mの歴史時代の大溝である。人形は、大溝の上部から9世紀～12世紀の須恵器・土師器・黒色土器とともに出土した(fig. 64)。

〔木器番号〕5004, 5005

〔文献〕「学会動向・平安期の人形」『季刊考古学』第2号 雄山閣出版 (1983年) p. 104～105

G 服部遺跡 はっとり

守山市服部に所在。1974年～1979年に滋賀県と守山市が調査した。遺跡は野洲川下流の旧中洲上に立地し、縄文時代晩期から平安時代にわたる。歴史時代の遺構は、調査地のC・D地区



fig. 62 下寺観音堂遺跡木器出土地点
(1: 25000 草津)

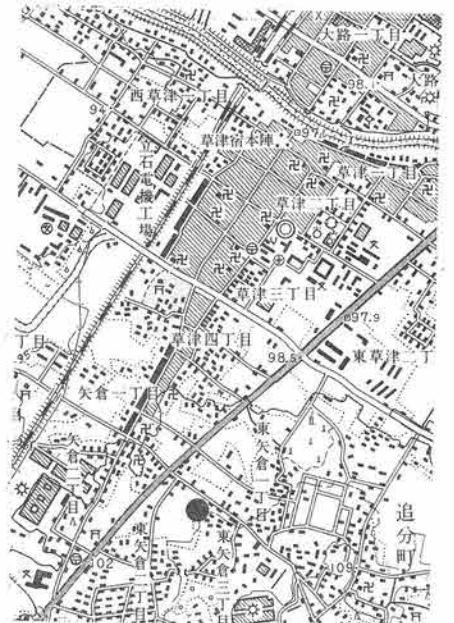


fig. 63 矢倉口遺跡木器出土地点
(1: 25000 草津)

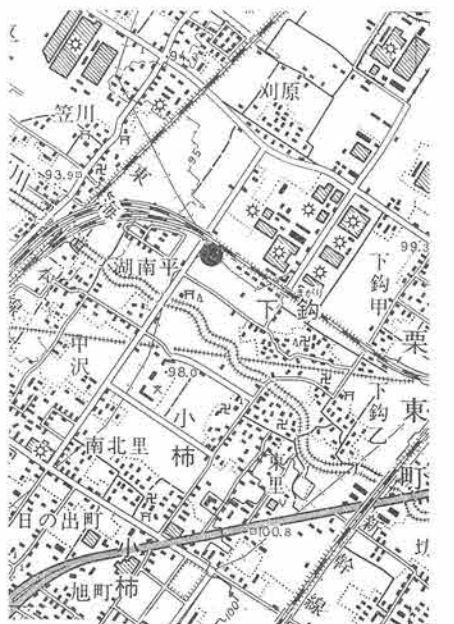


fig. 64 下鉤遺跡木器出土地点
(1: 25000 草津)



fig. 65 服部遺跡木器出土地点
(1:25000 堅田)



fig. 66 久野部遺跡木器出土地点
(1:25000 野洲)



fig. 67 光相寺遺跡木器出土地点
(1:25000 近江八幡)



fig. 68 十里町遺跡木器出土地点
(1:25000 長浜)

に集中し、約60棟の掘立柱建物と溝・井戸などを検出した。掘立柱建物は主軸方向によって2時期に大別でき、さらに出土の土器から、8世紀中葉・8世紀後半・9世紀後半～10世紀の3時期に区分できそうである。須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・木簡をはじめとして、木器・銅印・帯金具・刀子などが出土している。糸巻(0905)は黒色土器とともに土壌から出土し、9世紀後葉から10世紀代のもの。人形(4909)は、8世紀後葉の幅3m、深さ1mの溝SD05から出土(fig. 65)。

〔木器番号〕土壌；0905，SD05；4909

〔文献〕滋賀県教育委員会・守山市教育委員会『服部遺跡発掘調査概報』(1979年)

H 久野部遺跡(七ノ坪地区) く の べ

野洲郡野洲町久野部字七ノ坪に所在。1977年に滋賀県と野洲町が調査した。遺跡は野洲川右岸の標高95mの緩扇状地に立地し、弥生時代後期から12世紀まで断続的に形成された集落跡である。歴史時代の木器は、C地区の旧沼沢地に流れ込む幅1.7m、深さ50cmの溝SD10の開口部において、須恵器・土師器・黒色土器とともに出土した。土器は7世紀前葉を主体として、6世紀から8世紀までのものをふくむ(fig. 66)。

〔木器番号〕0814，0820，0822，1301，1310，2902，3009，4327，7024，7103，7104，7122，7240

〔文献〕谷口徹「木製品」『久野部遺跡発掘調査報告』滋賀県教育委員会・野洲町教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会(1977年) p. 33～35，82～88

I 光相寺遺跡 こうそうじ

野洲郡中主町吉地に所在。1982年に中主町が調査した。8世紀から9世紀前葉にかけての集落跡。掘立柱建物・井戸・溝などを検出し、木器は居住域を区切る幅2m、深さ50cmの溝から、8世紀中葉～末の須恵器や土師器とともに出土した(fig. 67)。

〔木器番号〕0815，2101，2310，3005

J 十里町遺跡 じゅうりちょう

長浜市十里町に所在。1977年に長浜市が調査した。縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物をふくむ自然流路と、歴史時代の遺構とが重複している。

歴史時代の遺構としては、掘立柱建物1棟・溝・土壌などを検出し、墨書銘のある須恵器や曲物などが出土。檜扇は、柱穴状の土壌内につきささった状態で出土した。遺構の年代は、土器によって8世紀後葉から9世紀前葉となる(fig. 68)。

〔木器番号〕1703

K 仏性寺遺跡 ぶっしょうじ

高島郡マキノ町蛭口に所在。1977年度のほ場整備事業にともなって滋賀県が調査した。調査地の東側で縄文時代後期の遺物包含層を、西側で各時代にわたる遺物を若干ふくむスクモ層を確認。スクモ層は耕作土直下にある植物の腐植層で、弥生時代中期、奈良～平安時代(8～9世紀)、中・近世の土器片と斎串・加工木・自然木などが混在する。地点によっては水田化以前の樹木の根ものこる。田下駄は付近の工事中にスクモ層から採集した(fig. 69)。

〔木器番号〕 0817, 4627

〔文献〕 山口順子「高島郡マキノ町仏性寺遺跡出土の田下駄」『滋賀文化財だより』No. 32 (1979年) p. 3～4

L 針江北遺跡 はりえきた

高島郡新旭町針江に所在。安曇川の沖積平野の微高地に立地する。1982年に国道161号バイパスに関連して滋賀県が調査した。平安時代前期(9世紀後葉～10世紀前葉)の遺構と弥生時代末期の遺構とが重複する。平安時代前期の遺構は方位を共通にする3棟の小規模な掘立柱建物と、井戸・土壇・溝・木堀とからなる。ともなう遺物に時期差がなく、遺構も重複していないので、短期間のうちに廃絶した集落を構成する1単位の遺構群とかがえられる。

木器は井戸SE01と土壇SK10とから出土。SE01は2間×1間の掘立柱建物の南東約4mにある井戸で、掘形は径0.8m、深さ0.65mの円形を呈し、中央の底から約20cmのところまで井戸枠としてすえた曲物が出土した。また井戸をおおう形で、建物群と方位を同じくする4本の柱穴を確認した。SK10は井戸の南西約3.5mのところにある径約1.4m、深さ0.5mの円形土壇で、底部から須恵器杯と曲物が横転した状態で出土した(fig. 70)。

〔木器番号〕 SE01; 3403 SK10; 3303

〔文献〕 兼康保明・尾崎好則・山口順子「針江北遺跡の調査」『国道161号線バイパス関連遺跡調査概要(昭和57年度)3』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会(1983年) p. 32～41

M 伊井永田遺跡 いいながた

高島郡今津町日置前に所在。箱館山から展開する扇状地に立地する。1979年度淡海地区団体営ほ場整備事業にともなって今津町が調査した。一辺0.7～0.8mの方形掘形をもつ、2間(3.2m)×2間(3.2m)の総柱掘立柱建物を検出し、同時に8世紀中葉の遺物包含層を検出した。奈良時代の集落跡であろう。

木器は遺跡の南限に近くの遺物包含層から出土し、木履・斎串・割物盆・曲物・用途不明品がある。同時にトチ・クルミの実、砥石、須恵器・土師器なども発見している(fig. 71)。

〔木器番号〕 2009, 2803, 2804, 2805, 2806, 3002, 3608, 3609, 4618, 7102

〔文献〕 葛原秀雄「伊井永田遺跡」『今津町文化財調査報告書 第2集』今津町教育委員会(1983年) p. 47～51

N 鴨遺跡 かも

高島郡高島町鴨に所在。1979年・1980年に滋賀県が調査した。鴨川右岸の扇状地上に立地し、官衙跡に推定できる。遺構は木堀に囲まれた150m四方のなかにまとまり、西側微高地上に位置する西地区では、掘立柱建物(3棟以上)・溝・井戸・土壇などを検出した。また、東地区では西地区ほど遺構は密集していないが、遺物を多量にふくむスクモ層が厚く堆積する。2地区ともに、出土した土器によって9世紀後葉～10世紀前葉の年代がかがえられる。

東地区のスクモ層からは、貞観15年(873)銘の木簡をふくむ木簡5点・銅印1顆・木履・仏像・人形・陽物形・斎串・櫛・杓子・曲物・盆・用途不明木器などとともに、緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器・土師器・黒色土器・種子などが出土した。西地区で検出した井戸は、長径2.4

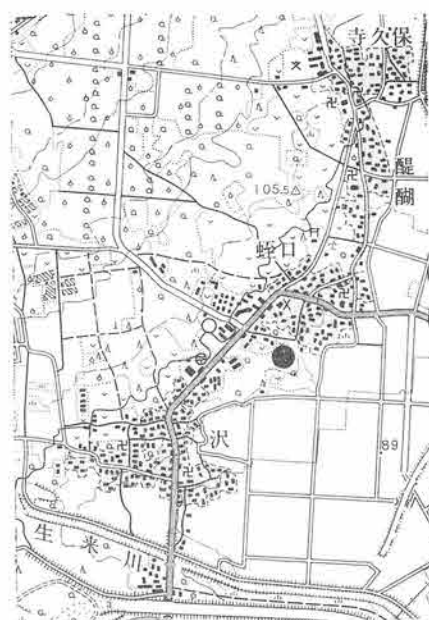


fig. 69 仏性寺遺跡木器出土地点
(1:25000 海津)

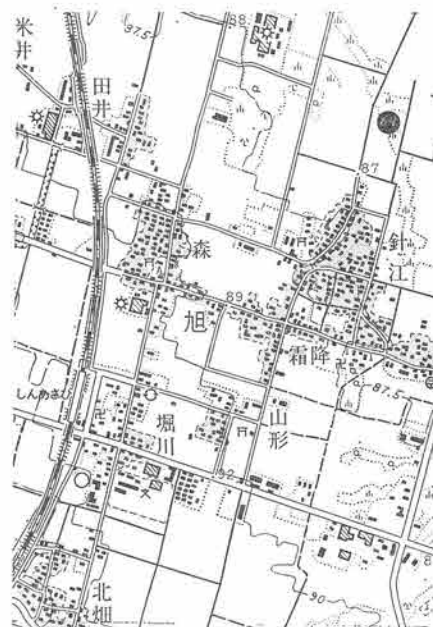


fig. 70 針江北遺跡木器出土地点
(1:25000 今津)

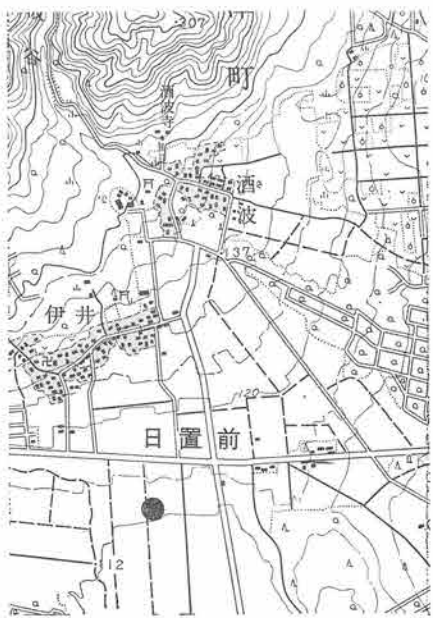


fig. 71 伊井永田遺跡木器出土地点
(1:25000 海津)

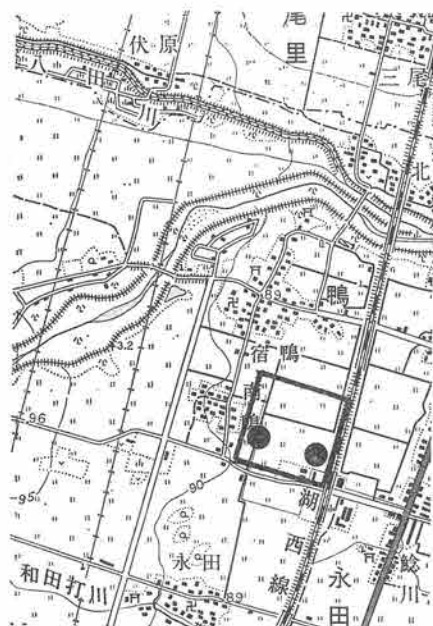


fig. 72 鴨遺跡木器出土地点
(1:25000 勝野)

m, 深さ70cmの楕円形の掘形の底に砂利を敷き、一辺約1mの板を井桁に3段以上組む。井戸の底から、井戸枠と礎とにはさまれたものもふくめて5本の斎串が出土し、このほか埋土の下層から土師器皿と緑釉陶器の小椀が各1点出土した(fig. 72)。

〔木器番号〕東地区遺物包含層；0713, 0808, 0812, 2005, 2006, 2104, 2208, 2307, 2309, 2801, 4005, 4309, 4311, 4314, 4328, 6110, 6111, 6112, 6207, 7235

西地区井戸；4719, 4720

〔文献〕兼康保明「井戸における斎串使用の一例—滋賀県高島郡高島町鴨遺跡の井戸—」『古代研究』19(1980年) p. 61~67

丸山竜平・兼康保明ほか『鴨遺跡』高島町歴史民俗叢書第二輯 高島町教育委員会・滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会(1980年)

3 京都府

A 長岡京跡 ながおかきょう

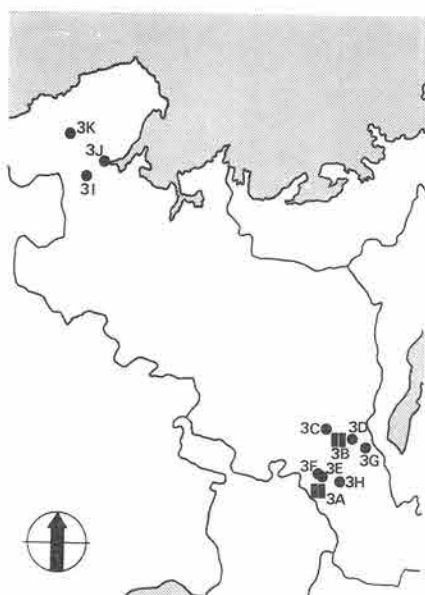


fig. 73 京都府の木器出土遺跡

京都府向日市鶏冠井町を中心にして所在。京域は東西4.3km, 南北5.3kmの方形を呈し、大極殿跡・第2次内裏跡・第2次内裏南方の築地跡など、宮域の一部が史跡に指定されている。1954年から本格的な発掘調査を開始し、現在、向日市・長岡京市・大山崎町・京都市・京都府の5行政機関が発掘調査を実施している。向日丘陵が平地に移行する低位段丘上に宮域を配し、左京域はこれに連なる標高13~15mの桂川氾濫原上に、右京域は西山丘陵からのびる低位段丘上に位置する(fig. 74)。

宮域や右京域は乾燥しやすい段丘上にあるため、木器の大半が左京域の条坊の側溝や井戸、ごみ捨て用の土坑から出土する。木器や土器の年代は、伴出する木簡によって年代を確定することができ、長岡京遷都~第2次内裏造営時(784年~789年)と第2次内裏造営~長岡京廃都時(789年~794年)との2時期に大別できる。なお、長岡京の土器の年代は、平城宮の型式編年での第Ⅵ期に相当する。

1 長岡宮北辺官衙の川SD3100 (7AN5地区 30・31次調査)

宮域の北辺にある東西8町, 南北4町域を北辺官衙地区とよぶ。1970年, 向日市立向陽第三小学校の建設にさきだて、この地域を京都府が調査した。調査地は北辺官衙地区の南辺中央部, 標高14.0m前後の旧石田川の氾濫原上に位置し、遺物は旧石田川の流路にあたるSD3100から出土した。SD3100は杭で護岸した幅5.6mの小河川で、北東の沼に流入している。SD3100の東には総柱の掘立柱建物1棟がある。

SD3100から出土した遺物には、木器・木簡・土師器・須恵器などがある。木器は収録したものほかに、人形・斎串・櫛・漆器・部材などが出土している。木簡は物品整理札で、「八條四甕納米三斛九斗」と記しており、倉庫に収納した米の容器(甕)に付けたもの(fig. 75)。

〔木器番号〕0108, 2415, 2446, 4008, 5803, 6712

〔文献〕吉本堯俊・北山惇・浪貝毅『森本遺跡 発掘調査概報』長岡京発掘調査団(1970年) p. 23~28

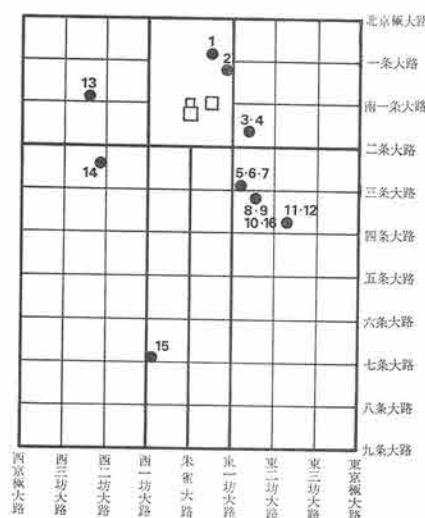


fig. 74 長岡京跡条坊概念図

中山修一・小林清・吉本堯俊・浪貝毅・末本信策「長岡京昭和44年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1971』京都府教育委員会（1971年）p. 4～11

2 長岡宮東方官衙北部の川 SD8701 (7AN3A・7AN3B地区 87・125次調査)

宮域の東辺に所在する南北8町分を東辺官衙地区とよぶ。向日市が1978年に調査した地域はその北端の官衙区画、前項調査地の南東部に位置する。

遺物は旧石田川の流路跡の一部であるSD8701から出土した。前項の第30次調査区はこの川の上流にあたる。SD8701は、幅10m、深さ0.4mで、北西から南東に流れる。杭などの護岸施設はないが、SD8701を渡るための橋SX8700を設ける。SX8700は川の両肩から約3mへだたった位置に、4m前後の間隔で杭(径20cm前後、長さ約2m)を8対打込んで橋脚をつくる。遺物は橋直下の堆積土である砂礫層のなかから多数出土した(fig. 75)。

遺物には、木器・木簡・土師器・須恵器・二彩陶器・軒平瓦・土馬・紡輪・銭貨(萬年通寶・神功開寶)・獣骨・種子などがある。木器では収録したものほかに木皿・櫛・箸がある。木簡は、巻物の軸につけた題籤で、「人物志三巻」と記されていた。土器はすべて長岡京時代(784年～794年)の特徴をもち、「人物志」という書物をそなえた某官庁の不用品が廃棄されたもの。

〔木器番号〕1811, 1812, 7217

〔文 献〕山中章「長岡宮跡第87次(7AN3A地区)発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書第5集』向日市教育委員会（1979年）p. 27～41

3 左京二条二坊六町の中央溝 SD1301 (7ANESH-1・2・4・6地区 左京13・22・51・95次調査)

左京二条二坊六町は、標高13m前後の桂川の氾濫原上に立地する。向日市が1977年～1980年に行った4次にわたる調査によって、東二坊坊間小路西側溝・六町内を区画する溝・掘立柱建物・井戸・橋などを検出した。とくにSD1301から出土した大量の木簡によって、太政官をはじめとする二官八省の財政運営に重要な役割をはたした太政官厨家が六町内に存在したことが判明した(fig. 75・76)。

SD1301は幅4m、深さ0.6mの素掘り溝。六町の中央を西から東へ流れる排水溝として機能する。埋土は上・下2層にわかれ、出土木簡の年紀によって下層の埋没年代が延暦8年正月以前、上層が延暦9年5月～延暦13年(790～794)であることがわかる。下層の砂層から土器類や80点の木簡が出土したほか、上層にはない銭貨(和同開珎・萬年通寶・神功開寶)が大量に存在した。下層に土砂が堆積したのち溝は部分的に改修され、西方では1.5mに幅を狭め両岸に板をあてて護岸する。東方では溝本体に改作をくわえず、いろいろな構造の橋を設ける。上層(褐色粘質土)からの出土遺物は多く、327点の木簡をはじめ、土師器・須恵器・軒瓦・土馬・墨書人面土器・製塩土器・二彩陶器・鉄製品・青銅製品・獣骨・凝灰岩など多種多様な遺物がある。溝を埋めるために一時に投棄されたのであろう。

木器には収録したものほか、櫛・桼扇・フォーク状木器・箸・鞘などがある。とくに上層から出土した人形は大・中・小型のものが組合っており、使用方法を推測しうる好例である。こうしたSD1301の遺物は、長岡京時代の基準資料になっている。

〔木器番号〕0110, 0211, 0212, 0213, 0215, 0219, 0225, 0324, 0712, 0819,

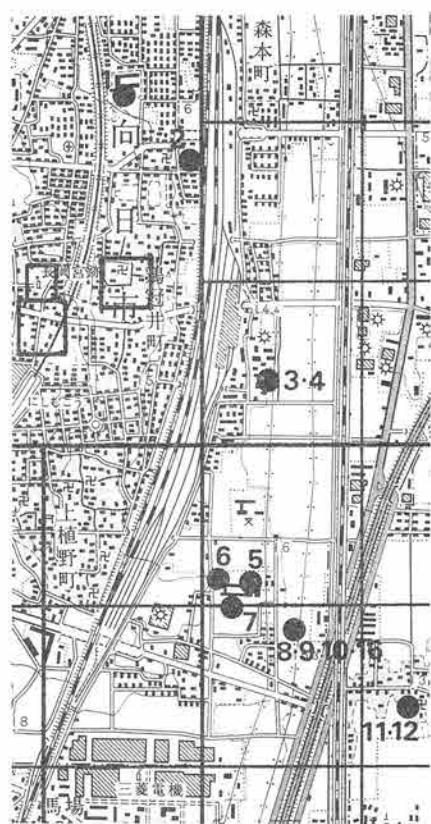


fig. 75 長岡京跡木器出土地点 宮域・左京 (1:25000 京都西南部)

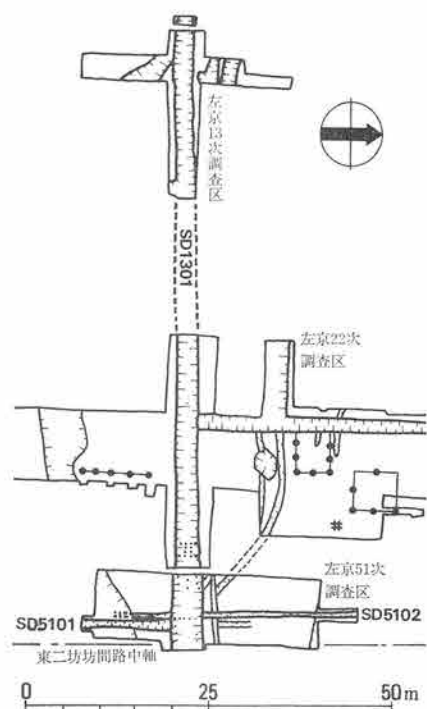


fig. 76 長岡京左京二条二坊六町遺構略図

1010, 1316, 1907, 1929, 1935, 1939, 1940, 1941, 1942, 2002, 2435, 2508, 2601, 2607, 2802, 3810, 3811, 3909, 3911, 3916, 3917, 4006, 4017, 4023, 4024, 4029, 4032, 4105, 4212, 4215, 4223, 4224, 4225, 4239, 4308, 4312, 4511, 4516, 4725, 4915, 4917, 5001, 5107, 5108, 5109, 5110, 5111, 5202, 5301, 5302, 5305, 5306, 5410, 5411, 5515, 5616, 5617, 5732, 5740, 5812, 6003, 6405, 6411, 6601, 6603, 6614, 6615, 6715, 6822, 6823

〔文 献〕 山中章・中尾秀正・高橋美久二・百瀬正恒・百瀬ちどり・石尾政信・徳丸始朗・中山修一「長岡京跡左京第13次（7ANESH地区）発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書第4集』向日市教育委員会（1978年）p. 1～39
山中章・清水みき「長岡京跡左京第51次（7ANESH—4地区）～左京二条二坊六町～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書第7集』向日市教育委員会（1981年）p. 79～136

4 東二坊坊間小路の西側溝 SD5101・SD5102（7ANESH—4地区 左京51次調査）

東二坊坊間小路は、向日市が1980年までに行った4回の調査によって左京域をとる重要な道路の一つであることが明らかになった。左京二条二坊六町に接して検出した西側溝 SD5101・SD5102は、東二坊坊間小路の拡幅によってつけ替えたもので、SD5101が拡幅前、SD5102が拡幅後のものである（fig. 76）。

SD5101は幅1.3m、深さ0.3m～0.5mの素掘り溝で、南から北へ流れて、六町の中央溝SD1301に注ぐ。共伴遺物には土師器・須恵器がある。木器は収録品以外に、大型人形・斎串・櫛・箸・曲物・刀子柄などがある。SD5102は幅0.8m、深さ0.2～0.3mの素掘り溝で、北から南へ流れる。共伴遺物には土師器・須恵器・瓦等がある。木器にはほかに櫛・箸がある。

〔木器番号〕 SD5101；0105 SD5102；2420

〔文 献〕 山中・清水前掲書

5 左京三条二坊四・五町の溝 SD0210（7ANFNT—1・2地区 左京2・4次調査）

左京三条二坊四町・五町にあたる向日市上植野町西大田において、京都府立向陽高校が建設されることになり、1974年・1975年に京都府が発掘調査を行った。長岡京時代の遺構としては三条大路両側溝・町域内の南北溝・掘立柱建物・井戸などを検出。ほかに長岡京造営以前の水路、平安・鎌倉時代の掘立柱建物もあった（fig. 75・77）。

長岡京時代の遺構は、「鮭背綿」などの木簡、「西宮」の墨書土器10数点が出土したので官衙的な遺構に比定しうる。SD0210は長岡京時代の掘立柱建物SB0203の建設に際し埋めたた奈良時代の溝。台地部では幅1.7m、深さ0.5mで安定した位置を流れるが、平地部では幅4～11mとひろがり、10数列の護岸杭列を打込む。土師器・須恵器・曲物・斎串・人形などが出土し、人形には等身大に復原しうる大型人形2点をふくむ。

〔木器番号〕 4604, 4624, 4710, 4924, 5406

〔文 献〕 高橋美久二「長岡京跡左京三条二坊第1次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1975）』京都府教育委員会（1975年）

高橋美久二・百瀬正恒・徳丸始朗「長岡京跡左京三条二坊第2次発掘調査概要」

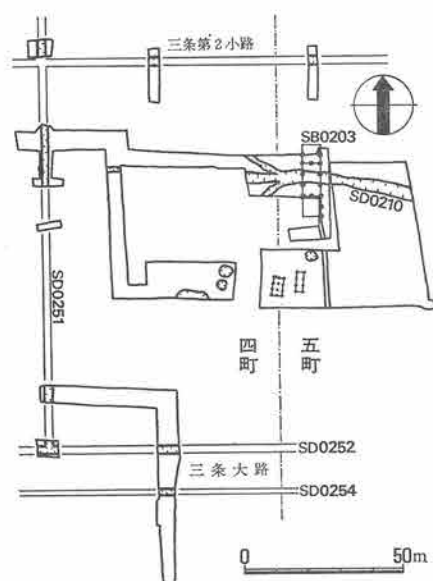


fig. 77 長岡京左京三条二坊四・五町遺構略図

『埋蔵文化財発掘調査概報（1976）』京都府教育委員会（1976年）

6 左京三条二坊四町の溝 SD0251（7ANFNT—1・2地区 左京2・4次調査）

幅 1.6～2.2 m，深さ 0.4 m の南北溝。三条二坊四町をほぼ東西に2分する長岡京時代の溝である。発掘当時は長岡京の条坊が平安京型に復原されていたので，東一坊大路東側溝に比定された。木簡5点をはじめ，人形・曲物・土馬・箸・櫛・鎌柄・瓦・陶硯・萬年通寶・神功開寶・灰釉陶器が大量の須恵器・土師器とともに出土し，長岡京土器の基準資料である（fig. 77）。

〔木器番号〕 5102, 5112, 6631

〔文 献〕 同 上

7 左京三条二坊の三条大路南側溝SD0254（7ANFNT—1・2・4地区 左京2・4・71次調査）

幅1.5m，深さ0.3mの東西溝。北側の溝SD0252とともに長岡京時代の三条大路側溝となる。それによって三条大路の路面幅 10 m，両側溝をふくむ幅員 14.7 m がわかる。溝からは平瓦片がかなりの量で出土したほか，若干の須恵器・土師器の破片が出土した（fig. 77）。

〔木器番号〕 4822

〔文 献〕 同 上

8 左京四条二坊九町の溝 SD1501（7ANFOT—1地区 左京15次調査）

左京四条二坊九町は，標高 14.5 m 前後の旧小畑川の氾濫原上に立地する。向日市による3回の調査を通じて，三条大路南側溝・九町内の排水溝・掘立柱建物・井戸・土壌などを検出し九町の町域利用のほぼ全容が明らかになった。九町の北西にあたる左京三条二坊四町では「西宮」の墨書土器が多量に出土し，九町西端で検出した井戸の木簡によって，九町は「西宮」に関係する兵士の駐屯地にあてられる。SD1501は幅 3.5 m，深さ 0.2 m の素掘り溝で，町域内の排水溝として機能する。共伴遺物には，土師器・須恵器がある（fig. 75・78）。

〔木器番号〕 2603

〔文 献〕 山中章「長岡京跡左京第15・27次（7ANFOT—1・2地区）発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書第6集』向日市教育委員会（1980年）p. 31～85

9 左京四条二坊九町の井戸 SE2714（7ANFOT—2地区 左京27次調査）

左京四条二坊九町の北西部で検出した曲物二段組の井戸。掘形の直径は 0.7 m，深さ 0.5 m をはかり，上段に直径 47 cm，高さ 13 cm，下段に直径 41 cm，高さ 29 cm の曲物をすえる。井戸底には木炭や小石を敷く。井戸のなかからは須恵器の皿一点が出土した（fig. 78）。

〔木器番号〕 3409

〔文 献〕 同 上

10 左京四条二坊九町の井戸 SE2708（7ANFOT—2地区 左京27次調査）

左京四条二坊九町の北部中央で検出した縦板と二段の曲物とを組合せた井戸。掘形は直径 1.5 m，深さ 0.75 m。なかから土師器・須恵器が出土している（fig. 78）。

〔木器番号〕 3411

〔文 献〕 同 上

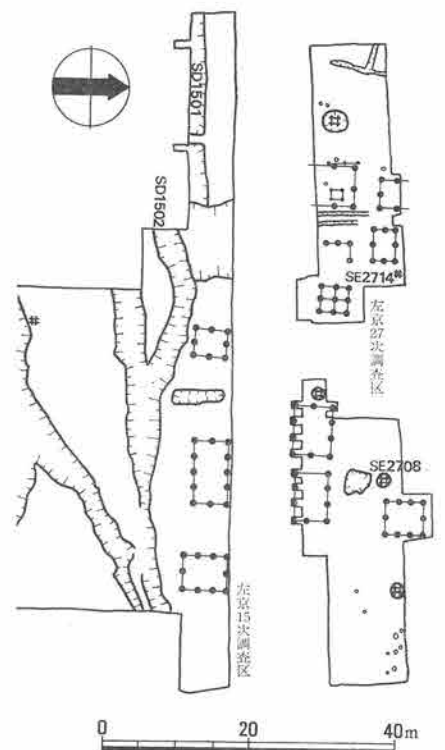


fig. 78 長岡京左京四条二坊九町遺構略図

11 左京四条三坊の溝SD451

1980年8月以降、京都市伏見羽束師菱川町で外環状線建設のため、京都市埋蔵文化財研究所が継続調査を行っている。調査地は長岡京左京四条二坊十四町、三坊三・六・十一・十四町、四坊三・六町にあたり、各町の北部を約20m幅で調査している。総延長は東西800mにおよび、長岡京時代の遺構としては、東一・二・三坊大路などのほかに、多数の掘立柱建物・木堀・井戸・溝・土塋などがある。しかし、三坊三町の一部、六町の大半は平安時代の流路によって削られていた。木器は長岡京時代の溝SD451や井戸SE80などから出土。他の注目すべき遺物として、土塋SK01から出土した漆紙文書「戸籍」断簡がある。下層では弥生時代の竪穴住居跡・溝・土塋、古墳時代の溝・土塋・水田など多数の遺構、遺物を検出した(fig. 75)。

SD451は幅1.1~1.3m、深さ0.2m~0.4mの素掘りの南北溝で、北で約21度西偏する。延長15.0mを検出した。埋土は上層が灰色砂、中層が暗灰色腐植土、下層は暗灰色泥土である。木器の人形・挽物壺は長岡京時代の土師器・須恵器等とともに腐植土層から出土した。他に木簡1点がある。

〔木器番号〕2502, 5309, 7107

〔文献〕長宗繁一・本弥八郎「左京四条三坊」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所(1984年)p. 84~86

12 左京四条三坊六町の井戸SE80

一辺1.0mの方形縦板組の井戸。径1.4mの円形掘形内の四隅に径7~15cmの柱をたて枘穴をあけて4段に横棧をわたし、その外側に幅5~20cmの板を各辺7~10枚たて並べる。埋土の上層は褐色・茶褐色砂層で、長岡京時代の遺構面を覆う平安時代の流路の埋土と同じである。中層は茶褐色砂礫層、下層は灰色泥土層である。人形・箸・斎串などの木器は長岡京時代の土師器・須恵器等とともに、下層の灰色泥土から出土した(fig. 75)。

〔木器番号〕4616, 4617, 4805, 4806

〔文献〕同上



fig. 79 長岡京跡木器出土地点(右京1)
(1:25000 京都西南部)

13 右京一条三坊五町の旧流路(7ANGTE地区 右京22・25次調査)

右京一条三坊五町内を蛇行する古墳時代の旧河川で、善峰寺川旧流路とかんがえられる。長岡京時代には、これを埋め立てて、杭列によって護岸した幅0.8~1mの数条の溝を設ける。長岡京時代の遺物に、土器・銅銭・瓦、斎串・櫛・人形・下駄などの木器がある(fig. 79)。

〔木器番号〕2102, 2103

〔文献〕長岡京市教育委員会『(仮)長岡第十小学校建設に伴う発掘調査(長岡京右京第25次発掘調査7ANGTE地区)現地説明会資料』(1979年)

14 右京三条三坊の今里車塚古墳周濠(7ANITT地区 右京7・13・26次調査)

長岡京西二坊大路の二条から三条にいたる都市計画街路の建設にともない、京都府は1977年~1981年に発掘調査を実施し、西二坊大路・弥生時代から古墳時代にかけての集落(今里遺跡)・前方後円墳(今里車塚古墳)を検出した。今里車塚古墳は地上に痕跡をとどめないが、全長約75m、後円部径約47mの周囲に、幅約12mの楕形の周濠がめぐる前方後円墳である。周濠から

埴輪・木製蓋など古墳時代の遺物、長岡京時代の土師器・須恵器・木器などが出土した。長岡京時代の木器には、木皿・曲物・槽・刀子柄・刀形・人形などがある。土器類のなかにも墨書人面土器・「大祁」銘の須恵器など祭祀遺物が多いことが注目される。長岡京造営に際して、今里車塚古墳のくびれ部を横断する西二坊大路をつけたので、埴丘を削平し周濠を埋めるときに、これらの祭祀具がつかわれたのであろう(fig. 79)。

〔木器番号〕2608, 6616, 6617, 6618

〔文 献〕高橋美久二ほか「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 1980—2』京都府教育委員会(1980年) p. 1~265

15 右京七条一坊十三町の恵解山古墳周濠

恵解山古墳は全長 120m の前方後円墳で山城地方で最大規模をもつ。周濠の調査は道路建設と小学校建設にともなって2回実施し、その幅が 20m 前後であることがわかった。堆積層の遺物は多くないが、下層の葦石にまじって埴輪が、上層から挽物・曲物・下駄などの木器、土師器・須恵器などが出土し、上層の年代が長岡京時代から平安時代前期に推定できる(fig. 80)。

〔木器番号〕2114

〔文 献〕三上貞二『恵解山古墳周濠第二次調査概報』長岡京市文化財調査報告書 第3冊(1975年) p. 13~14

16 左京四条二坊の川SD1502(中福知遺跡)

向日市上植野町中福知に所在。西山丘陵に発した小畑川が、向日丘陵の南端で東折する標高 14m 付近の北岸に立地する。1976年以降、向日市が長岡京跡の調査と並行して10数回の調査を行った。長岡京廃都直後から平安時代末までの集落跡。井戸・土壇・旧小畑川の支流を検出した。『類聚三代格』によれば長岡京廃都直後の延暦14年にこのすぐ北の旧条坊跡に近衛府の蓮池や勅旨省の藍畑を設けている。出土遺物の主なものには、緑釉陶器・黒色土器・瓦器・土師器・須恵器・銭貨(隆平永寶・富寿神寶・乾元大寶)・獣骨などがある。

収録の木器は、すべて平安時代の旧小畑川の支流 SD1502 から出土した。SD1502 は幅 3.5 m、深さ 0.7 m 前後で、西から東へ流れる。3 個所に堰を設け、木器はこれにからむようにして発見された。ほかに土師器・須恵器、弘仁9年初鑄の富寿神寶がある。その他の木器としては井戸枠に転用した大型の曲物がある(fig. 75・78)。

〔木器番号〕2209, 3110

〔文 献〕前掲 山中「長岡京跡左京第15・27次(7ANFOT-1・2地区)発掘調査概要」p. 31~86

B 平安京跡 へいあんきょう

平安京は京都盆地の北部、鴨川と御室川にはさまれた地に南北9条(38町)、東西8坊(32町)を占地し、延暦13年(794)に設定された都である。発掘調査は平安博物館・京都府教育委員会などが昭和30年代なかばから開始し、つぎに京都市文化観光局文化財保護課の手で、現在では京都市埋蔵文化財研究所が主体的に調査している。木器は右京の二条三坊、三条三坊、七条二坊(西市跡)、右京の四条三坊、五条三坊などから出土するが、平安宮内での出土例はきかない。右京域の木器は平安時代前・中期が多く、左京は平安時代後期以降のものが多い(fig. 81)。

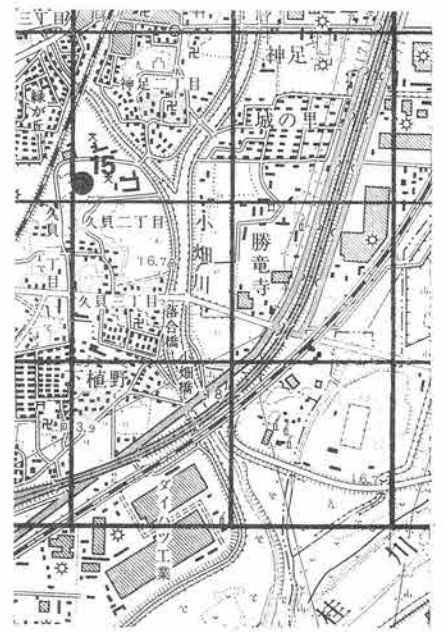


fig. 80 長岡京跡木器出土地点(右京2)
(1:25000 淀)

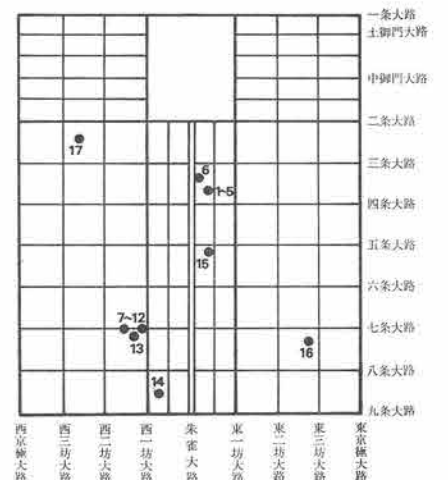


fig. 81 平安京条坊概念図

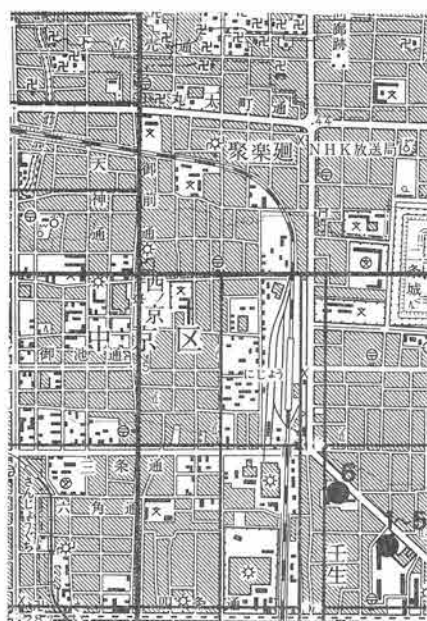


fig. 82 平安京跡木器出土地点 (1)
(1:25000 京都西北部)

1 左京四条一坊五・六町の井戸SE07A

京都市中京区壬生坊城町・壬生馬場町に所在。1974年・1975年・1976年に平安京調査会が調査。四条一坊五・六町は平安時代後期の貴族である藤原國明の邸宅跡にあたる。四条坊門小路の両側溝と路面などの条坊遺構・掘立柱建物・井戸・土壇・溝などを発見した。土壇・井戸などには平安時代初期に遡るものがある。四条坊間小路の側溝は平安時代初期から鎌倉時代末まで存続し、3回の改修築を行う。建物は平安時代後期から鎌倉時代のものが多い(fig. 82)。

SE07Aは、径1.2m前後の円形掘形をもつ方形縦板組の井戸。井戸枠は一辺0.5m前後で、幅0.07~0.3mの不揃いの板をたて並べ、四隅には柱をたてる。堆積土から平安時代前期の土師器・須恵器・黒色土器などとともに、斎串・人形・木簡「船仁丸苛紫仲」が出土した。

〔木器番号〕 4702, 4718, 4721, 4734, 5510

〔文献〕 吉川義彦ほか『平安京跡発掘調査報告—左京四条一坊』平安京調査会(1975年)
p. 36~39

2 左京四条一坊五・六町の井戸SE01

一辺0.9mの掘形をもつ方形縦板組の井戸。井戸枠は一辺0.55m前後で、幅0.15~0.2mの板を各辺5~7枚たて並べ、内側を上下二段の横棧で固定する。井戸の埋土は上層から暗緑灰色泥砂、黒褐色泥土とつづき、茶灰色砂泥土が底の堆積である。木器は黒褐色泥土から土師器・山茶碗・瓦器羽釜などとともに出土した(fig. 82)。

〔木器番号〕 1706, 1707, 5310, 5311

〔文献〕 同上

3 左京四条一坊五・六町の第Ⅰトレンチ第3層

四条坊門小路から南方にかけてひろがる遺物包含層(灰褐色泥砂)。9世紀前半から後半にかけての土器を多量にふくむ。四条坊門小路の南北両側溝は、この層を掘込んでいる。土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器などとともに木器が出土した(fig. 82)。

〔木器番号〕 5105

〔文献〕 同上

4 左京四条一坊五・六町の溝SD01

幅1.8m、深さ0.5mの素掘り溝。四条坊門小路の北側溝にあたる。溝の埋土は茶褐色泥砂・黒灰色泥砂・黒褐色泥土などにわかれ、木器は茶褐色泥砂から土師器・瓦器羽釜・瓦器鍋・白磁碗・白磁壺などとともに出土した(fig. 82)。

〔木器番号〕 1915, 1922

〔文献〕 同上

5 左京四条一坊五・六町の土壇SK03

南北約3m、東西2m以上の不整形の土壇。青灰色泥砂が堆積し、須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器など平安時代初頭の遺物と木器が出土した(fig. 82)。

〔木器番号〕 5811

〔文献〕 同上

6 左京四条一坊一町の土壌

京都市中京区壬生朱雀町に所在する。1975年・1976年に平安京調査会が調査した。左京四条一坊の北西隅に近く、土壌・溝・建物を検出した。琴柱は東西幅6 m以上の不整形な浅い土壌から出土し、伴出した須恵器・土師器・緑釉陶器によって9世紀後半から10世紀の年代が推定される(fig. 82)。

〔木器番号〕 4519

〔文 献〕 (財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選』(1983年)p. 41

京都市『史料京都の歴史』第2巻考古(1983年)p. 107

7 右京西市跡の井戸SE03B

平安京の西市は右京七条一坊・七条二坊・八条二坊に十二町を占地し、京都市下京区西七条北依田町・西七条南中野町に所在する。京都市埋蔵文化財研究所による発掘調査が過去数回行われている。木器が出土したのは、1977年～1978年、1979年の調査である。検出した主要な遺構として七条大路側溝・溝・掘立柱建物・井戸・祭祀遺構などがある。なかでも七条二坊十二町の南東部の調査では市を細分する南北溝・東西溝・掘立柱建物・土壌・祭祀遺構を発見し、遺物には200枚をこえる皇朝十二銭がある。さらに木簡にも「承和五千文安繼」「承和六貫文」など商取引を暗示するものがある。

SE03Bは右京七条二坊十二町の南東部にある井戸である。径2.0 mの円形掘形をもつ。使用年代は2時期にわかれる。当初のSE03Aは一辺0.9 mの方形縦板組の井戸。のちになってその上部に改作した井戸SE03BはSE03Aの掘形を掘り下げて旧井戸枠の上端を水平にそろえ、四隅に0.3×0.6 mの板をおいて基盤とする。その上に23枚の板を組合わせて、隅丸三角形を呈する桶状の井戸枠を組上げる。枠板は幅15 cm、厚さ約5 cmで、下部に柄孔をあけて上下の板を屢柄でつなぐ。埋土は二層にわかれ、下層(灰色砂泥)から富寿神寶・土師器・須恵器・緑釉陶器などが検出され、上層(腐植土混じりの暗灰色泥砂)から多量の土器・木器・貞観永寶が出土した(fig. 83)。

〔木器番号〕 1008, 1908, 2202, 2204, 2205, 2206, 2439, 3913, 4323, 4324, 4407, 4415, 4518, 4704, 6416, 6905

〔文 献〕 前掲『平安京跡発掘資料選』一部資料の紹介

前掲『史料京都の歴史』第2巻考古 p. 116～117

8 右京西市跡の井戸SE20

一辺0.5 m、深さ1.6 mの方形縦板組の井戸である。井戸の埋土は四層にわかれ、最下層からは承和昌寶が29枚重なって出土した。これとは別に隆平永寶・長年大寶・饒益神寶など計53枚の銅銭が出土している。土器類も土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器など多彩である。木器は挽物盤・箸・杓子・下駄などの生活用品と斎串などの祭祀遺物がともに出土した(fig. 83)。

〔木器番号〕 1702, 1704, 2305, 2306, 2705, 2707, 3113, 3114, 3508, 4216, 4229, 4709, 4735, 4812, 5721, 6503, 6510, 6511, 6607, 6620

〔文 献〕 同 上

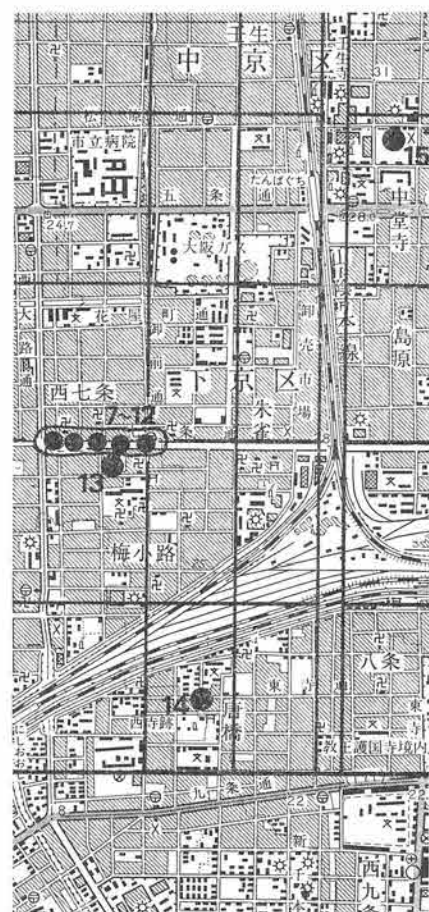


fig. 83 平安京跡木器出土地点 (2)
(1:25000 京都西南部)

第Ⅲ章 遺跡解説

9 右京西市跡の溝SD12

幅 0.5 m、深さ 0.2 m の東西溝で、両岸を板で護岸。溝の西端は SD05 と接し、東端は板で斜めに閉じており、東西長 4.7 m をはかる。南肩の中央部には幅 0.1 m、長さ 1.3 m ほどの板を敷き、その上に須恵器瓶子・土師器杯・甕・斎串を置いていた。漆器皿は溝のほぼ中央部から、9 世紀中葉の土師器・須恵器などとともに出土した(fig. 83)。

〔木器番号〕 2405, 6514

〔文 献〕 同 上

10 右京西市跡の遺物包含層A区5層

SX10・SD12 など、9 世紀中葉の遺構の下層で遺物包含層(暗灰色泥砂)を検出した。木器は 9 世紀前半の土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器などとともに出土(fig. 83)。

〔木器番号〕 2422, 4013

〔文 献〕 同 上

11 右京西市跡の祭祀遺構SX10

SD12 の東端、南側に位置する。遺構は径 16 cm の土師器杯を 2 個体正位置で南北に並べ(1 個体は底部中央に穴をあける)、すぐ西には両端に挟みを入れた長さ 0.7 m の棒を南北方向におく。土師器と棒の間に、富寿神寶・承和昌寶を 12 枚ばらまく(fig. 83)。

〔木器番号〕 7117

〔文 献〕 同 上

12 右京西市跡B区の土壌SK15

トレンチ北端で検出した東西溝 SD13 に削られた焼土が混じる土壌。規模は長辺 3.0 m、短辺 1.8 m 以上、深さ 0.2 m。出土の土器は 9 世紀前半にぞくする(fig. 83)。

〔木器番号〕 4016

〔文 献〕 同 上

13 右京西市跡の井戸SE03

下京区西七条南中野町に所在。1979 年に京都市埋蔵文化財研究所が調査。右京八条二坊八町にあたり、建物・井戸などを検出した。木器が出土した SE03 は、一辺 1.1 m、深さ 1.6 m の方形縦板組の井戸で、掘形は 2.1×2.0 m の方形を呈する。発掘したとき南辺部の側板は内側に倒れ、その上から土器がかたまって出土した。井戸底から曲物 4 個と須恵器杯が正位置で出土。ほかには、須恵器・土師器・隆平永寶・富寿神寶・刀子・櫛・斎串などがある(fig. 83)。

〔木器番号〕 1805, 1810, 3309, 3401

〔文 献〕 中村敦『平安京西市跡—南病院中棟新築に伴う発掘調査の概要—』(財)京都市埋蔵文化財研究所(1979年)

14 西寺跡の井戸SE01(12次調査)

西寺跡は京都市南区唐橋西寺町に所在する。平安京の二大官寺の一つであったが、平安時代中期後半の火災で壊滅的な打撃をうけた。発掘調査は 1960 年から 20 数回行われ、南大門・中

門・回廊・金堂・僧房・小子房・食堂などの伽藍配置があきらかになった。伽藍中心部の調査が多いためか、遺物は瓦を除いて多くはない。木器は京都市埋蔵文化財研究所による1980年の調査で出土。また、西寺関連遺構の下層からは弥生～古墳時代の遺構・遺物が発見されている。

木器が出土した井戸 SE01 は西寺食堂院の東北約15 mに位置し、西寺大炊殿・食堂に関連するとかんがえられる。一辺 2.3 m の方形横板組の井戸で、井戸枠2段(高さ0.6 m)をのこす。井戸枠上部に4層の堆積層があり、とくに第3層上面からは炭化木片とともに多量の遺物が出土した。井戸枠内の埋土は青灰色砂質土・青灰色粘質土・茶褐色砂礫などで、青灰色粘質土から木器が出土した。土師器・須恵器・黒色土器・二彩陶器・緑釉陶器・灰釉陶器・土馬など多様な遺物がある。ほかに富寿神寶が10枚もある(fig. 83)。

〔木器番号〕 1804, 4025, 4525, 5509, 6013

〔文 献〕長宗繁一・鈴木久男「西寺井戸跡」『平安京跡発掘調査概報—京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978-II—』(財)京都市埋蔵文化財研究所(1978年) p. 48～61

15 左京六条一坊八町の井戸SE03

京都市下京区中堂寺命婦町に所在。平安京左京六条一坊八町の南半部にあたり、1983年、京都市埋蔵文化財研究所が調査。近世の採土跡と平安時代後期～鎌倉時代の井戸11基を検出した。SE03は方形縦板組の井戸で、底に曲物をすえる。11世紀後葉(fig. 83)。

〔木器番号〕 6211

〔文 献〕平尾政幸・梅川光隆・辻純一「左京六条一坊」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所(1984年) p. 23～24

16 左京八条三坊九町の遺物包含層

京都市下京区烏丸通木津屋橋上る東塩小路町に所在。1977年、京都市高速鉄道烏丸線遺跡調査会が調査を行い、平安時代中期の遺物包含層と、平安時代後期から現代に至るまでの各時期の遺物包含層・井戸・土壌などを検出。収録した人面木器は、平安時代中期の遺物を包含する淡灰色シルト層から出土した。この層は、遺物をふくまない黄褐色砂礫層の窪んだ部分に堆積しており、自然堆積層とかんがえられる(fig. 84)。

〔木器番号〕 5417

〔文 献〕小森俊寛・原山充志「No. 74」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ(1977～1981年度)』(1982年) p. 135～143

17 右京三条三坊十町の木棺墓

京都市中京区西ノ京徳大寺町に所在。1979年に京都市埋蔵文化財研究所が調査。9世紀から10世紀後半にかけての邸宅跡で、掘立柱建物8棟・木塀4・土塀・宅地区画溝などを検出した。建物は方位によって2時期にわかれ、溝・木塀によって区画の変遷がわかる(fig. 85)。

収録した漆器は宅地の西北隅で検出した木棺墓から出土。墓壙は南北 1.9 m, 東西 0.6 m, 棺は長さ 1.6 m, 幅 0.4 m。棺蓋板上に土師器皿2枚をおき、棺内には、須恵器瓶子2個体・両面黒色土器椀・和鏡・漆器の角盆を副葬する。棺内北端部に納めた漆器の角盆上には漆皮皿・漆器合子・墨・銅製毛抜き・小玉・黄楊製の棒がのっており、合子内には白粉状のものを入っていた。黒色土器・土師器皿は10世紀後半のもの。

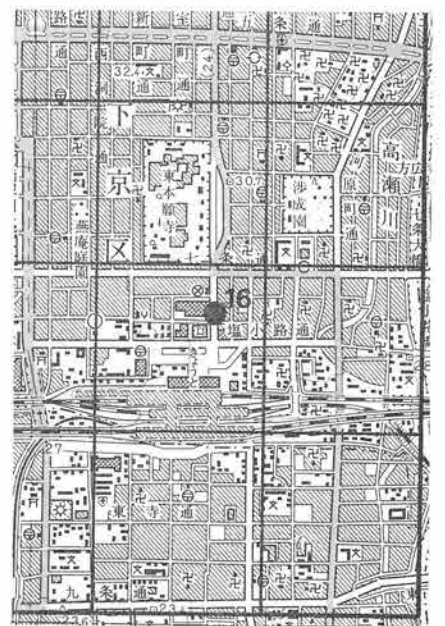


fig. 84 平安京跡木器出土地点(3)
(1:25000 京都東南部)

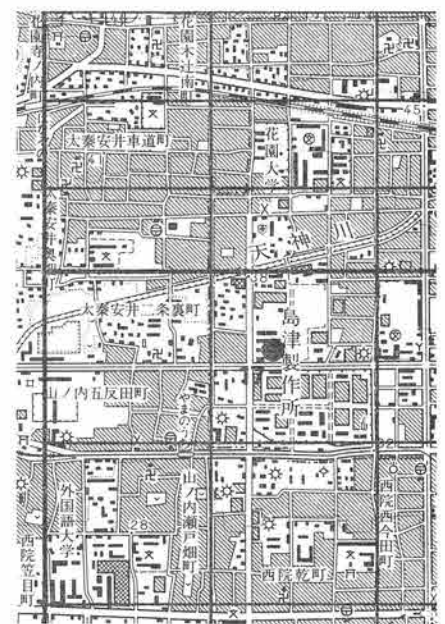


fig. 85 平安京跡木器出土地点(4)
(1:25000 京都西北部)

〔木器番号〕 2411

〔文 献〕 前掲『平安京跡発掘資料選』図版23—69

前掲『史料京都の歴史』第2巻考古 p. 111



fig. 86 仁和寺南院跡木器出土地点
(1:25000 京都西北部)

C 仁和寺南院跡 にんなじなんいん

京都市右京区宇多野御屋敷町に所在。京都市埋蔵文化財研究所などが数回調査が行い、園池・礎石建物・墓などを検出した。木器が出土したのは1982年に行った試掘立会調査で、園池北部の汀線を検出した。池の規模は南北 80 m、東西 60 m 程度に復原でき、東岸は双ヶ岡の西裾に接している可能性がある。堆積土層は、現代盛土・耕作土・床土・室町時代遺物包含層とつづき、池が存在したときの堆積層は暗灰色泥土である。汀線にはまばらであるが、円礫を敷きつめる。多数の木器は暗灰色泥土と円礫の間から平安時代中期から後期（10世紀から11世紀）の土師器・瓦器・白磁などとともに出土した(fig. 86)。

〔木器番号〕 4408, 5710, 5919, 6206, 7115

〔文 献〕 京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立会調査概報—昭和57年度』
(1983年)

家崎孝治「京都・仁和寺南院跡」『木簡研究』第5号 木簡学会 (1983年) p. 40

D 尊勝寺推定地 そんしょうじ

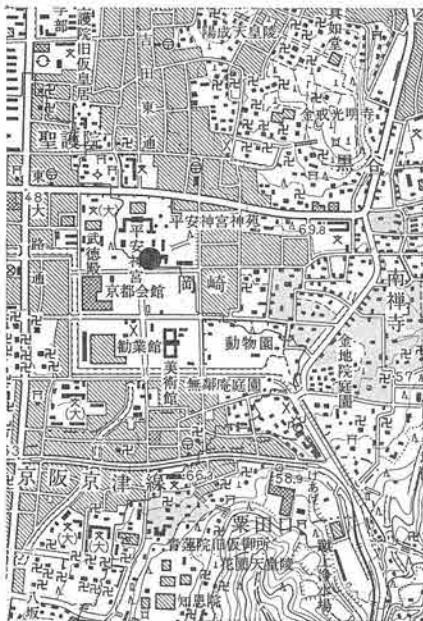


fig. 87 尊勝寺推定地木器出土地点
(1:25000 京都東北部)

尊勝寺は康和4年(1102)7月21日に造立供養された堀河天皇の御願寺で、京都市左京区岡崎西天王町から岡崎最勝寺町にかけての方2町が推定寺域。1969年以降、断続的な発掘調査を行ない、堂宇跡などを検出したが、寺域や伽藍配置を確定するに至っていない。

収録した人形は、1976年に現在の平安神宮境内、推定尊勝寺寺域の中央東寄りで検出した東西築地塀北側の大溝から出土。東西築地塀は基底幅 2.4 m、その北に幅 3 m の犬走を介して、幅 2.6 m 以上、深さ 0.7 m の素掘りの大溝が東西にのびる。大溝には砂層と泥土とが互層になっており、瓦片・加工木などが共伴した。東西築地塀の南には幅 0.8 m の雨落溝があり、これらが一体となって寺院の北限を画していたとかがえられるが、従前の推定尊勝寺寺域には合致せず、報告者は、尊勝寺の東にあった最勝寺〔元永元年(1118)12月17日に造立供養された鳥羽天皇の御願寺〕の北限築地の可能性を提起している(fig. 88)。

〔木器番号〕 5516

〔文 献〕 梶川敏夫・渡辺和子「尊勝寺跡推定地第Ⅲ次発掘調査概要」『六勝寺跡—京都市埋蔵文化財年次報告 1976—Ⅱ』京都市文化観光局文化財保護課 (1977年) p. 13~52

E 大藪遺跡 おおやぶ

京都市南区久世大藪町に所在し、桂川右岸に位置する。1972年以降、久世中学校（旧乙訓第三中学校）敷地内を中心に六勝寺研究会・長岡京発掘調査団・京都市埋蔵文化財研究所などが、過去8回の発掘調査を行った。縄文時代晩期から中世までの遺物が出土し、検出遺構としては古墳時代から平安時代の大規模な流路、鎌倉時代の掘立柱建物、井戸などがある。木器は1972年・1975年の調査で検出した流路から、多量の祭祀遺物とともに出土した。流路は北から南へと流れ、北西 200 m の地点で検出した中久世遺跡の流路 SD01 の下流にあたるものと推定できる。この流路は古墳時代から平安時代までの堆積層をもつ。平安時代の流路は幅 12m 前

後、深さは 1.3 m 程度で、ところどころ丸杭や角杭などで護岸している。埋土は調査地点でことなるが、1975年の第4次調査区では上層の暗灰色粘質土と下層の黄褐色砂礫にわかれ、上層から平安時代中期、下層から長岡京時代前後から平安時代前期の遺物が出土(fig. 88)。

〔木器番号〕 0502, 2003, 3208, 4001, 5915, 5916

〔文 献〕梅川光隆『大藪遺跡発掘調査報告』六勝寺研究会(1973年) p. 29~30

F 中久世遺跡 なかくぜ

京都市南区久世中久世町・殿城町に所在。桂川右岸の縄文時代晩期～室町時代の大集落跡である。1972年以降、京都市埋蔵文化財研究所が数回の発掘・試掘・立会調査が行ってきた。奈良時代から平安時代の遺構には、掘立柱建物・溝・流路・井戸・土壇などがある。1977年に行った ND83-4-A-45調査区では、平安時代前期の流路 SD01 を検出し多数の木器が出土した。また、この調査区の流路の下層や土壇からは弥生時代中期の木器が多量に出土した(fig. 88)。

1 中久世遺跡の流路

1981年7月から8月にかけて発掘。調査地は京都市南区久世中久世町2丁目131番地で、中久世遺跡の北部に位置する。北から南に流れる大規模な流路と土壇などを検出。木器は流路の第5層から出土。この層には6世紀末から7世紀前半代の土師器・須恵器などがふくまれ、建築材もある。なお、流路第7層では布留式土器とともに石製模造品が多量に出土、第11層からは弥生時代後期の遺物が出土するなど、弥生時代中期・後期から平安時代前期までの連続した堆積層が確認できる。

〔木器番号〕 2211, 2212

〔文 献〕京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所『中久世遺跡発掘調査概報』(1982年) p. 18

2 中久世遺跡の溝SD01

SD01 は南流する弥生時代からの流路の西肩部に形成された幅約6m、深さ0.7mの流路である。土層の堆積は、上・下2層に大別される。上層は粘質土の堆積であり、少量の土器と饒益神寶・斎串・陽物形・獣骨などが出土した。下層は、砂質土と砂礫土からなり、遺物の大半はこの層から出土した。土師器・須恵器・緑釉陶器・製塩土器・土馬・土鍾・墨書人面土器・小型土師器竈・鍋・斎串・人形・曲物などがある。伴出土器の年代は平安時代前期。

〔木器番号〕 4921, 5103, 5104, 5114, 5115, 5116, 5117, 5118, 6104, 6105

〔文 献〕前掲『平安京発掘資料選』

G 中臣遺跡 なかとみ

中臣遺跡は京都市山科区一帯、山科川と旧安祥寺川とに挟まれた地域にひろがる大規模な集落跡である。1971年以降、京都市埋蔵文化財研究所が60次にわたる調査を行った。遺跡は縄文時代から中世まで連続するが、中心は弥生時代後期から飛鳥時代にあり、多数の竪穴住居跡を検出した。奈良・平安時代の遺構は南西部に集中し、掘立柱建物・土壇・井戸などがある。木器が出土したのは、勧修寺西金ヶ崎町に所在する井戸 SE01(第10次調査区)である(fig. 89)。

SE01 は長径4.4m、短径3.5m、深さ3.2mの楕円形掘形内に縦板を円形に組む。埋土から

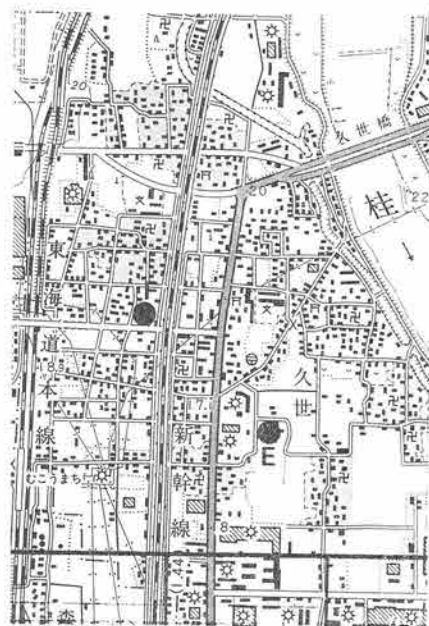


fig. 88 大藪・中久世遺跡木器出土地点
(1:25000 京都西南部)

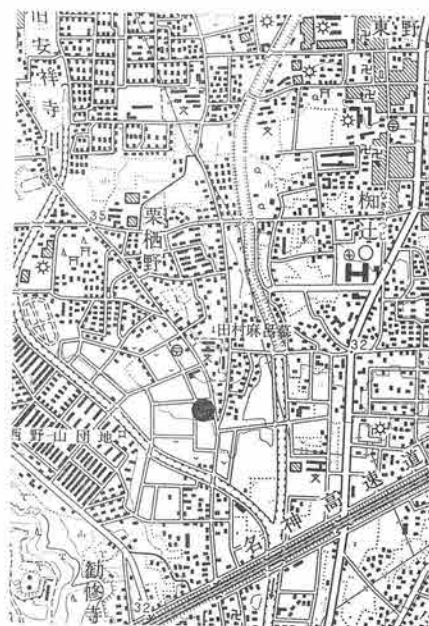


fig. 89 中臣遺跡木器出土地点
(1:25000 京都東南部)

9世紀後半の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土した。木器は下層から多量に発見され、なかには「行徳行徳法・・」と判読される木簡がある。

〔木器番号〕 4621, 4716, 4807, 4808, 4809

〔文献〕 前掲『平安京発掘資料選』

(財)京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡—文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1977 年度—』(1978 年) p. 4

H 鳥羽離宮跡 とばりきゅう

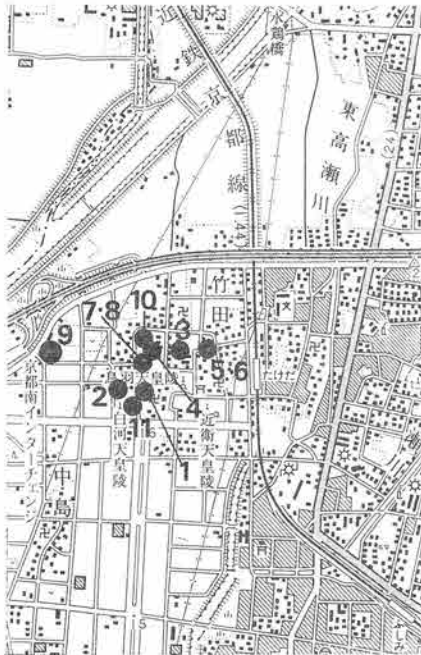


fig. 90 鳥羽離宮跡木器出土地点
(1:25000 京都東南部)

遺跡は京都市の南部、名神高速道路京都南インターの南東部にひろがる。11世紀末、白河上皇が造営を開始し、鳥羽上皇も殿舎仏殿を増築した。全貌はなお明らかでないが、南殿・北殿・馬場殿・東殿・田中殿の5つの殿舎群とこれにともなう御堂群の存在が推定できる。

1960年、名神高速道路建設にともなって奈良国立文化財研究所・京都府が発掘調査を開始し、のちに鳥羽離宮跡発掘調査研究所が受継ぎ、現在は京都市埋蔵文化財研究所が継続的に調査を行っている。近年になって田中殿地区で玉石で築成した基壇をもつ建物群や庭園などが良好な保存状態で検出されている。遺跡は下層の縄文時代晩期から平安時代中期までと鳥羽離宮時代、室町時代以降の三期に大別される。木器は各時代のものが出土しているが量的には室町時代以降のものが多い(fig. 90)。

1 鳥羽離宮跡の溝SD01B (21次B調査)

現在の伏見区竹田内畑町・竹田浄菩提院町一帯は鳥羽離宮東殿の推定地で、安楽寿院・白河天皇陵・鳥羽天皇陵・近衛天皇陵・北向不動尊などが現存する。SD01Bは、北向不動尊と白河天皇陵との中間地域の北寄りで検出した幅5.5mの東西溝。溝は2時期にわかれ、新しいA溝の埋土は上層が茶褐色粘質土、下層は淡茶灰色砂質土となる。B溝の上層は灰褐色粘質土、下層は灰褐色小礫混り粘質土であり、この下層から木製仏像・塔婆などが出土した。伴出の土師器から鎌倉時代から室町時代頃とおもわれる(fig. 90)。

〔木器番号〕 2433

〔文献〕 長宗繁一・鈴木久男・加納敬二『鳥羽離宮跡—昭和51年度区画整理道路予定地内発掘調査概要—』(財)京都市埋蔵文化財研究所 (1977年)

2 鳥羽離宮跡の池状遺構SX07 (24次調査)

白河天皇陵の北約80mのところで、鳥羽離宮期の整地層(黄褐色粘質土)を掘込んだ池状遺構SX07を検出。池の堆積層(青灰色粘土)は南へのびており、鳥羽離宮にともなう池汀は、西方からこの調査区と白河天皇陵との間へ向けて入り込んでいたと推定される。堆積層から、木器や瓦片などが出土した(fig. 90)。

〔木器番号〕 0325, 5408

〔文献〕 長宗繁一・鈴木久男・加納敬二『鳥羽離宮跡昭和51年度発掘調査調査概要』B区
(財)京都市埋蔵文化財研究所(1977年)

3 鳥羽離宮跡の落込み (26次調査)

鳥羽天皇陵の北約100mの位置で検出した東西にのびる南へ向けての落込み。35次A調査区

の溝SD11と53次調査3トレンチ濠のほぼ中間にあるので、同じ溝の北岸部に推定できる。少量の瓦・土師器などが共伴した(fig. 90)。

〔木器番号〕0326, 5407

〔文 献〕同上, E区

4 鳥羽離宮跡の溝SD11B (35次A調査)

上述の26次調査区の西約100mで検出した東西溝。幅約4m, 深さ1.5m。室町時代後半頃に部分的に拡張され、調査区西端部で張り出しをもつ濠(SD11A)に変化する。埋土は暗灰色砂泥・暗灰色粘土・灰色砂礫・暗灰色砂礫・灰色砂礫から、最下層の暗灰色腐植土層とつづく。木器の出土したSD11B最下層伴出の土器群は、平安時代末期～鎌倉時代にかけての短期間に埋没したものとかんがえられる(fig. 90)。

〔木器番号〕2417, 6208, 6209

〔文 献〕(財)京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡(1977年)一区画整理道路予定地内発掘調査概要一』(1978年)

5 鳥羽離宮跡第3トレンチ濠第9層 (53次調査)

26次調査区の東約100mで検出した東西濠。幅6.0m, 深さ1.5m。堆積は上から淡青灰色粘土・暗灰色砂礫・暗茶褐色砂泥・暗青灰色粘土・黒灰色腐植土・灰黒色粘土・灰色粗砂とつづく。濠の年代は鎌倉時代から近世までつづくが、木器は最下層から出土しており、伴出の遺物から鎌倉時代と推定される(fig. 90)。

〔木器番号〕2418

〔文 献〕京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所「第53次(東殿XXXIII)発掘調査」『鳥羽離宮跡(1979年度)文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』(1980年) p. 12~18

6 鳥羽離宮跡の落込みSX10 (53次調査)

上述の濠の北側で検出した長辺10m, 短辺5m程の不整形な土壇状の落込みで、東部がやや深い。木葉・水草などの腐植土層が堆積し、平安時代後期から鎌倉時代の土器・瓦・木器が多量に出土した。それらは、出土状況からみて一括投棄された可能性が大きい(fig. 90)。

〔木器番号〕5813, 5814, 6006

〔文 献〕同 上

7 鳥羽離宮跡の溝SD10 (54次B調査)

54次B調査区は、上述の35次A調査区に西接する。SD10は幅4.0m, 深さ約2mの東西溝で、35次A調査区SD11の西延長部にあたる。あわせて延長約40mを検出したことになる。最下層の腐植土から、鎌倉時代の土器や木器が多量に出土。木器は塔婆・人形・杓子・箸や「鳥羽二丈一尺」「南無阿弥陀佛」と墨書した木札など多種にわたる(fig. 90)。

〔木器番号〕5511

〔文 献〕(財)京都市埋蔵文化財研究所「第54次発掘調査」『鳥羽離宮跡(昭和54年度)区画整理道路予定地内発掘調査概要』(1981年) p. 4~15

第三章 遺跡解説

8 鳥羽離宮跡の溝SD07 (54次B調査)

調査区西端を南北に貫流する大溝。幅 4.5~6.7 m, 深さ 1.2 m で, 延長 65 m を検出。北部東岸では礫による護岸をほどこす。出土の土器などから上述のSD10よりも新しく, 室町時代に開鑿され, 近世まで窪み状にのこっていたことがわかる。収録した漆器碗は, SD10が交叉する地点の最下層(腐植土)から出土した。この地点の土層は複雑で, 共伴遺物を特定できないが, 鎌倉時代以降のもの。同地点で, 銅製の小碗・水滴が出土している(fig. 90)。

〔木器番号〕 2416, 2424, 6210

〔文献〕 同上

9 鳥羽離宮跡の溝SD04 (72次調査)

鳥羽離宮田中殿地区の東西道路「北大路」S(F10)の北側溝。溝幅は 6 m 前後, 深さ 1.2 m で, 断面は逆台形を呈する。埋土は 3 層。上層からは平安時代後期~鎌倉時代の土器が, 中・下層からは平安時代後期の土器が出土した。なかでも木器が多い(fig. 90)。

〔木器番号〕 1709, 2313, 2431, 2432, 5414

〔文献〕 上村和直「第72次調査」『鳥羽離宮跡調査概要昭和 56 年度』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 (1982年) p. 16~17

10 鳥羽離宮跡の溝SD01 (77次調査)

77次調査区は, 上述の54次B調査区に北接する。SD01は調査区北端で検出した大規模な東西溝。幅 5.0 m, 深さ 0.6 m で, 延長 34 m を検出した。溝の南約 5 m のところには, 幅 0.8 m, 深さ 0.15 m の同時期の溝 SD02 が平行している。SD01 からは, 板絵・木簡・塔婆・人形・木球・扇・櫛・漆器碗・下駄などの多量の木器が, 土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器など12世紀末の土器とともに出土した(fig. 90)。

〔木器番号〕 6212, 6213, 6214

〔文献〕 鈴木廣司・吉崎伸「鳥羽離宮跡第77次調査」『昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 (1984年) p. 64~65

11 鳥羽離宮跡白河天皇成菩提院陵 (宮内庁書陵部調査)

天承元年(1131)に落慶した成菩提院は, 白河天皇が生前に自らの塔所(陵墓)として建立した三重塔を中心に, 故院に縁故の深い御所(泉殿)を改築した御堂が拝所のような形で建っていたと推定されている。収録した燈台の台座は, 1980年, 白河天皇成菩提院陵の東脇において実施した調査で, 第5トレンチV層(遺構面を覆う有機物堆積層)から出土した。直上の遺物包含層からは, 12世紀の瓦や土器が出土している(fig. 90)。

〔木器番号〕 6415

〔文献〕 福尾正彦「成菩提院陵駐車場整備工事区域の事前調査」『書陵部紀要』第33号(1982年) p. 80~93

I 下畑遺跡 しもはた

与謝郡野田川町字三河内(府立加悦谷高等学校敷地)に所在。1982年に京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査した。丘陵の裾部の平地に位置する。12~13世紀頃の黒色土器を多数発見

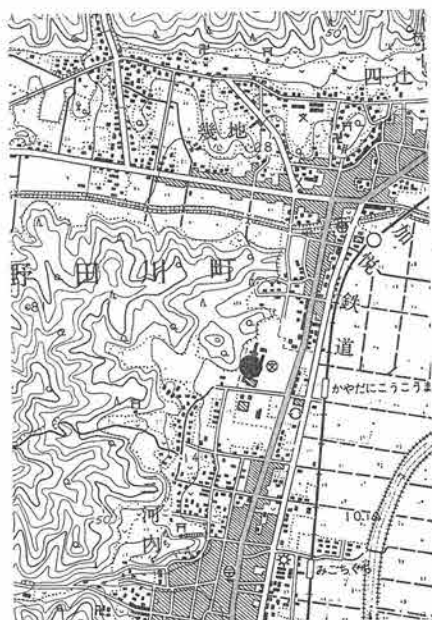


fig. 91 下畑遺跡木器出土地点
(1:25000 四辻)

したが、遺構は井戸1基を検出したのみである。井戸 SE01 は木枠組みで、木器はすべて井戸の底面やや上から一括投棄した状況で出土。下駄・漆器・杓子・曲物・箸があり、12世紀～13世紀の黒色土器と共伴。ほかに須恵質鉢・土師器・輸入陶磁器・至道元寶がある(fig. 91)。

〔木器番号〕 2116, 2413, 2427, 2428, 2429, 2430, 4313

〔文 献〕 竹原一彦「下畑遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第6冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター(1984年) p. 105～117

J 定山遺跡 じょうやま

与謝郡岩滝町字弓木に所在。1978年・1979年に岩滝町が調査。傾斜面を利用して形成された石垣・水路・井戸跡などが検出され、祭祀遺跡または地方官人の邸宅跡ではないかとかんがえている。縄文時代から平安時代にかけての遺物が出土しているが、それ以降の遺物がまったく出土せず、中世以降には水田化したのであろう。木器は主として石垣付近と井戸跡から出土し、共伴の土器から12世紀代に位置づけられる。なお、その他の遺構として古墳時代の住居址3棟と竪穴式石室の一部を検出した(fig. 92)。

〔木器番号〕 DL51 区; 0507, 5006, 5203, 5207, 6014

〔文 献〕 岩滝町教育委員会『定山遺跡発掘調査報告書』(1979年)

岩滝町教育委員会『定山遺跡第2次発掘調査報告書』(1980年)

K 古殿遺跡 ふるとの

中郡峰山町字古殿(京都府立峰山高等学校敷地)に所在。1977年4月～5月、1982年7月～10月に京都府が調査。丘陵の末端部に位置する集落跡。3世紀(弥生時代後期)～5世紀初頭、12世紀～13世紀の2時期の遺構が重複している。3世紀～5世紀の遺構としては、竪穴住居・井戸・溝・土壇などがあるが、12世紀～13世紀の遺構は溝のみで、集落構造などは不明。

歴史時代の木器は溝SD01および遺物包含層から出土した。槽・桶・曲物・箱・椀・匙・糸巻・人形・陽物形・刀子などがあり、火をうけて表面が焼け焦げているものが多い。多量の土師器皿と少量の須恵器・黒色土器・瓦器・輸入青磁・玉石・赤色顔料が共伴した(fig. 93)。

〔木器番号〕 SD01; 2425, 4205

遺物包含層; 0902, 1012, 2312, 4026, 4238, 4240, 4241, 4243, 4244, 4326, 5206, 5715, 6113, 6611, 7301

〔文 献〕 平良泰久・塩沢珠代・杉本宏・橋本高明「古殿遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1978』京都府教育委員会(1978年) p. 92～162

4 大阪府

A 挾山遺跡 はさみやま

藤井寺市藤ヶ丘・野中の古市古墳群内に所在。夾塚古墳・宮山古墳の西方から北方にかけての微高地に立地し、1972年以降、主に大阪府が発掘調査を行っている。1977年の外環状線工事にとまって77-1区・77-2区・77-4区の3地点で調査を行い、古墳時代から中世に至る各種の遺構を検出した。77-1区では南北にのびる大溝 SD7710とこれにL字状に接続する溝SD

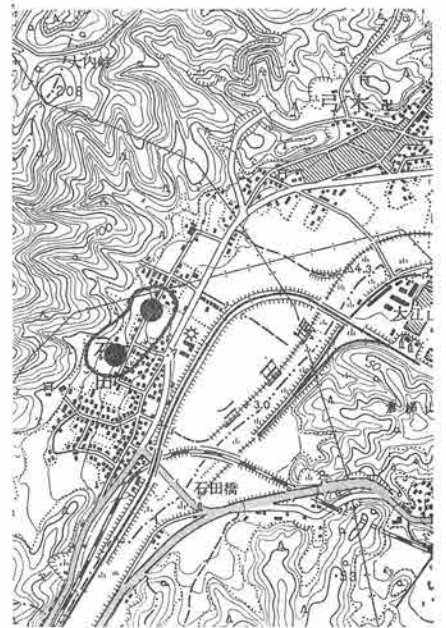


fig. 92 定山遺跡木器出土地点
(1:25000 宮津)

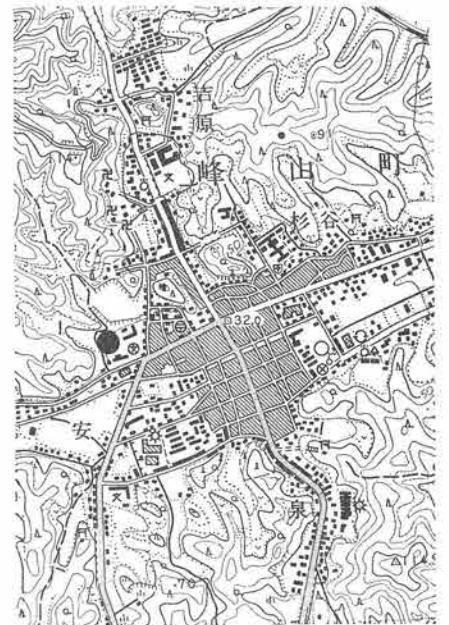


fig. 93 古殿遺跡木器出土地点
(1:25000 峰山)

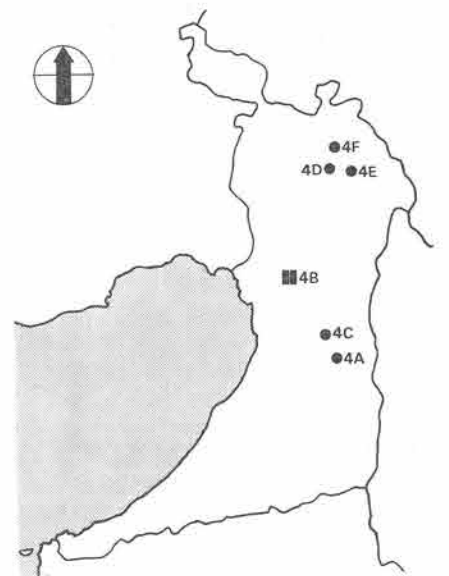


fig. 94 大阪府の木器出土遺跡



fig. 95 狭山遺跡木器出土地点
(1:25000 古市)

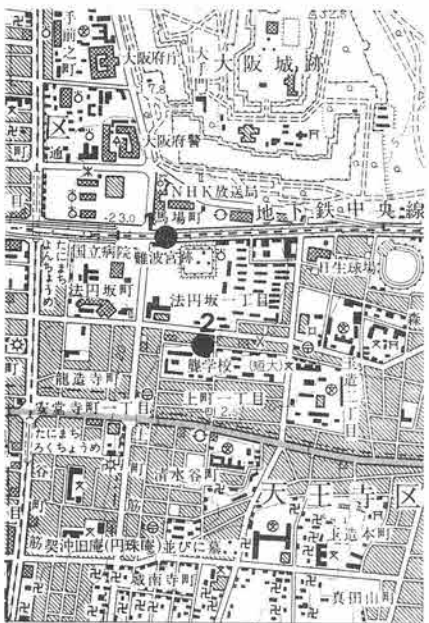


fig. 96 難波宮跡木器出土地点
(1:25000 大阪東北部)

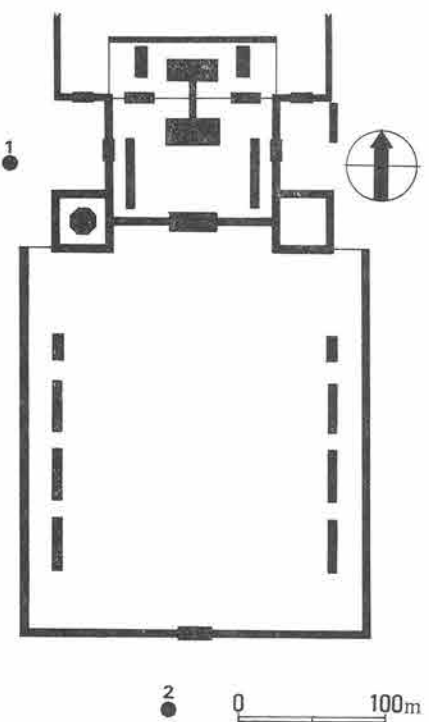


fig. 97 前期難波宮と木器出土地点との関係

7711 を検出。SD7710 は幅 4m、深さ 1.2m で、人工的に掘鑿したもの。堆積土は砂礫層を基調にして泥土質の間層をふくみ 3 分できる。出土した土器によれば 7 世紀後半に掘鑿し、鎌倉時代中期まで存続する。組合せ鋤は第 2 層から出土し、8 世紀にぞくする (fig. 95)。

〔木器番号〕 0503, 0504

〔文献〕尾上実『狭山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会(1978年)p. 5～7

B 難波宮跡 なにわのみや

大阪市上町台地には、7 世紀中葉の前期難波宮および 8 世紀中葉の後期難波宮があり、難波宮址顕彰会およびそれを受継いだ大阪市文化財協会が継続的に発掘調査を行っている。難波宮にともなう木器類の出土は、いまのところきわめて希薄だが、都城造営前の遺構からは注目すべき二・三の木器が出土している (fig. 96)。

1 難波宮跡の土壌 SK10043 と SK10048

大阪市東区法円坂 1 丁目に所在。1976 年の阪神高速道路東大阪線橋脚工事 (MP-2 地点) にともなう調査で 6 基の土壌を検出した。これらの土壌はいずれも難波宮下層遺構 (掘立柱建物・溝・土壌) の上に堆積する黒灰色粘質土を掘込んでいる。

うち、SK10043 には、薄層を介して上層に厚さ約 0.8m の前期難波宮整地層がある。土壌の北部分、東西 4.6m、南北 2.5m の範囲を調査した。深さは 0.45m である。土壌内には有機質土・炭・灰・粘土の薄層が互層をなし、なかから土師器・須恵器・自然木・動物・植物遺体のほか、付札木簡 2 点をふくむ釘状木器・加工木片・ハツリ屑などの木器類が出土した。木器の材質はヒノキが圧倒的に多い。付札木簡は 2 点とも表裏に墨書があり、「比^(罷カ)尔マ (枇把賛カ)」とよめる。共伴した土器は 7 世紀中葉のもので、前期難波宮造営時に廃棄物を処理した土壌とかんがえられる。SK10048 もほぼ同じ性格の土壌で、6.6×2.1m の範囲を発掘し、7 世紀中葉の土器類とともに、木製の刳物盤が出土した (fig. 96・97)。

〔木器番号〕 SK10043 ; 0314, 0315, 0316, 0317, 0318, 0319, 0320, 0321, 4601, 4602, 4607, 4608, 5815, 7112

SK10048 ; 3001

〔文献〕藤田幸夫「木製品」『難波宮址の研究 第 7 』（報告篇）(財)大阪市文化財協会(1981年) p. 120～122

2 難波宮跡の土壌

大阪市東区上町 1 丁目広小路公園に所在。付近は朝堂院南部に推定されている。1975 年に調査した。土壌は上面で東西約 4.2m、南北約 3.5m、底面では 1.7×1.3m の長方形を呈し、深さ約 2.5m をはかる。埋土は粘土・砂・灰などの薄層からなり、混入物の多少で上・中・下層にわけられる。その下層から、「廣乎大哉宿世…」の木簡や材木・多数の土器類が出土し、なかに木製の鋤があった。共伴土器は飛鳥・藤原地域の土器編年の「飛鳥Ⅱ」にほぼ相当し、この土壌が前期難波宮造営時もしくはその直前に埋められたことがわかる (fig. 96・97)。

〔木器番号〕 0501

〔文献〕八木久栄「第 66 次発掘調査概報」『難波宮跡研究調査年報 1974』難波宮址顕彰会(1976年) p. 25～30

C 亀井遺跡 かめい

八尾市南亀井町3丁目に所在。1978年から1980年まで大阪文化財センターが調査。遺跡は河内平野の沖積低地に立地し、最下層の遺構面はGL-5mであった。弥生時代前期から江戸時代までの遺構面があるが、弥生時代中期および古墳時代中期の遺構が主体をなす。弥生時代の遺構としては前期の溝4条、中期の溝29条・井戸10基・土壇53基・木棺墓・甕棺墓、後期の溝6条・井戸6基・土壇・土壇墓などがある。古墳時代に入ると大きな河川の氾濫域となるが、古墳時代中期には、古墳が築造されたり堤防が築かれ、西側は水田化する。だが、古墳時代中期以降から中世にかけては沼沢地にかわる(fig. 98)。

歴史時代の木器は古墳時代中期以降に形成された沼沢地(SX4001)から出土した。出土層位と共伴の土器類から7世紀代にあてられる。

〔木器番号〕0826, 1109, 2107

〔文献〕高島徹・尾谷雅彦ほか「遺構及び遺物」『亀井・城山』(財)大阪文化財センター(1980年) p. 325~327

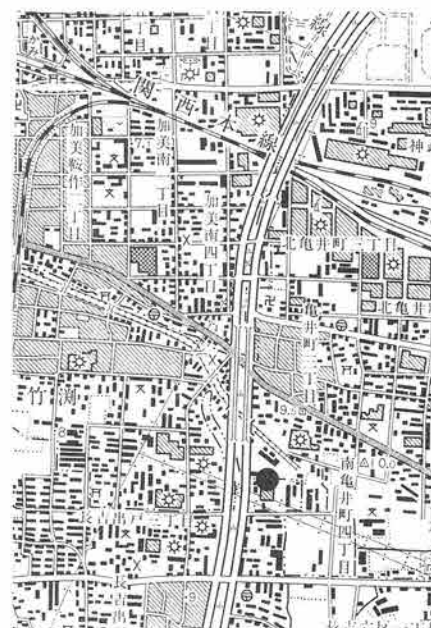


fig. 98 亀井遺跡木器出土地点
(1:25000 大阪東南部)

D 郡家今城遺跡 ぐんげいましろ

高槻市今城町を中心に所在する。芥川の西側にひろがる低位段丘のほぼ中央部に位置し、集落の立地条件としては、きわめて良好。遺跡の範囲は東西約300m、南北約300mで、北東約500mには嶋上郡衙跡がある。1970年・1973年に大阪府と高槻市が大規模な発掘調査を実施したのをはじめ、これまで約2万m²を調査。遺跡は旧石器時代のキャンプ地跡と奈良・平安時代の集落跡に大別される。後者には掘立柱建物跡(110棟以上)・井戸跡(33基)・土壇(37基)があるほか、大溝などの条里遺構も検出している。遺物には多量の土器類(土師器・須恵器・灰釉・緑釉・黒色土器)、土製品(土馬・土鈴)、銅銭、鉄製品(釘・刀子・鉄斧)、木器(形代・曲物・工具・櫛)などがあり、また墨書土器・井戸杵材が豊富にみられる。

収録した曲物は井戸SE06の井戸杵として用いたもの。SE06は集落の北東部にあり、掘形は径約1.7m、現存深1.25mをはかる。井戸杵は数個の曲物(現存4個)を積み重ねており、3405をその最下段にすえていた。井戸のなかから奈良時代後半の土師器(杯・鉢)、木簡・斎串が出土した(fig. 99)。

〔木器番号〕3405

〔文献〕原口正三「郡家今城遺跡」『高槻市史』第6巻考古編 高槻市役所(1973年) p. 118~137

高槻市教育委員会「郡家今城遺跡」『高槻市文化財年報1972年』(1973年)

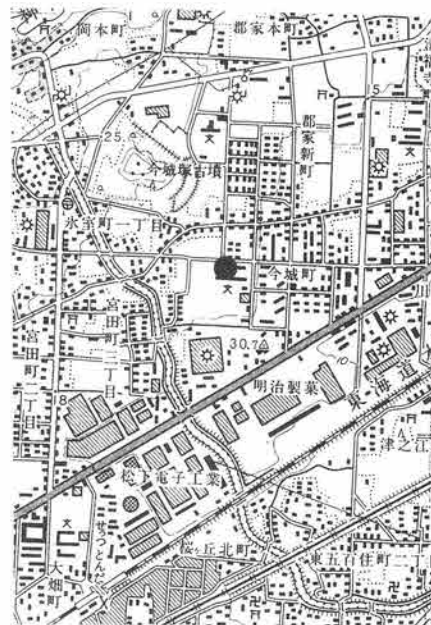


fig. 99 郡家今城遺跡木器出土地点
(1:25000 高槻)

E 上田部遺跡 かみたべ

高槻市桃園町(高槻市庁敷)に所在。1969年5月に高槻市が調査。その後、数地点において小規模な調査を行った。芥川が形成した扇状地上にあり、弥生時代から中世に至る遺構を検出した。最盛期は奈良時代の集落跡で、攝津国の官田所在地の可能性が高い。遺構は上下2面の水田、掘立柱建物、井戸である。遺物には土器・木器があり、後者が豊富である。土器のなかには「田子」の墨書杯(須恵器)がある。また和同開珎も2枚出土している(fig. 100)。

木器の大半は2面の水田跡から出土した。内訳は織機具・農具・食膳具・履物で、用途不明

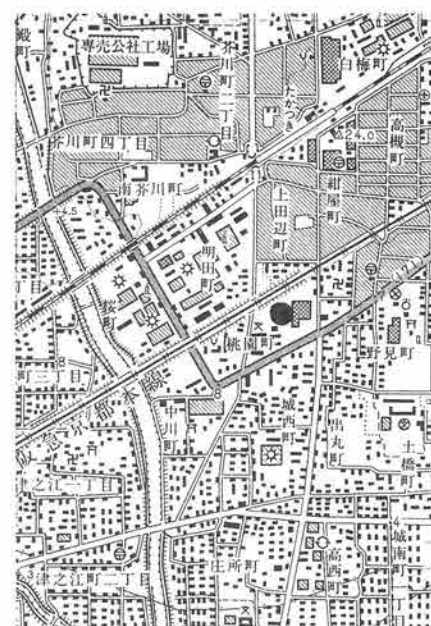


fig. 100 上田部遺跡木器出土地点
(1:25000 高槻)

のものも少なくない。なかでも、馬鋤・緯打具・回転翼（鳥追い用）などは珍しい。天平七年（735）閏十一月廿三日の紀年をもつ班田の調査記録をふくむ木簡13点が共伴している。

〔木器番号〕 0601, 0602, 0705, 0706, 0717, 0718, 0816, 1103, 1111, 1112, 3611, 4209, 6412, 6413, 6506, 6508, 6627, 6713, 6719, 7002, 7010, 7106, 7239

〔文献〕 原口正三「上田部遺跡」『高槻市史』第6巻考古編 高槻市役所（1973年）
p. 138～145

F 大蔵司遺跡 だいぞうし



fig. 101 大蔵司遺跡木器出土地点
(1:25000 高槻)

高槻市大字服部の大蔵司・浦堂地区に所在。1972年9月、1978年4月、1980年6月～9月に大阪府と高槻市が調査。二つの丘陵にはさまれた谷部にあり、芥川左岸に位置する。弥生時代～古墳時代の竪穴住居や溝、奈良時代の掘立柱建物や水路、平安時代～中世の水路・水田・井戸などを検出している。遺跡の北側に式内社（神服神社）がある（fig. 101）。

収録した木器の大半は、奈良時代の用水路（A地区の溝6）、一部は溝6の西（B地区）にある自然流路から出土した。溝6は幅6.5m、深さ1m。北西から南東に向けて斜行し、南岸をシガラミで護岸している。8世紀後半の須恵器・土師器とともに、人形・斎串・刀形・櫛・鋤形・鍬形・挽物盤・曲物・折敷・木履・下駄・鎌柄・錐柄などの木器が出土した。西の自然流路では、古墳時代の須恵器・土師器を主体とし、弥生時代～中世に至る土器が混在する。木器には、鋤・鳥形・刳物槽・箸・下駄・横槌・堅杵など奈良時代のものが多いが、鋤などは古墳時代に属する可能性がある。なお、溝6の上層にある平安時代～鎌倉時代初頭の用水路からは、12世紀末～13世紀初頭の仁王像片が出土している。

〔木器番号〕 A地区溝6；0707, 1013, 2004, 2105, 2606, 2706, 2709, 3205, 4003, 4620, 4701, 4914, 4928, 5113, 5205, 5610, 5708, 5807, 6714, 6722, 6810, 6825, 7007, 7219, 7220

B地区自然流路；1015, 6018

〔文献〕 森田克行『大蔵司遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会（1981年）p. 9～23



fig. 102 兵庫県の木器出土遺跡

5 兵庫県

A 吉田南遺跡 よしだみなみ

神戸市西区玉津町に所在。明石平野の西方を限る吉田・片山丘陵と明石川との間にひらけた沖積平野部に位置する。1976年から1980年まで11次にわたって調査した。弥生時代から奈良・平安時代、中世におよぶ複合遺跡である。弥生時代と古墳時代の竪穴式住居址100棟以上、真南北線を基軸として整然と配置された奈良時代後半から平安時代初期にいたる掘立柱建物34棟以上を検出した。遺跡の北東部に東南方向に流れる幅約40mの河川（旧河道）があり、多量の土器とともに木器が出土した。とくに河川を横断する木橋付近での木器が多い。共伴した土器などからみて8世紀後半から9世紀頃のものとかんがえられる。河川の西方にある溝SD11からも多くの木器が出土したが、時期は河川と同じ頃とみてよい（fig. 103）。

河川は弥生時代後期から平安時代末期頃まで存続したらしく、堆積層は大きく四層にわかれる。第4層、弥生時代後期～古墳時代前期の土器をふくむ砂と礫の互層。第3層、6世紀～7世紀代の遺物をふくむ砂泥層と礫層。第2層、奈良時代～平安時代初期の土器をふくむ粘質土層。第1層、平安時代後期以降の遺物をふくむ砂泥層。木器は第2層から集中的に出土した。

SD11は、河川の西側を北から南へ流れる幅6m、深さ2mの大溝である。この大溝は掘立柱建物群の北限および東限を画するもののようで、出土遺物や堆積状況から6世紀頃に開鑿され、平安時代後期に埋没したとかがえられる。木器は第3層の奈良時代～平安時代初期の堆積層から土器類とともに出土した。

〔木器番号〕河川1；0214, 0603, 0810, 0811, 1011, 1201, 2907, 3218, 3301
3404, 3410, 3702, 4301, 4329, 4330, 5714, 6515, 6518
SD11；0809, 2210, 2908, 3008, 3602, 4819, 5508, 5611

〔文献〕神戸市教育委員会・吉田片山遺跡調査団『吉田南遺跡現地説明会資料Ⅰ～Ⅳ』
(1977年～1980年)

B 出合遺跡 であい

神戸市西区玉津町出合に所在。明石川下流の西岸に位置し、吉田南遺跡とは約2kmはなれている。発掘調査は1977年～1984年にかけて断続的に瀬戸内考古学研究所が行い、収録する木器は1981年秋から1982年冬にかけての調査で出土。調査地は標高約28mの台地上と東側の平野部にまたがる地域で、古墳時代の竪穴住居址群、5世紀後半～6世紀中葉の古墳、奈良時代後半～鎌倉時代前半の掘立柱建物群、鎌倉時代前半以降の水田跡などを検出した(fig. 104)。

木器は台地上にある奈良時代後半の建物群にともなう井戸の最下層から出土した。井戸は一边約2.3m、深さ2.8mの方形の掘形をもつが、杵木ないしはその抜き取り痕跡はなく、もともと素掘り井戸であったとかがえている。井戸のなかから墨書土器・転用硯・製塩土器・瓦などとともに、木簡・剣形・鳥形・曲物・下駄・斎串などの木器が出土した。共伴した土器は8世紀後半のものである。このほかに、台地の下の東側にある南北大溝で、平安時代末～鎌倉時代前半の小児用下駄が1点出土している。

〔木器番号〕2112, 4714, 5705, 6004

〔文献〕鎌木義昌・亀田修一「兵庫・出合遺跡」『木簡研究』第5号 木簡学会(1983年)
p. 64～65

C 上原田遺跡 かみはらだ

姫路市花田町上原田と同市飾東町庄に所在。1975年9月から1978年3月にかけて兵庫県が調査した。奈良時代後期の地方官衙遺跡。山地が平野にうつる変換点に位置し、谷外・北・中央・南の4調査区にわかれる。中央区をのぞく3地区からはそれぞれ方向性をもった掘立柱建物が18棟検出され、とくに南区では奈良時代中葉から平安時代中葉までの間に4回の建替えがみとめられる。木器は北区の井戸SE02および南区の井戸SE03から出土した(fig. 105)。

SE02は方形横板組の井戸で、長径4.8m、短径4.2m、深さ4.3mの楕円掘形内の北側と東側とに3枚づつ縦板を打込み、その上に長さ110～160cm、幅11～30cm、厚さ5～11cmの長方形の板を井籠組にする。井戸杵は16段をとどめ、内法は80cmである。井戸杵外面には墨書の番付がある。井戸のなかから、奈良時代中葉～後葉にかけての土師器・須恵器や刀子と

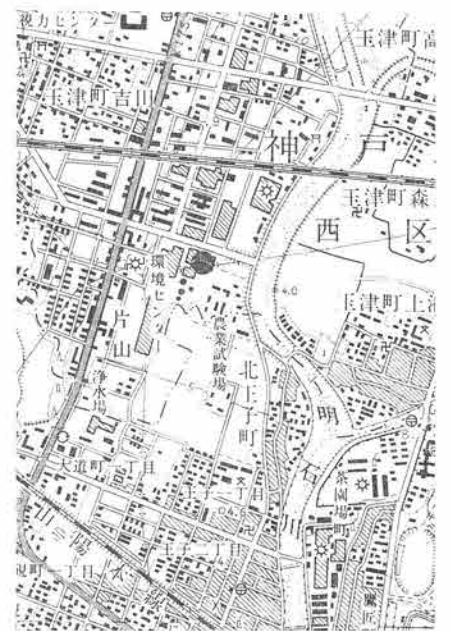


fig. 103 吉田南遺跡木器出土地点
(1:25000 明石)



fig. 104 出合遺跡木器出土地点
(1:25000 東二見)



fig. 105 上原田遺跡木器出土地点
(1:25000 姫路北部)



fig. 106 辻井廃寺木器出土地点
(1:25000 姫路北部)

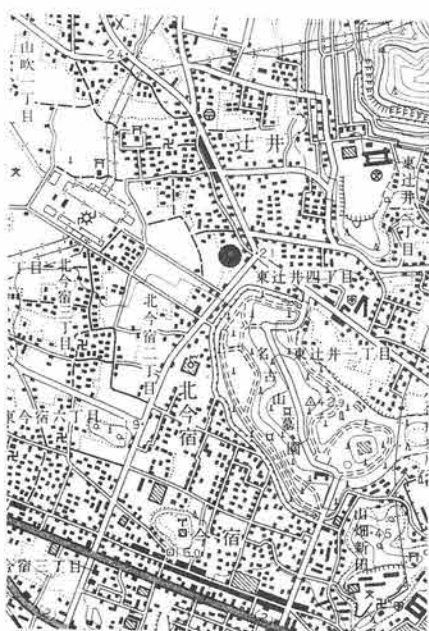


fig. 107 八反長遺跡木器出土地点
(1:25000 姫路南部)



fig. 108 栄根遺跡木器出土地点
(1:25000 伊丹)

ともに、曲物・斎串・机脚・自在鉤・剝物・鉾などの木製品が出土した。

SE03 は方形縦板組の井戸で、一辺 2 m 強、深さ 2.7 m の隅丸方形の掘形内の四隅に柱をたて、上中下 3 段に横棧をわたし、外側に各辺 4 枚(東辺は 3 枚)の板をたて、合せ目の外面に添板をあてている。井戸のなかから、平安時代の土師器多数、須恵器・鉄鏝・瓦とともに、木鍾・斎串・曲物・鎌形・簞などの木器が出土。南調査区の SK07 から漆篋が出土した。

〔木器番号〕 SE02 ; 0104, 2905, 3216, 4703, 6406, 6504

SE03 ; 0813, 1305, 5804

〔文 献〕 西口和彦ほか「上原田遺跡調査概報」『播但連絡有料自動車道建設にかかる埋蔵文化財調査報告書』兵庫県教育委員会 (1980年) p. 104~106

D 辻井廃寺 つじいはいじ

姫路市辻井字東藤ノ木・西藤ノ木に所在。1982年 4 月~12 月にかけて姫路市が調査。姫路城の西北、古夢前川が形成した標高 18~19 m の沖積平野に所在する 飛鳥時代から平安時代にかけての寺院跡である。調査では主要建物とおもわれる 13 間×2 間の南庇付掘立柱東西建物跡を検出。丹彩鉄斧は多量の土器や墨書土器・斎串・ミニチュアの横槌などとともに、調査区中央部の西北隅で検出した井戸のなかから出土。井戸は奈良時代前半に開鑿され奈良時代末に放棄されたと推定される。また、寺院関係の遺構に先行する弥生時代中期の住居跡もある (fig. 106)。

〔木器番号〕 0101

〔文 献〕 山本博利・秋枝芳「兵庫・辻井遺跡」『木簡研究』第 5 号 木簡学会 (1983年) p. 66・67

E 八反長遺跡 はったんちょう

姫路市岡田字八反長に所在。1982年 4 月~同年 10 月、兵庫県が調査した。市川と夢前川によって形成された海拔約 8 m の沖積平野に立地。南調査区には弥生時代中期末から平安時代初頭にまたがる流路があり、平安時代の層から多量の木器が出土。北調査区にも古墳時代から平安時代にかけての流路がある。その南側に弥生時代後期の方形周溝墓があり、直下に弥生時代前期の良好な土器を多量に出土する溝が東西に走り、舟状木器が出土した (fig. 107)。

〔木器番号〕 0818, 0821, 0823, 0824, 0825, 1909, 3612, 4302, 4325, 4815, 4816, 4817, 6814, 6925

F 栄根遺跡 さかね

川西市栄根・栄町に所在。1972年 2 月から 13 回にわたる調査を川西市が実施し、現在も続行中。標高 24~26 m の沖積地に位置する弥生時代前期から平安時代後期にかけての複合遺跡。南側の調査区(第 1~7 次)では、弥生時代中期の方形周溝墓 2 基、弥生時代末~古墳時代後期の竪穴住居 10 棟や平安時代後期の掘立柱建物 1 棟、北側の調査区(第 8~11 次)では、平安時代後期の掘立柱建物 3 棟や弥生時代から平安時代にかけての河川・溝を検出した。収録した墨壺は、第 9 次調査区の河川から出土した。この河川は幅 10 m 以上で、弥生時代後期~奈良・平安時代まで存続し、古墳時代後期の堆積層から木船、奈良時代の堆積層から多量の土器、墨壺をはじめとする木器が出土した (fig. 108)。

〔木器番号〕 0118

〔文 献〕岡野慶隆『川西市栄根遺跡第8～11次発掘調査概報』川西市教育委員会（1983年）p. 12

G 山垣遺跡 やまがき

氷上郡春日町棚原字山垣に所在。1983年4月～10月に兵庫県が調査。遺跡は標高約85mの沖積地にあり、西方に中国山地の分水嶺を臨み、すぐ東を竹田川が由良川にむかって北流する。遺跡は方形に堀をめぐる館跡で、出土した木簡・土器などから、8世紀前葉の丹波国氷上郡春日部里の里長居館跡とかがえられる。居館の規模は南北約36m、東西13m以上で、外側の北・東・南に堀がめぐり、北と南の堀はさらに西方にのびる。敷地内の南東隅に3間×5間（6m×11.4m）の南北棟掘立柱建物、その北に掘立柱の柵囲い施設（東西7.7m×南北8.3m）がある。堀は古墳時代以来の自然流路を埋立てて再利用したもの。北堀は幅3m、深さ0.6m、東堀は幅3～7m、深さ0.7mで、ともに内壁を杭で護岸する。南堀は二重で、内堀は幅3m、深さ0.8m。約6mをへだてる外堀は幅4m、深さ0.7mの素掘り溝。主として東堀から、20点余りの木簡、多量の土師器・須恵器とともに、鍬・鋤・えぶり・斧・曲物・盤・木錘・紡織具・杓子などの木器が出土した（fig. 109）。

〔木器番号〕0403, 0508, 0720

〔文 献〕兵庫県教育委員会『山垣遺跡—近畿自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報—』（1984年）

H 姫谷遺跡 ひめたに

城崎郡日高町野字姫谷に所在。1978年9月に日高町が調査。円山川と稲葉川との合流点の西方約4kmの標高約82mの沖積地に立地する。縄文時代前期から平安時代に至る複合遺跡で、収録した木製品は、すべて旧河川敷とかがえられる堆積層から出土した。人形・馬形・鳥形・斎串などの木器は、8世紀後葉～9世紀の特徴をしめすが、同時に出土した少量の須恵器・土師器は、7世紀後半～8世紀前葉のものが主体になっている（fig. 110）。

〔木器番号〕4605, 4606, 4723, 4810, 4811, 4814, 5120, 5121, 5122, 5123, 5307, 5308, 5901, 5902, 5903, 5904, 5905, 5906, 5907, 5908, 6015

〔文 献〕加賀見省一「姫谷遺跡」『日高町史資料編』日高町（1980年）p. 224～249

金子裕之・加賀見省一「特異な木製模造品を出土した兵庫県姫谷遺跡」『月刊文化財』202号（1980年）p. 48～52

6 奈良県

A 川原寺かわらでら

高市郡明日香村大字川原に所在。1957年から現在まで、幾度かの調査を奈良国立文化財研究所が行っている。調査の結果、中金堂前庭に西金堂と塔が対置する伽藍配置が明らかになったことは、周知のところ。1957年度の調査では、西金堂・中門の下層において、二条の暗渠を検出した。暗渠は周壁を玉石で積み、大きめの石を蓋石としており、内径は0.5m内外で、ほぼ

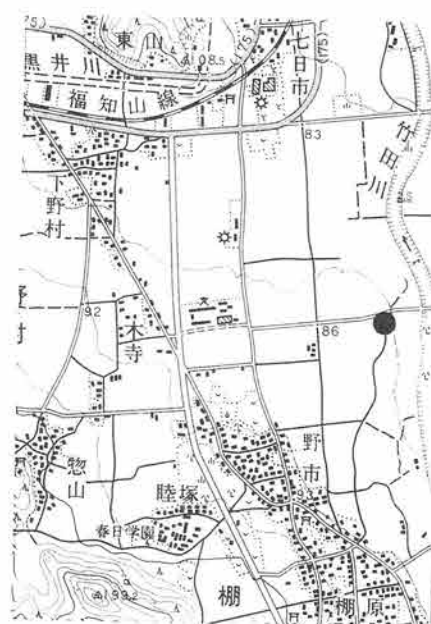


fig. 109 山垣遺跡木器出土地点
(1:25000 柏原)



fig. 110 姫谷遺跡木器出土地点
(1:25000 栃木)

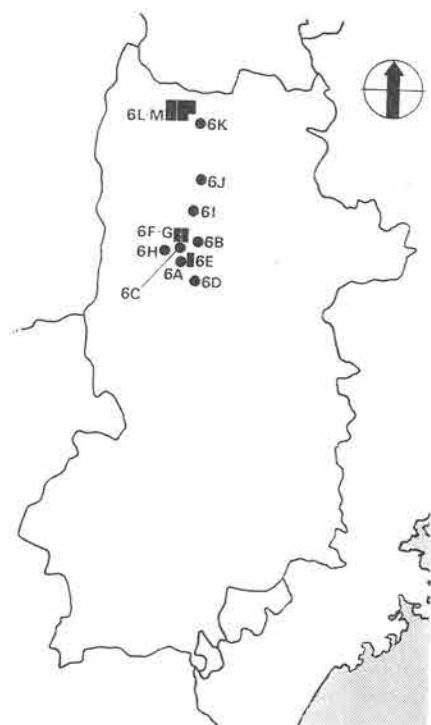


fig. 111 奈良県の木器出土遺跡



fig. 112 川原寺・坂田寺跡・飛鳥京跡木器出土地点 (1:25000 畝傍山)

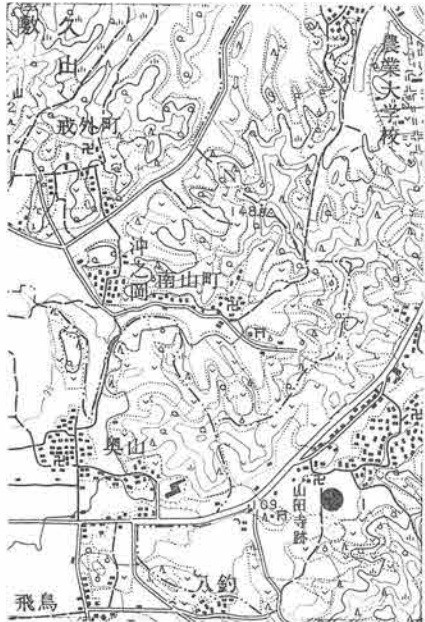


fig. 113 山田寺跡木器出土地点 (1:25000 畝傍山)



fig. 114 和田廃寺木器出土地点 (1:25000 畝傍山)

6m おきにマンホール状の開渠部分を設けている。溝底には腐植土が堆積し、下駄や櫛などの木器が出土した。暗渠は西金堂や中門の建設によって破壊されており、川原寺造営以前に存在した川原宮に関連する遺構とかがえられる。7世紀中葉(fig. 112)。

〔木器番号〕 2108

〔文 献〕 奈良国立文化財研究所『川原寺発掘調査報告』奈文研学報9 (1960年) p. 42・43

B 山田寺跡 やまだでら

桜井市大字山田に所在。1976年から1983年までに5次の調査を奈良国立文化財研究所が行った。その結果、南から塔・金堂・講堂が一直線上にならび、金堂と講堂の間に北面回廊がまわる伽藍配置が明らかになり、また東面回廊の木構造が倒壊した状況で検出された。

木器は塔東地区の井戸・土壇・溝などで、刀子の柄・曲物・陽物形などを発見したが、量的に少なく、時期も8世紀から中世におよんでいる。収録した草鞋は、回廊の東を南流する石組溝SD531の裏込めから出土したもので、8世紀後半にぞくする(fig. 113)。

〔木器番号〕 1943

〔文 献〕 奈文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部「山田寺第4次(東回廊跡)の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報13』(1983年) p. 32~44

C 和田廃寺 わだはいじ

橿原市和田町に所在。1974年と1975年に2回の調査を奈良国立文化財研究所が行った。和田町には飛鳥時代創建の寺院が存在すると かがえられてきたが、寺名については明らかでなく、地名をとって和田廃寺とよぶ。「大野丘北塔」「葛木寺」にあてる説もある。

第1次調査(1974年)では、「大野丘」土壇の南方で調査し、弥生時代から鎌倉時代まで存続する旧河道、掘立柱建物・柵・井戸・暗渠・石敷などを検出した。第2次調査(1975年)では、塔基壇・築地・掘立柱建物を検出している。木器の大半は2次にわたる調査地の遺物包含層で出土し、曲物・物指などがある。層位関係によって7世紀代(fig. 114)。

〔木器番号〕 遺物包含層; 3101, 4405 旧河道; 3705(中世に下るか)

〔文 献〕 奈良国立文化財研究所「和田廃寺の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報5』(1975年) p. 39~43

奈良国立文化財研究所「和田廃寺第2次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報6』(1976年) p. 38~46

D 坂田寺跡 さかたでら

高市郡明日香村大字坂田・字祝戸に所在。1972年8月から1980年4月までに3次にわたる調査を奈良国立文化財研究所が行う。坂田寺は飛鳥寺とともにわが国最古の寺院としてしられる。第1次調査(1972年)では池・溝・掘立柱列・建物などを検出。第2次調査(1974年)では溝・井戸・建物、第3次調査(1980年)では金堂もしくは講堂に比定される基壇建物を検出した。不明確なところが多いが、西方を正面とする伽藍を想定できる(fig. 112)。

木器は第1次調査で検出した池 SG100 と第2次調査で検出した井戸 SE110B から出土している。SG100 は玉石で護岸し、内に意味不明の木組みがある池で、糸巻・琴柱・曲物・櫛・杓子などが出土。伴出の土器は7世紀中葉をやや遡る。SE110Bは8世紀前半の井戸SE110Aに

重複している。掘形の底に約 $17 \times 14 \text{ cm}$ の角材 4 本を井桁組みにし、四隅に方 17 cm の隅柱をたてる。隅柱には細い溝を縦に穿ち、側板を落しこむ。土器の年代から、8 世紀後半～10 世紀の時期がかんがえられ、木器としては曲物・斎串・杓子・箸が出土している。

〔木器番号〕 SG100 ; 0904, 2509, 3701, 4512, 4515, 7020

〔文献〕 奈良国立文化財研究所「坂田寺跡の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 3』（1973 年）p. 5～9

奈良国立文化財研究所「坂田寺跡第 2 次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 5』（1975 年）p. 33～38

E 飛鳥京跡 あすかきょう

高市郡明日香村大字岡を中心に所在する 7 世紀の宮殿跡。中心的な位置をしめる伝飛鳥板蓋宮跡は 1969 年に奈良国立文化財研究所が調査し、1970 年以降は奈良県立橿原考古学研究所が調査を実施し、現在に至っている。遺構は大きく四層にわかれ、上層遺構の構造が明確になっている。上層遺構としては、柵・掘立柱建物・井戸などがある。本来屋根が付いていたと思われる一本柱列 (SA5901・SA6101・SA8020) が囲む内郭と、その周囲の外郭とからなる。外郭は東限の木堀 (SA7405) が判明しており、内郭東限 (SA6101) との距離は約 110 m 。内郭は東西 158 m ・南北 197 m の規模で、内部に多数の掘立柱建物がある。内郭北辺の南約 35 m にある東西棟 SB6205 は 2×24 間の細殿で、伝飛鳥板蓋宮跡の中軸線を知る手懸りとなった建物。南辺中央には推定 2×4 間の南門があり、その北約 27 m には正殿級の大型建物 (推定 4×7 間の東西棟) がある。内郭北東隅では、一辺約 1.8 m のヒノキ板材使用の大井戸を検出した (fig. 112)。

伝飛鳥板蓋宮跡内郭の東南方でも、正殿クラスの東西棟掘立柱建物 4×9 間を検出しており、これを中心にエビノコ郭と称する一郭が存在する可能性も出てきた。なお、これらの木堀や建物は、 29.2 cm 前後の基準尺で造営されている。

出土遺物には、土器・木製品・鉄製品などがあるが、土器の出土量がもっとも多い。土器型式から上層遺構には、天武朝を中心とした年代があたえられ、飛鳥浄御原宮の可能性もある。木器の多くは 1966 年度に調査した大溝 SD5905 の下層から出土し、このほか SD6612 などからも出土した。木簡の墨書に「大部」「綿部」「田部」などの部民名があり、裏に「上々」「上」「中」などの等級を記載したものもある。第 51 次調査では、下層の土壌から 7 世紀中葉の官位をあらわす木簡「大花下」が出土した。一方、第 85 次調査の橘寺の南東約 150 m で検出した溝 SX8201 からは平安時代の下駄や箕が出土している。

〔木器番号〕 SD6612 ; 0912 SX8201 ; 2113

〔文献〕 藤井利章「木製品」『飛鳥京 II』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 40 冊 奈良県立橿原考古学研究所 (1980 年) p. 318～328

亀田 博「飛鳥京跡」『奈良県遺跡調査概報 1982 年度』奈良県立橿原考古学研究所 (1983 年) 第 1 分冊 p. 25～26

F 藤原宮跡 ふじわらきゅう

藤原宮は橿原市高殿町を中心にして、一辺約 1 km の方形の宮域をもつ。遺跡は南から北に向ってゆるやかに下る平地にあり、特別史跡に指定されている。1934 年～1943 年に日本古文化研究所が発掘調査を行い大極殿・朝堂院の位置と規模を明らかにし、1966 年～1968 年に奈良県

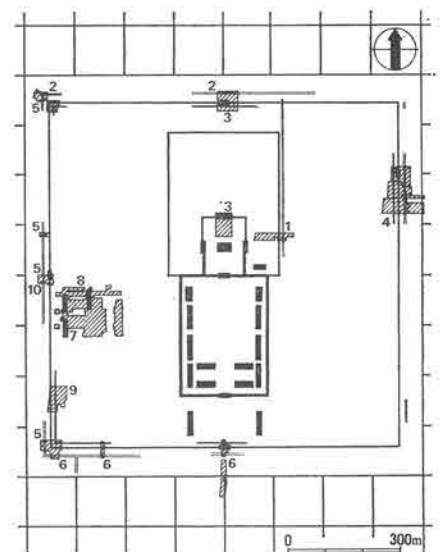


fig. 115 藤原宮跡木器出土遺構検出地区

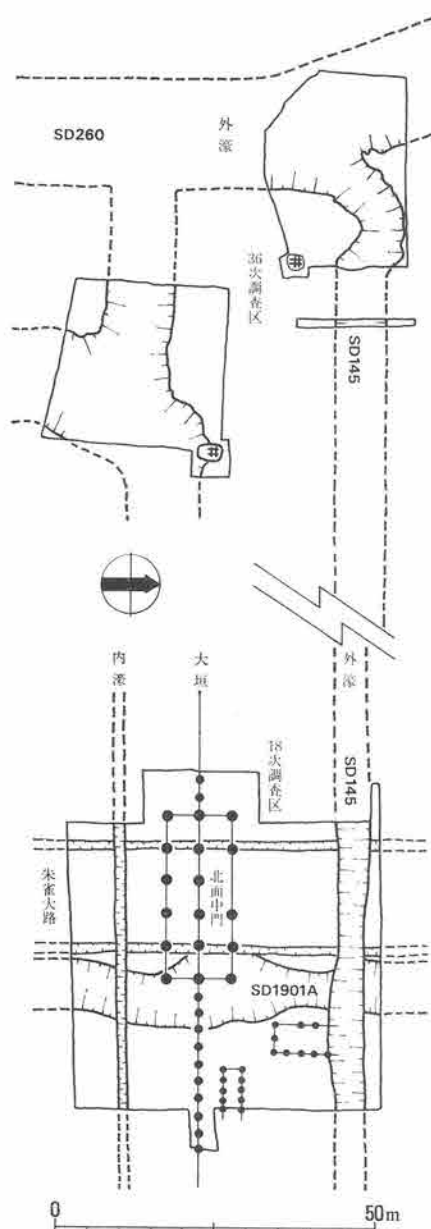


fig. 116 藤原宮跡北限遺構略図

教育委員会が行った国道165号線バイパス計画にともなう発掘調査で、内裏と宮域の四至が確定した。1969年以降、奈良国立文化財研究所が継続的に発掘調査を行い現在に至り、計画的な発掘調査が進行している。木器は宮域の外濠や宮域内の排水溝・井戸・土壌などから出土する。時期的には、藤原宮造営以前の弥生時代遺構にともなうもの、藤原宮造営直前の7世紀後半代の遺構にともなうもの、藤原宮時代の遺構（694年～709年）にともなうもの、藤原宮廃絶以降の遺構にともなうものに大別できる(fig. 115)。

1 内裏東外郭の大溝SD105 (6AJE-C・D・E, 6AJF-D区 奈良県調査・4次調査)

内裏東外郭の木堀 SA865 にそって南から北へ流れる藤原宮の幹線水路。1966・1967年の調査によって、内裏外郭の東北隅から北に流れ北面外濠 SD145 に合流するらしいことが判明した。1971年の調査では、この溝が大極殿の東方地域までおよんでいることを確認。場所によってこととなるが、溝幅5m、深さ0.7m内外で、護岸用の杭・堰・橋脚などがある。6AJE-C・D区では溝の堆積土が上・中・下の3層にわかれ、下層・中層からは大宝3年(703)頃の典藥寮関係の木簡が集中的に出土した。6AJF-D区では上層の堆積土に平安時代の土器が混入しており、平城遷都後も存続したことをしめす。瓦・土器・木器が比較的多く出土し、木器としては人形・人物絵画板・櫛・曲物・匙・蓋などがある(fig. 115)。

〔木器番号〕 1312, 1933, 3606, 3914, 4101, 4102, 4103, 4207, 4213, 4242, 4401, 4901, 5512, 5711, 5718, 5808, 5810, 6808, 6811, 6906, 7108, 7203, 7204, 7205, 7214

〔文献〕 岡幸二郎・猪熊兼勝「木器・木製品」『藤原宮』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第25冊 奈良県教育委員会(1969年) p. 66～74

菅原正明・千田剛道「木製品」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報第37冊(1980年) p. 204～206

2 北面外濠 SD145 (6AJE-C・K, 6AJJ-C区 奈良県調査・18・36次調査)

北面大垣 SA140の北約20mで東西に流れる素掘り溝。幅4.5～5.5mで、北面中門 SB1900の前では橋脚がある。1966年・1967年の調査によって存在が確認され、1975年の調査で北門外で南北溝 1901Bと合流して南に流れることが判明。1982年の調査では西北隅を確認すると同時に、この溝が8世紀前半まで存続することが判明した。溝からは瓦・土器・木器・木簡が出土し、木器には櫛・曲物・留針などがある(fig. 116)。

〔木器番号〕 4526, 5704, 7023

〔文献〕 前掲 岡・猪熊「木器・木製品」 p. 66～74

奈良国立文化財研究所「藤原宮第18次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報6』(1976年) p. 16～22

奈良文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部「藤原宮西北隅地域の調査(第36次)」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報14』(1984年) p. 4～10

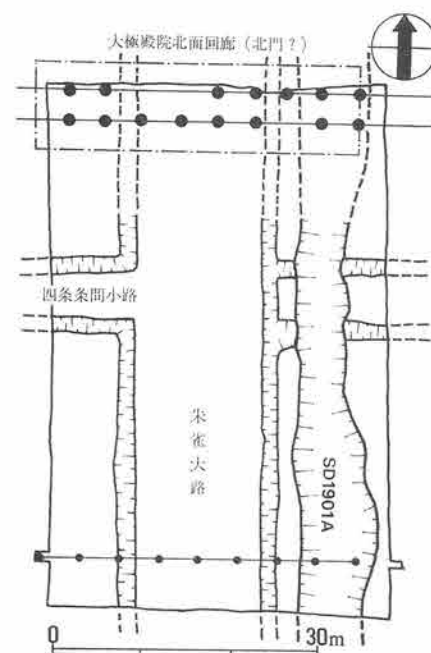


fig. 117 藤原宮跡大極殿北方遺構略図

3 藤原宮造営時の大溝 SD1901A (6AJE-K, 6AJF-K区 18・20次調査)

藤原宮の中心部を南北に縦貫する水路で、北面中門 SB1900 付近と大極殿の北接地域で検出。幅6～8m、深さ約2mの素掘り溝である。北面中門以南では、この溝を埋立てたのちに

藤原宮の諸施設が建設されている。宮外では北面外濠SD145の開穿後も藤原宮の基幹水路として機能した (SD1901B)。溝の堆積は4層に大別でき、上限が天武朝末年まで遡ることが紀年木簡などからわかる。木器としては曲物・匙・糸巻・櫛・物指・横槌・鋤・刀子形・馬形・舟形・人形・斎串などがあり、ほかに木簡・土器・獣骨が出土した(fig. 116・117)。

〔木器番号〕4626, 4727, 4732, 4820, 4902, 5615, 5912, 7013

〔文 献〕前掲「藤原宮第18次の調査」p. 16～22

奈良国立文化財研究所「藤原宮第20次(大極殿北方)の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報8』(1978年) p. 3～13

4 東面外濠SD170と内濠SD2300 (6AJA-R, 6AJB-Q・P・U区 奈良県調査・24・27・29次調査)

東面外濠SD170は東面大垣SA175の東約20mのところを南北に流れ、北東隅と東面北門付近でその位置を確認。東面北門付近では、幅5.5～6.0m、深さ1.2mの素掘り溝で、堆積土は4層に大別できる。遺物は第3層から多く出土した。木器には、曲物・斎串・人形・馬形・剣形・杓子・箕などがある。藤原宮期(fig. 118)。

内濠SD2300は東面大垣SA175の西約12mに位置して南北に流れる。幅2.5～3m、深さ約0.7mの素掘り溝で、堆積土は3層に大別できる。下層の第2・3層から比較的多くの遺物が出土し、木器としては、刀子形・棒状人形・鳥形・斎串などが出土した。

〔木器番号〕SD170 ; 3102, 4228, 4724, 4927, 5909

SD2300 ; 4611, 5501, 6001

〔文 献〕前掲、岡・猪熊「木器・木製品」p. 66～74

奈文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部「藤原宮第24次(東面大垣)の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報9』(1979年) p. 9～20

奈文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部「藤原宮第27次(東面北門)の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報10』(1980年) p. 10～17

奈文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部「藤原宮東面大垣の調査(第29次)」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報11』(1981年) p. 4～11

5 西面外濠SD260 (6AJK-C, 6AJM-B, 6AJJ-C区 23-5・34・36次調査)

西面大垣SA258の西約20mのところにある素掘りの南北溝。西南隅では後世の氾濫と、浸蝕によって著しく拡幅、変形しており、幅約10m、深さ1.6mとなる。堆積土は大きく3層にわかれるが、最下層のバラス層でも藤原宮期から平安時代前期までの遺物をふくむ。一方、西北隅ではこの濠が13世紀まで存続することを確認した。木器には、人形・斎串・陽物形板状品・曲物・槽などがあり、とくに平安時代前期の大型人形が注目される(fig. 119)。

〔木器番号〕3918, 4603, 4614, 4615, 4926, 4930, 5210

〔文 献〕奈文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部「藤原宮第23-5次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報10』(1980年) p. 18～19

奈文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部「藤原宮西南隅の調査(第34次)」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報12』(1982年) p. 16～23

前掲「藤原宮西北隅地域の調査(第36次)」p. 4～10

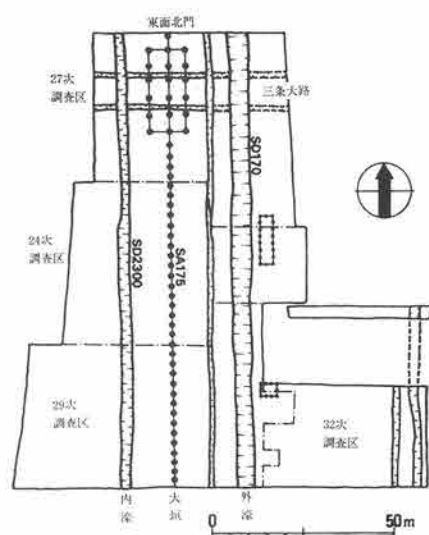


fig. 118 藤原宮跡東面北門付近遺構略図

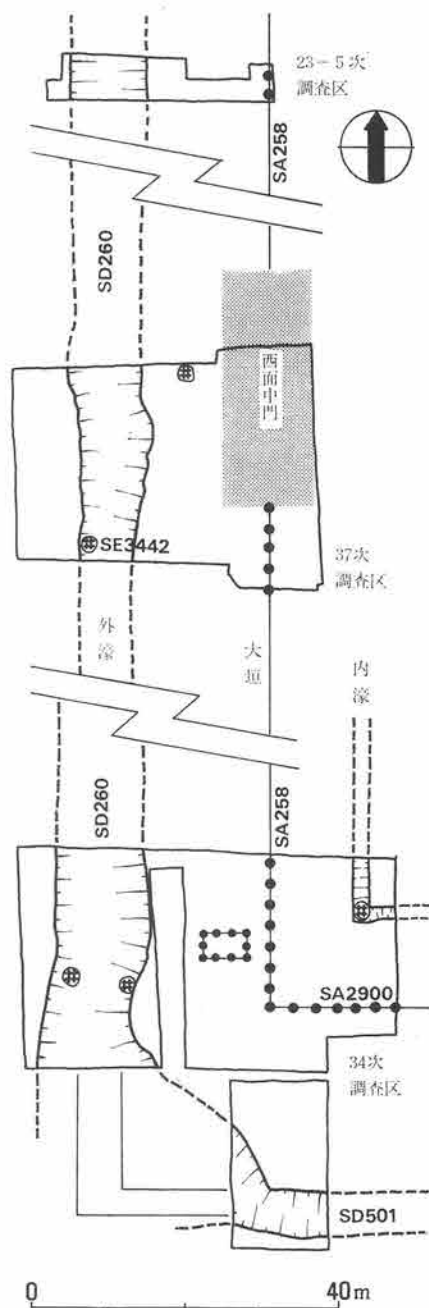


fig. 119 藤原宮跡西限遺構略図

第Ⅲ章 遺跡解説

6 南面外濠SD501 (6AJH-J, 6AJH-Q, 6AJM-B区 1・29-6・34次調査)

南面大垣SA2900の南21～25 mのところにある素掘りの東西溝。南面中門の南(第1次調査)、南面西門の西(第29-6次調査)、宮西南隅(第34次調査)において、その位置を確認。西流するにつれて、やや南へ振れる。幅は6 m前後、深さ1.3 m弱で、宮西南隅では氾濫によって2次的に幅を増している。収録した人形は第29-6次調査において、木簡6点、瓦・土器・獣骨などとともに出土した。藤原宮期(fig. 115・119)。

〔木器番号〕 4903

〔文 献〕 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ』奈良国立文化財研究所学報第27冊(1976年) p. 45～73

奈文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部「藤原原南面大垣の調査(第29-6次ほか)」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報11』(1981年) p. 18～22

前掲「藤原宮西南隅の調査(第34次)」p. 16～23

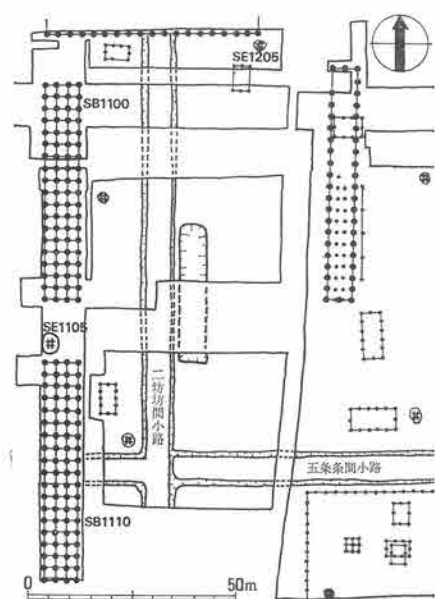


fig. 120 藤原宮跡西方官衙遺構略図

7 西方官衙の井戸SE1105 (6AJL-A区 5次調査)

西面中門以南の大垣の内側に展開する東西53 m、南北108 m以上の区画には、長大な掘立柱建物5棟をコ字形に配した官衙街が形成されている。広場をめぐって長大な建物を配する状況と宮域内での占地は平城宮跡の馬寮に共通しており馬寮相当の官衙が推定される。SE1105は、その西限を画して南北に建つ大型建物SB1110BとSB1100Bとの中間にある井戸。SB1110Bの北妻から北へ1.6 mはなれている。井戸枠は抜取られ、掘形の壁がくずれて大きな穴となり、上部で径4 m、底部で径2.8 m、深さ2 m。なかから木簡・瓦・土器・木器・鮑3個・サザエ1個などが出土。木器には斎串・櫛・曲物・折敷・篋・鋤がある。藤原宮期(fig. 120)。

〔木器番号〕 0401, 1801

〔文 献〕 菅原正明・山中敏史「木製品」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第31冊(1978年) p. 71～78

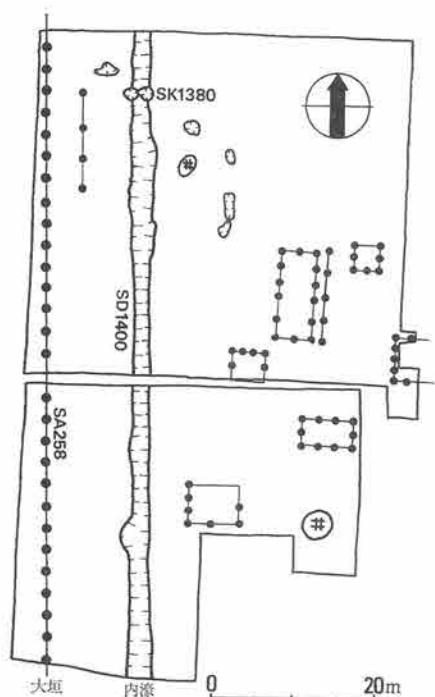


fig. 121 藤原宮跡西方官衙南区遺構略図

8 西方官衙の井戸SE1205 (6AJK-F区 7次調査)

西方官衙地区で発見した藤原宮造営前の井戸。同じく造営前の建物SB1040の東北隅から北5 mはなれて検出。縦板組方形の井戸枠をとどめる。掘形は不整形で、上部で径2.2 m、底部で径1.1 m、深さ2.5 mであり、底に小石をしく。井戸枠の内法は方0.65 m。なかから斎串・曲物・折敷・独楽などが出土した。時期は藤原宮造営前の7世紀後半(fig. 120)。

〔木器番号〕 4527

〔文 献〕 同 上

9 西方官衙地区の土壌SK1380 (6AJL-E区 10次調査)

西面南門の南妻にとりつく大垣SA258の内濠SD1400に重複する不整形の土壌。SD1400の堆積土を排除したのちに検出し、SD1400に先行することになる。径1.8 m、深さ1.4 m。底から軋1, 瓦1が出土した。7世紀後半。藤原宮造営時の遺構(fig. 121)。

〔木器番号〕 1208

〔文 献〕 同 上

10 西面中門前の井戸SE3442 (6AJK-F区 37次調査)

西面中門前の外濠 SD260 西肩部にある曲物組の井戸。径50×75 cm、深さ1.5 mの不整形掘形内に、底板をはずした曲物を2段積んで井戸枠とする。井戸のなかから斎串・ヒョウタンが出土した。藤原宮廃絶後の井戸である(fig. 119)。

〔木器番号〕 3407

〔文献〕 奈良研飛鳥藤原宮跡発掘調査部「藤原宮西面中門地域の調査 (第37次)」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報14』(1984年) p. 11~19

G 藤原京跡 ふじわらきょう

藤原宮をとりまく外周に、南北9条・東西8坊地割りの条坊が想定されており、いくつかの場所で条坊にともなう道路・側溝などを確認した。大官大寺跡・紀寺跡など京域内の調査も進行しているが、木器が出土する良好な遺構はまだきわめて少ない(fig. 122)。

1 右京七条一坊一・二坪の井戸SE2270 (6AJH-N区 23次調査)

橿原市上飛弾町に所在。1978年に奈良国立文化財研究所が調査。日高山北麓にそって盛土整地した平地にあり、瓦窯や鋳銅工房をふくむ工房の一郭にもうけられた井戸。SE2270は素掘り井戸で、直径1.8 m、深さ1.1 m。埋土は3層にわかれ、上層からは削屑・檜皮などの木片とともに「□首首」と判読できる木簡や瓦窯の窯体残片が出土。中・下層からは土師器瓶を主とする土器が出土した。木器には曲物・櫛・斎串・斗形模型がある。藤原宮期(fig. 122)。

〔木器番号〕 3104, 3801, 3802, 4609, 4730, 4731, 6303

〔文献〕 藤原京右京七条一坊跡調査会『藤原京右京七条一坊跡調査概報』(1978年) p. 3

2 右京八条三坊の八条大路北側溝SD104(6AMY区)

橿原市城殿町に所在。本薬師寺の西南隅で、西三坊大路と八条大路との交叉点にあたる。八条大路SF101の路面幅は14.0 mで、南北に側溝をもうける。北側溝は、幅2.2 m、深さ0.45 mの素掘り溝で、堆積土から刀形が出土した。藤原宮期(fig. 122)。

〔木器番号〕 5603

〔文献〕 奈良国立文化財研究所「本薬師寺西南隅の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報6』(1976年) p. 49~55

3 紀寺跡の土壌SK004

高市郡明日香村小山に所在。寺地は藤原京左京八条二坊の1坊分が推定される。1973年から1978年までに5次にわたる発掘調査を奈良県立橿原考古学研究所が行い、寺域の主要部分の構造が明らかになった。寺域の南限に築地大垣をめぐらし、内に南大門をおく。南大門に東西からとりつく木堀が1坊全域をめぐるのである。門の北に中門・金堂・講堂を配し、中門と講堂を結ぶ回廊が金堂を囲んで方形にめぐる。南大門前で東西に流れる大溝SD003から7世紀後葉から8世紀代の木器が出土し、南方に土壌SK004がある。SK004は、東西5 m、南北3 mの皿状を呈し、中央部分が一段深い。堆積土は上下2層にわかれ、木簡2点をふくむ多数の木器が集中する。木器には糸巻・琴柱・人形・曲物・篋・栓・箸がある。この土壌は、南大門建築後に不要品を投棄したもので、7世紀後葉(fig. 122)。

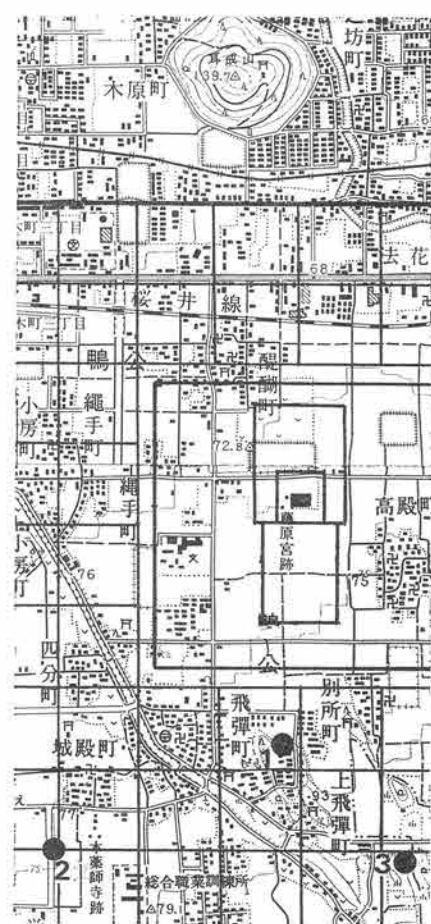


fig. 122 藤原京跡木器出土地点
(1:25000 桜井・敏傍)

〔木器番号〕 1002, 1006, 4513, 4514

〔文 献〕 泉森皎・藤井利章「明日香村紀寺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1977年度』奈良県橿原考古学研究所編（1978年）p. 83～91

藤井利章・松田真一「明日香村紀寺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1978年度』奈良県立橿原考古学研究所編（1979年）p. 191～197

H 橿原遺跡 かしわら



fig. 123 橿原遺跡木器出土地点
(1:25000 畝傍)

橿原市畝傍町を中心に所在する。畝傍山東麓に位置し、1938年からはじまる橿原神宮外苑の整備拡張工事とともに奈良県が発掘調査を行った。縄文時代晩期、弥生時代、古墳・奈良・平安時代にわたる集落跡。奈良・平安時代の遺構は井戸と掘立柱建物で、22基の井戸を検出した。井戸には縦井・横井・筒井・板井などの井戸枠を組む。井戸のなかから、土馬・土師器・須恵器・和同開珎・延喜通寶・鉄刀子・鉄鏃などとともに、櫛・斎串・下駄・曲物・乾漆などの木器が出土した(fig. 123)。

井戸9号は現在の野球場東南隅にあり、調査域内で最大の井戸枠を組む。井戸枠は上下2段にわかれ、上段は1辺170cmの井籠組で、下段は1辺100cm、深さ121cmの縦板組。内部から木片・樹皮・モモの種子・瓦・土師器・緑釉陶器・土馬・刀子・鋏・櫛・下駄・斎串が出土した。土馬の型式から9世紀前半にぞくすることがわかる。

〔木器番号〕 井戸9号；2304

〔文 献〕 末永雅雄ほか『橿原』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第17冊 奈良県教育委員会（1961年）p. 319～332

I 纏向遺跡 まきむく

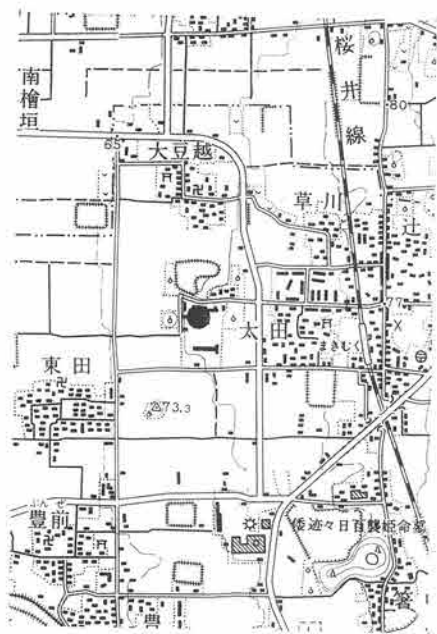


fig. 124 纏向遺跡木器出土地点
(1:25000 桜井)

桜井市の市街地北部に所在。大和盆地東部山麓の扇状地の一つである巻向扇状地の扇央と扇端に位置する。1971年4月から1975年6月にかけて、桜井市と奈良県立橿原考古学研究所が辻地区（東・西）と東田地区において7次にわたる発掘調査を行い、古墳時代前期の集落跡・古墳、古墳時代から平安時代におよぶ旧河道、平安時代の井戸群を発見した。東田地区の中央部、太田北微高地の延長上の纏向石塚・同矢塚古墳にはさまれた地域から18基の平安時代の井戸と柱穴とを検出した。井戸14は南溝の中央部に位置し、径1.2m、深さ1mの円形井戸。井戸枠に曲物を用いる。瓦器碗片と土師質小皿が出土し、瓦器碗の型式から11世紀後半と推定される。井戸3は北溝の肩部にあり、径約1.2m、深さ約1mの円形井戸で、中央部北寄りに径40cmの曲物枠を2段のこす。遺物は土師質小皿片をふくむだけだが、その型式から11世紀後半の時期を推定している(fig. 124)。

〔木器番号〕 井戸14；3412 井戸3；3414

〔文 献〕 石野博信・関川尚功『纏向一奈良県桜井市纏向遺跡の調査』桜井市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所（1976年）本文編 p. 98～107, p. 368～372

J 布留遺跡 ふる

奈良県天理市布留・三島・豊田・豊井・杣之内・守目堂町に所在。1938年に最初の発掘があり、1973年から埋蔵文化財天理教調査団が継続的に調査している。縄文時代中・後期、弥生時代後期～平安時代の複合遺跡。もっとも密度の高い遺構は古墳時代にぞくするもので、集落跡

・祭祀跡・攻玉工房跡・鉄器工房関係の遺物を検出している。木器は三島（里中）地区(FK20・FL20・FM20区)で出土。1978年10月～1979年2月、1980年5月～1981年4月の間に断続的な調査を行った。木器は主として古墳時代中期～後期の流路と古墳時代後期～奈良時代の2条の流路から出土し、両者の範囲は平安時代には湿地状に変貌する。掲載の木器は8世紀後葉～9世紀前葉に比定しうる(fig. 125)。

〔木器番号〕0710, 1014, 3007, 3211, 5702, 6609, 6613

〔文献〕布留遺跡天理教調査団（改め埋蔵文化財天理教調査団）『出土木器の樹種と木取りⅠ・Ⅱ』布留遺跡研究中間報告3（1981年）

K 白毫寺遺跡 びゃくごうじ

奈良市白毫寺町に所在する。県立高円高校建設のため1982年に奈良県立橿原考古学研究所が調査した。奈良市の東郊の高円山の西南麓に位置し、京東五条四里三十二坪、同五里七・八坪にあたる。南を岩井川、東を高円山で限る東西約250m×南北150mの範囲が推定できる。

主要な遺構として園池・掘立柱建物5棟・井戸7基を検出。谷をせきとめてつくった池には大型の庭石を配し、一部に敷石がある。庭園の泉水池の可能性が高い。池の堤は、坪境の線上にのる。井戸は素掘りのもの、曲物を用いたもの、井戸枠を組む矩形井戸など種々である。

井戸からは、主に奈良時代の土器や木簡・斎串などが出土した。池1の埋土からは、多量の土器とともに「天平五年閏月廿六日白合」の木簡、斎串・檜扇・下駄・曲物・土馬・帯金具・銭貨などが出土した。銭貨には隆平永寶・富寿神寶がある。鬼瓦片は、平城宮第2次朝堂院所用のもの。これらの遺構は8世紀に建設され9世紀に廃絶したものとおもわれる。

弘仁7年(816)、貞観14年(872)、延喜12年(912)の『薬師院文書』によると、雄豊王家・並城王家・美濃王家の家がこの地に東西に並んでいたらしいが、この史料に合致する遺構は検出していない。高円離宮の可能性もある(fig. 126)。

〔木器番号〕池1；0918, 1705, 2110, 4004, 5621, 6108 SD02；2109

〔文献〕中井一夫・関川尚功・千賀久・井上義光「白毫寺遺跡」『奈良県遺跡調査概報1982年度(第1分冊)』奈良県立橿原考古学研究所編（1983年）p. 71～80

L 平城宮跡 へいじょうきゅう

奈良県奈良市佐紀町を中心にして所在する。東西約1.25km、南北約1kmの曲尺形の平面形を呈し、133haが特別史跡に指定されている。発掘調査は戦前にも若干行われたが、1954年から本格的発掘がはじまり、1955年以降は奈良国立文化財研究所が発掘調査と保存整備を行い現在に至っている。平城京は奈良山丘陵の末端が平地に移行する地形をたくみに利用し、台地部には内裏・大極殿・朝堂などの重要施設をおき、各種の官庁を低地部に配置する傾向がある。木器は排水・給水のために宮域内にめぐらした溝、給水用の井戸あるいはごみ捨て用の土壙などから出土する。平城宮跡の遺構は、1平城宮造営前、2平城宮遷都～恭仁宮遷都（710～740年）、3平城遷都～長岡宮遷都（741～783年）、4平城上皇の平城造営（809～825年）の4時期に大別でき、出土木器もこれに準じた年代があたえられる。また、伴出する紀年木簡によって、より厳密な年代が確認できる場合も少なくない。一方、土師器・須恵器の型式編年によって、平城宮遷都から平城上皇の時期までがⅠ～Ⅶ型式に区別されており、これによって木器の年代を推定することができる(fig. 127)。

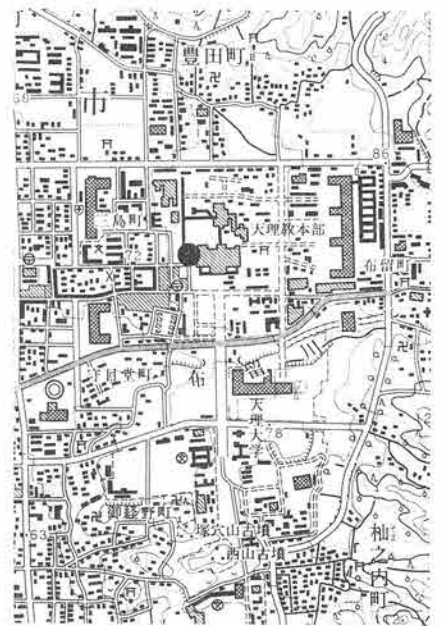


fig. 125 布留遺跡木器出土地点
(1:25000 大和郡山)

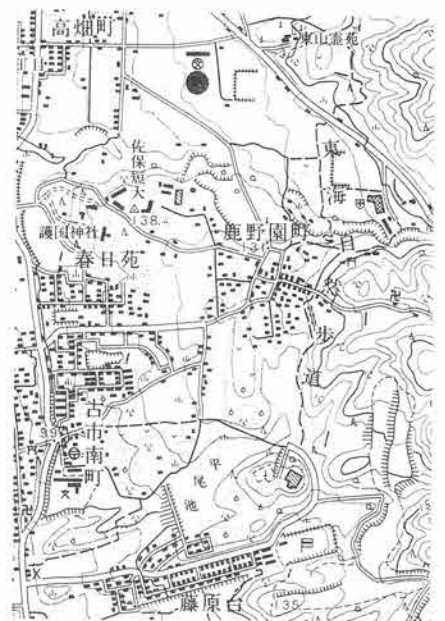


fig. 126 白毫寺遺跡木器出土地点
(1:25000 大和郡山)

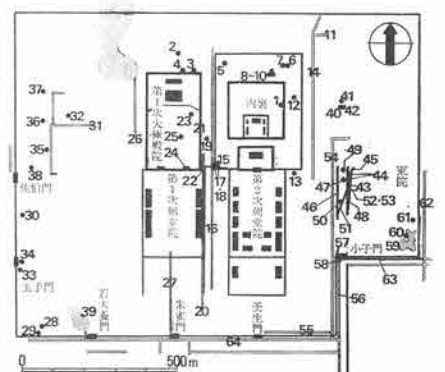


fig. 127 平城宮跡木器出土地点

第三章 遺跡解説

1 内裏の井戸SE7900 (6AAP-L区 78次南調査)

内裏内郭の東面中門 SB6900 を入って、すぐ北のところにある御井。東面築地回廊 SC156 の西半部ほぼ4間分を、その一部に組み入れた東西 8.3m、南北 14.5m におよぶ施設で、築地回廊と同時期の造営である。東・西辺は凝灰岩切石を積んで、約80度の傾斜をもつ擁壁をつくり、南・北辺には階段をつくる。中央は南北 5.8m、東西 7.3mの範囲を安山岩塊石で舗装し、この西南寄りに井戸を掘る。井戸枠は径 1.65m、高さ1.9mの一木作りの丸井筒(スギ)で、上部に一辺 1.7m の方形に板枠を組み、1間四方(東西 2.8m、南北 3.3m)の井戸屋形を建てる。石敷の四周に幅 30~40cm の溝がめぐり、排水は東南の凝灰岩石溝に集め、築地回廊の基壇下の暗渠 SD2350 を通して内裏外へ流す。井戸の推積土から、土師器・須恵器のほか、「白物桶福德」と墨書きした曲物底板、土馬、和同開珎・神功開寶・隆平永寶・帯金具とともに、斎串・横櫛・曲物・籠・折敷・木錘などの木器が出土した(fig. 128)。

平城宮中枢部に設けられた内裏は、8世紀前葉には掘立柱の木堀であったが、8世紀中葉から周囲に築地回廊をめぐるなど大改作を行っている。SE7900 はこの改作期につくられ、廃都時まで長期にわたって存続したようである。出土遺物は最終段階である8世紀後葉から9世紀前葉にかけてのもの。

〔木器番号〕 0801, 0802, 0806

〔文献〕平城宮跡発掘調査部「平城宮跡とその周辺の発掘調査」『奈良国立文化財研究所年報1974』(1975年) p. 22~26

2 宮内省大膳職の土壇SK219 (6ABO-B区 5次調査)

第1次大極殿地域の北方に位置し築地で囲む一区画は、大型井戸を中心に庁舎を配置する宮内省大膳職に比定されている。SK219 はその東区の西端北寄にある土壇。東西 3.0m、南北 3.5m、深さ1.0mの北半部と、東西 3.0m、南北 2.5m、深さ1.0mの南半部とにわかれる。天平宝字6年(762)の紀年木簡をはじめとする41点の木簡、大量の土師器・須恵器、少量の黒色土器が出土し、平城宮土器Ⅳの基準となっている。木器には、杓子・箸・蓋板などがあり、木炭・薪・檜皮・クルミの殻などが共伴した(fig. 127)。

〔木器番号〕 4305, 7201, 7225

〔文献〕『平城宮跡発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第15冊(1962年) p. 75・76

3 宮内省大膳職の井戸SE272B (6ABO-D区 7次調査)

大膳職の東区の東南隅にある大型の井戸。東西 6m、南北 5m、深さ3.7mの掘形内に、長方形の板材を井籠組にする。内法は一辺 1.8m。井戸枠は4段分がのこり、上部3段の材は、長さ 2.07m、幅 30cm、厚さ 7cmであるが、最下段は長さ 2.13m、幅 36cm、厚さ 9cmとひとまわり大きく、この井戸より大きな前身井戸(SE272A)の材を、再利用したものとおもわれる。承和昌寶や平城宮土器Ⅶの土師器・須恵器・黒色土器とともに、斎串・櫛・下駄・曲物・挽物盤・横槌・剝物・鎌・錐などが出土した(fig. 129)。

〔木器番号〕 0112, 0228, 0709, 1806, 1808, 1809, 2201, 2909, 3502, 4002, 4705, 4713, 4722

〔文献〕岡田茂弘「木製品・金属製品」『平城宮跡発掘調査報告Ⅳ』奈良国立文化財研究所学報第17冊(1966年) p. 33~37

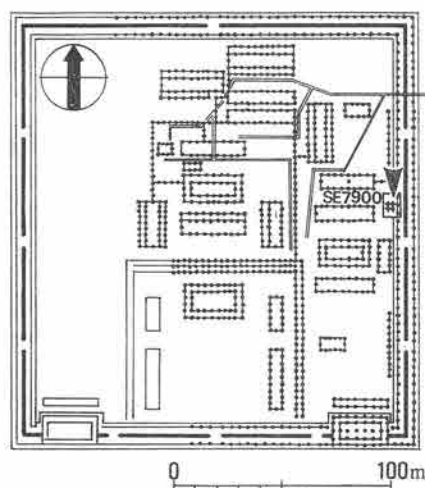


fig. 128 平城宮跡内裏地域遺構略図

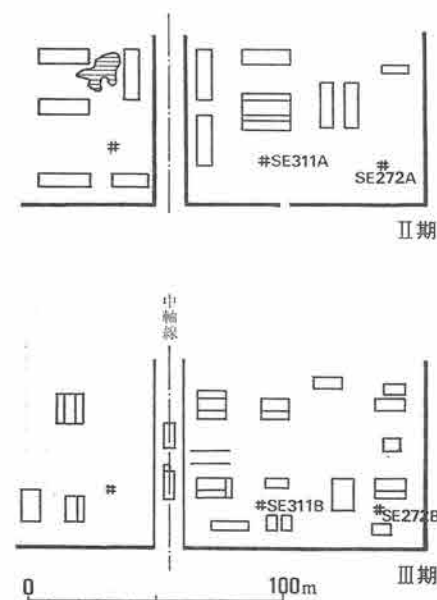


fig. 129 平城宮跡宮内省大膳職地区遺構変遷略図

4 宮内省大膳職の井戸SE311A・B (6ABO-F区 7次調査)

大膳職の東区の中央南寄りにある大型井戸。当初(SE311A)は、一辺7m、深さ4mの方形掘形内に、長さ2.6m、幅36cm、厚さ9cmのヒノキ板材を井籠組にし、井戸底には礫を敷いていた。内法は一辺2.25mをはかる。SE311Aは一度放棄されるが、後に下2段をのこして井戸枠を撤去し、ひとまわり小さい井戸SE311Bを構築する。SE311Bの構築に際しては、SE311Aの下1段上面までの埋土をさらえ、西辺と南辺の井戸枠を再利用する。東辺と北辺とは、SE311A内に凝灰岩切石を並べ、上に長さ2.1m、幅23cm、厚さ9cmの板を立て、A井戸枠の西辺と南辺とに、渡りあごに組込む。南辺のA井戸枠の外側では、長さ2.2m、幅27cm、厚さ9cmの板を当て、西辺ではA井戸枠の上面に凝灰岩切石片を並べて、各辺の上面の高さを揃えている。内法は法1.9m(fig. 129)。

SE311Aの底からは、平城宮土器Vの土師器・須恵器、萬年通寶・神功開寶、木簡とともに、呪いの人形・斎串・櫛・錐などの木器が出土した。また、SE311Bからは、9世紀初頭に活躍した「津守貞成」の名を記した木簡や隆平永寶などとともに、土師器、黒色土器・須恵器・施釉陶器が出土し、平城宮土器Ⅶの基準となった。木器には、陽物形・櫛・漆器蓋・漆器鉢・曲物・木槌・丸木弓・部材などがある。

〔木器番号〕SE311A ; 0229, 1813, 1814, 3815, 4715, 4913

SE311B ; 0109, 1309, 1802, 1803, 2421, 2441, 3501, 3507,
3707, 3812, 4201, 6103

〔文 献〕同 上

5 内裏北外郭の井戸SE551 (6ABB-B区 11次調査)

内裏北外郭にある築地で囲む東西に長い一区画を、宮内省内膳司にあてている。この区画と西方の大膳職との空間地に方形縦板組の井戸(SE551)がある。径約1m、深さ1.2mの不整円形掘形内の底にバラスを敷き、中央に径38.4cm、高さ27cmの曲物をすえる。曲物の周囲を上縁近くまで埋め、幅15~20cm内外の板を、各辺3~4枚たて並べ、内法0.5mの井戸枠を組む。内面は横棧で支える。この井戸は平城宮の遺構を掘込んでつくっているもので、平城宮廃絶後の9世紀にぞくする(fig. 130)。

〔木器番号〕3408

〔文 献〕『平城宮跡発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報第26冊(1976年) PLAN8

6 内裏北外郭の土壙SK820 (6AAB-U区 13次調査)

内膳司の東面築地の東方に位置する某官衙にぞくする土壙である。上端で方3.8m、底部で方3.2m、深さ1.7m。天平末年頃のある時期塵芥処理のために掘鑿し、きわめて短期間で埋戻したものとかんがえられている。養老2(718)~天平19年(747)の紀年木簡をはじめとする1,843点の木簡、および平城宮土器Ⅲの基準となった土師器・須恵器とともに、木器が多数良好な状態で出土した。平城宮の遺構・遺物を編年するうえで重要な基準になっている(fig. 130)。

〔木器番号〕0114, 0115, 0116, 0119, 0203, 0208, 0232, 0305, 0330, 0901,
0903, 0907, 0910, 1104, 1105, 1501, 1602, 1708, 1815, 1816,
1914, 1927, 1936, 2510, 3107, 3804, 3809, 3901, 3902, 3907,
3908, 4010, 4202, 4210, 4211, 4217, 4221, 4231, 4233, 4236,

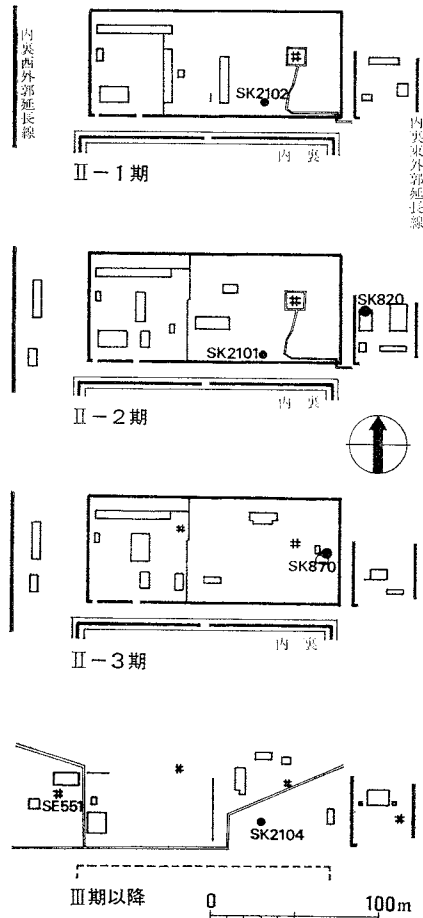


fig. 130 平城宮跡内裏北外郭地区遺構変遷略図

4317, 4403, 4411, 4801, 5409, 5507, 5703, 5712, 5717, 5733, 5805, 6009, 6409, 6410, 6501, 6502, 6606, 6711, 6723, 6724, 6816, 6909, 6915, 6918, 6919, 6920, 6924, 7011, 7012, 7019, 7022, 7224, 7305

〔文献〕町田章「木製品・繊維製品」『平城宮跡発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報第26冊(1976年) p. 111~134

7 内裏北外郭の土壌SK870 (6AAO-D区 13次調査)

内膳司の東面築地に接する不整形の土壌。東西9m, 南北10m, 深さ1.3mで、墳底に境があり、2回にわけて掘鑿したことがわかる。「左衛士府」の木簡をふくむ40点の木簡、平城宮土器Ⅴの基準となった土師器・須恵器、斎串・匙・栓・冠・籠などの木器が出土(fig. 130)。

〔木器番号〕4031, 7118, 7223

〔文献〕同上

8 内裏北外郭の土壌SK2101 (6AAO-G区 20次東調査)

内膳司東半部に密集する10基の土壌(SK2100~2109)のひとつ。東西3.5m, 南北3.4m, 深さ35cmのほぼ方形を呈する。土壌内の埋土は、大きく上下2層に大別できるが、包含された土器には時期差がなく、短期間に埋め戻したことがわかる。天平18(746)~天平勝宝2年(750)の紀年木簡をはじめとする394点の木簡、平城宮土器Ⅲの基準となった土師器・須恵器とともに、刀形・斎串・木針・杓子・箸・曲物・火鑽板・木蓋・部材などの木器が出土した。8世紀中葉の改作時に掘鑿した塵芥処理用の土壌(fig. 130)。

〔木器番号〕0329, 0803, 0804, 3116, 3805, 3807, 5619, 6404, 6512

〔文献〕同上

9 内裏北外郭の土壌SK2102 (6AAO-G区 20次東調査)

SK2101の北に隣接する東西3.8m, 南北2.4m, 深さ0.3mの不定形の土壌である。層位的にSK2101よりも古い。神亀6年(729)の年紀のある造営関係文書など111点の木簡があり、この地域の造営にかかわる塵芥処理の土壌とかがえられる。平城宮土器Ⅱの土師器・須恵器と槽・部材などの木器が出土した(fig. 130)。

〔木器番号〕3003, 6612

〔文献〕同上

10 内裏北外郭の土壌SK2104 (6AAO-G区 20次東調査)

SK2102の北東に隣接する東西1.7m, 南北1.7m, 深さ1.4mの隅丸三角形の土壌。埋土から籠・鷺口形木器が出土した(fig. 130)。

〔木器番号〕7303, 7304

〔文献〕同上

11 内裏北外郭東北方の溝SD10550 (6AAA-F区 139次調査)

内裏外郭東北隅の北々東約55mに位置する東西溝。幅2.7m, 深さ1.7mの素掘り溝で、内

裏外郭東大溝SD2700にとりつくまでの約13mの間を検出したが、さらに東へのびる。溝の堆積土は5層にわかれ、下2層から天平元年(729)・天平6年(734)の紀年木簡、最上層から天応元年(781)の墨書土器が出土した。土器・瓦や63点の木簡とともに、人形、鏃形・手斧柄・曲物・陽物形・杓子などの木器が出土した(fig. 131)。

〔木器番号〕 5735

〔文 献〕 平城宮跡発掘調査部「平城宮跡・平城宮跡の調査」『奈良国立文化財研究所年報 1983』(1983年) p. 19~20

12 内裏東外郭の井戸SE2600 (6AAC-N区 21次調査)

内裏東外郭は南北2区画にわかれ、各々に築地がめぐる。井戸SE2600は北側の官庁にある方形横板組の井戸。東西2.5m、南北2.3m、深さ3.2mの方形掘形内に、長さ125~128cm、幅57~60cm、厚さ5cmの長方形の板を井籠組にする。内法は方約1mで、井戸枠は4段分がのこる。曲物・杓子・木偶などの木器が出土。重複関係から8世紀後半の井戸(fig. 131)。

〔木器番号〕 3305, 4918, 5503

〔文 献〕 平城宮跡発掘調査部「昭和39年度平城宮跡発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報 1965』(1965年) p. 34~37

13 第2次大極殿東外郭南側の土壌SK7453 (6AAF-S区 35次調査)

第2次大極殿東外郭の南面築地SA705の南方約15m付近に点在する小土壌群。天平の紀年木簡や陰陽寮関連文書など14点の木簡とともに、火鑽板が出土(fig. 132)。

〔木器番号〕 6402

〔文 献〕 平城宮跡発掘調査部「1969年度平城宮跡・藤原宮跡発掘調査」『奈良国立文化財研究所年報 1970』(1970年) p. 34~35

14 内裏外郭東大溝SD2700 (6AAC-H, 6AAA-G・F, 6AAB-S, 6AAD-F区 21・129・139・154次調査)

内裏東外郭の東側で南北に縦貫する宮域内の基幹排水路。通称「東大溝」。内裏東外郭築地の東22mに位置し(第21・154次調査区)、北延長は宮域北限近くまで確認(第129・139次調査区)。宮北限から南約70mの間は素掘りのままで、官衙域の設置に従って、北で東に振るように水路北端を改修している。それ以南は、人頭大の玉石を6~7段に積んで護岸した上幅2.0~2.6m、深さ1.5mの石組溝となる。溝の堆積土は数層にわかれ、最下層から天平初年までの紀年木簡、最上層から奈良時代末の紀年木簡が出土し、SD2700が奈良時代を通じて次第に埋った姿を看取できる。多数の木簡・土器・瓦・木器・金属製品が出土した(fig. 131)。

〔木器番号〕 0233, 0301, 0807, 0906, 1016, 1314, 1317, 1503, 1504, 1505, 1506, 1603, 1604, 1605, 2111, 3105, 3207, 3610, 4218, 4414, 4505, 4508, 4907, 4919, 4922, 4923, 5101, 5412, 5618, 5913, 5914, 6628, 6629, 6630, 6916, 6922, 7119, 7211, 7212, 7237

〔文 献〕 前掲『奈文研年報1965』p. 34~37

平城宮跡発掘調査部「平城宮跡・平城京跡の調査」『奈良国立文化財研究所年報 1982』(1982年) p. 32~34

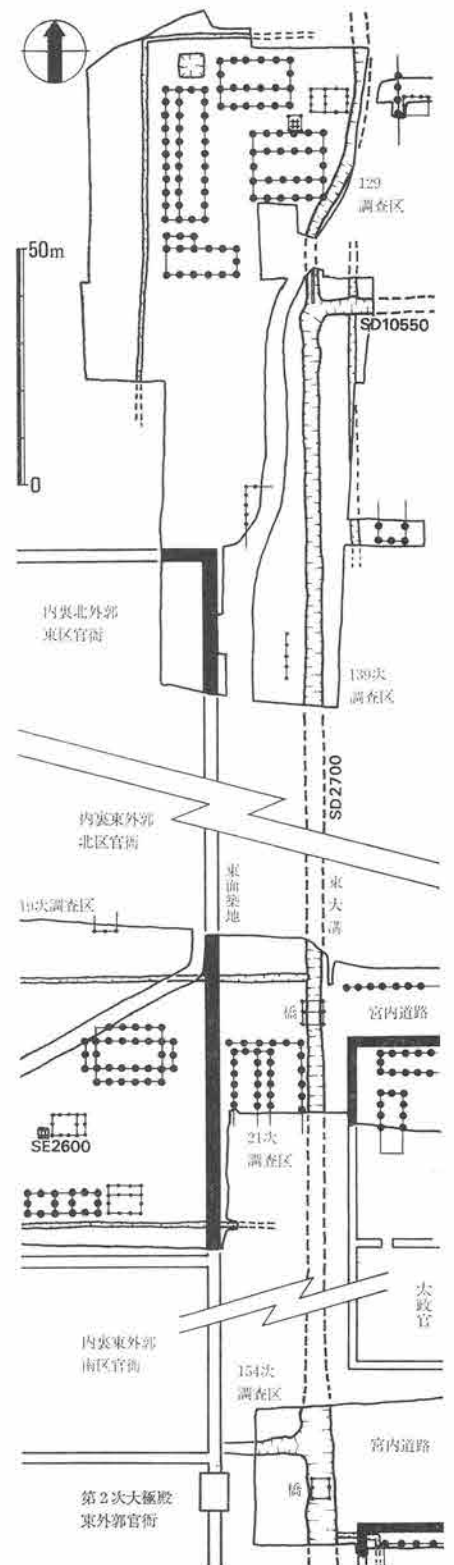


fig. 131 平城宮跡内裏東外郭遺構略図

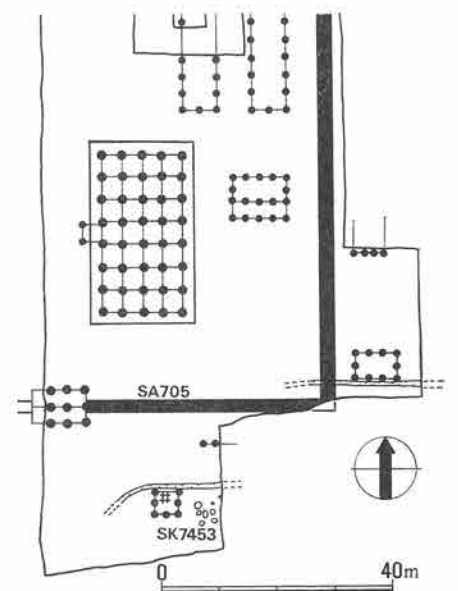
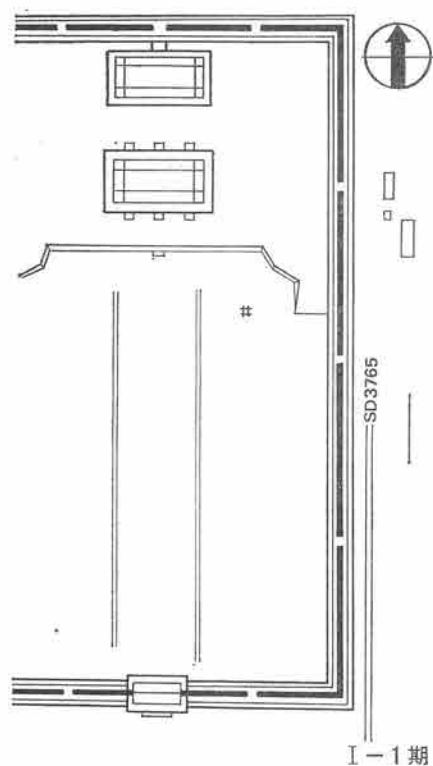


fig. 132 平城宮跡第2次大極殿東外郭遺構略図

前掲『奈文研年報 1983』p. 19～20

奈良国立文化財研究所「第二次大極殿院・内裏東方官衙の調査第 154次」『昭和 58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(1984年) p. 27～33



15 第2次大極殿西外郭遺物包含層 (6ABE-G区 91次調査)

平城宮北方の丘陵は、第1次大極殿地域および内裏地域に向って舌状に張り出し、元来は、両地域の間が谷になっていた。第2次大極殿院西外郭の西南隅において、平城宮造営工事の過程で、この谷間の旧低湿地を埋立てていることを確認した。その整地土の下、旧表土の上から、建築用材の破片や削屑・檜皮などとともに、和銅2年(709)・和銅3年の紀年木簡をふくむ242点の木簡や、斎串・箸・曲物・箱部材・栓・小円板・櫛などの木器が出土した(fig. 133)。

〔木器番号〕 5731, 6624, 6626, 6908, 6914, 6923

〔文献〕 平城宮跡発掘調査部「平城宮跡と平城京跡の発掘調査」『奈良国立文化財研究所年報 1975』(1975年) p. 16～18

16 内裏外郭西大溝 SD3715 (6ABD-D, 6ABE-K・M・P, 6ABC-U・V, 6ABF-B, 6ABG-A・B, 6ABT-A・B, 6ABH-A, 6ABI-A, 6ABJ-A区 27・41・87・97・102・111・136・140次調査)

第1次大極殿地域と内裏地域との間、および第1次朝堂院地域と第2次朝堂院地域との間を、北から南へ貫流する基幹排水路。幅2～3m、深さ1mの素掘り溝である。第1次大極殿地域の北方官衙(大膳職地域)の東端で確認している南北溝SD572 (6ABB-D・E・F区 11次調査)もこの北延長上にあり、第146次調査(6ABJ-B区)でもその南延長を検出し、総長約700mを確認したことになる。出土した木簡などから、霊龜年間(715, 716年)に第1次大極殿に接する南北溝SD3765を東へつけ替えたものが最も古いSD3715で、天平初年頃と奈良時代末頃とに改修を受けて、平安時代初頭まで存続したとかがえられる。木簡・土器・瓦・金属器・木器が出土した(fig. 133・134・135)。

〔木器番号〕 0117, 0234, 0307, 1001, 1004, 1017, 1206, 1817, 1924, 1928, 1930, 2807, 3212, 4027, 4028, 4234, 4237, 4320, 4929, 5405, 5719, 5720, 5736, 6505, 6805, 6806, 6818, 6827, 6901, 6917, 7202, 7206, 7207, 7208, 7209, 7210, 7213, 7215, 7228

〔文献〕 井上和人「木製品」『平城宮発掘調査報告XI』奈良国立文化財研究所学報第40冊 (1982年) p. 195～201

平城宮跡発掘調査部「平城宮跡と平城京跡の調査」『奈良国立文化財研究所年報 1977』(1977年) p. 22～24

平城宮跡発掘調査部「平城宮跡と平城京跡の調査」『奈良国立文化財研究所年報 1978』(1978年) p. 19～21

平城宮跡発掘調査部「平城宮跡と平城京跡の調査」『奈良国立文化財研究所年報 1979』(1979年) p. 23～25

前掲『奈文研年報 1982』p. 36～37

前掲『奈文研年報 1983』p. 21～22

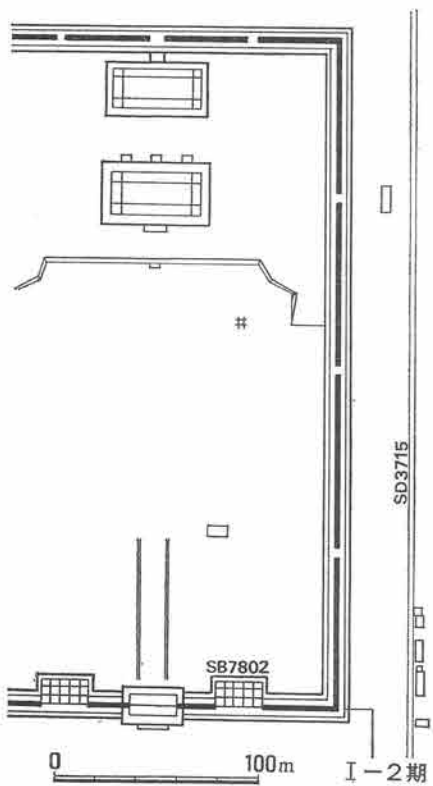


fig. 133 平城宮跡第1次大極殿地域遺構変遷略図(1)

17 第2次大極殿西外郭の溝SD5505 (6ABE-M区 41次調査)

第2次大極殿西外郭と第1次大極殿東外郭にはさまれて南北にのびるベルト地帯の南端に位置し、南北溝SD3715に注ぎこむ素掘りの東西溝。東延長部では、第2次大極殿西外郭の堀もしくは築地に設けた石積の暗渠(SD8161)をうける(第91次調査区)。平城宮土器Ⅲの土師器・須恵器とともに檜扇・小円板などの木器が出土した(fig. 134・135)。

〔木器番号〕 1502

〔文献〕同上 井上「木製品」p. 203

18 第2次大極殿西外郭の溝SD8161 (6ABE-G区 91次調査)

第2次大極殿の南面木堀もしくは築地の北雨落溝。西流して西面木堀もしくは築地の南端で石積の暗渠になり、東西溝SD5505をへて南北溝SD3715へ注ぐ。暗渠は自然石を組合せたもので、内法幅40cm、高さ30cm。この暗渠付近で、鳥形・小円板などの木器が出土(fig. 134)。

〔木器番号〕 6016, 7021

〔文献〕前掲『奈文研年報 1975』p. 16~18

19 第1次大極殿東外郭の土壌SK3730 (6ABE-K区 27次調査)

第1次大極殿東外郭の南部にある方形土壌。一辺2.2m、深さ60cmで、埋土から平城宮土器Ⅴ(Ⅳも一部ふくむ)の土師器・須恵器、木簡4点、檜皮や鏝形などの木器が出土(fig. 135)。

〔木器番号〕 1925, 7109

〔文献〕前掲 井上「木製品」p. 202

20 第1次大極殿東外郭の溝SD3765 (6ABE-K・M, 6ABS-A・E区 27・41・97次調査)

第1次大極殿東外郭の南半部から第1次朝堂院内の東部を貫流する素掘りの南北溝。幅1.6~2.6m、深さ0.6~1.0mで、北限は削平されているが、総長約500mを確認。溝の存続期間は短かく、和銅年間に機能し、第1次朝堂院を建設する霊龜年間に東のSD3715につけ替えられている。和銅の紀年木簡など11点の木簡、平城宮土器Ⅰ・Ⅱの土師器・須恵器、平城宮瓦編年第Ⅰ期の瓦とともに、人形・鎌柄・鋤・杓子・曲物などの木器が出土(fig. 133)。

〔木器番号〕 0201, 0402, 0708, 4222, 4905

〔文献〕前掲 井上「木製品」p. 201・202

前掲『奈文研年報 1977』p. 22~24

21 第1次大極殿掘立柱堀SA3777 (6ABE-K区 27次調査)

第1次大極殿地域における第Ⅰ期(和銅~天平勝宝5年)の東面築地回廊SC5500の東側柱筋に重複する掘立柱南北堀。総柱間は65間(307.3m)。柱間寸法は4.58m(15.5尺)で、2個所で2間分(9.16m)をあけて門にしている。恭仁宮遷都時に、第1次大極殿SB7200とともに移建された東面築地回廊SC5500にかわる仮設的な閉塞施設とかがえられる。柱痕跡から、平城宮土器Ⅳを主体とする土師器・須恵器、木製合子蓋などが出土した(fig. 134)。

〔木器番号〕 2445

〔文献〕前掲 井上「木製品」p. 203

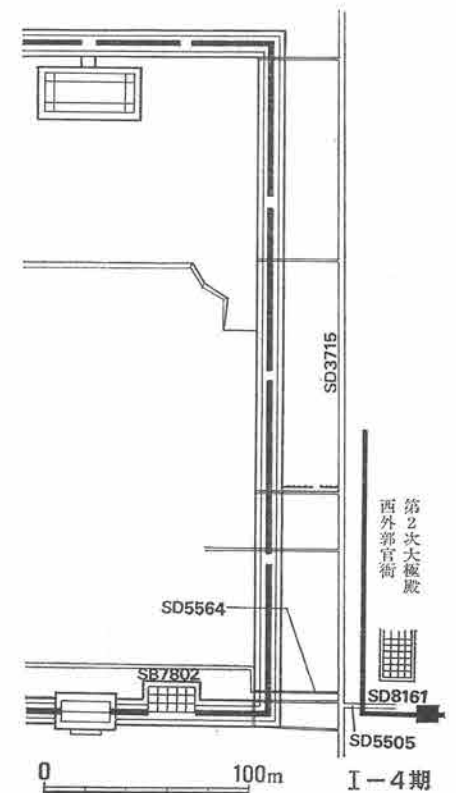
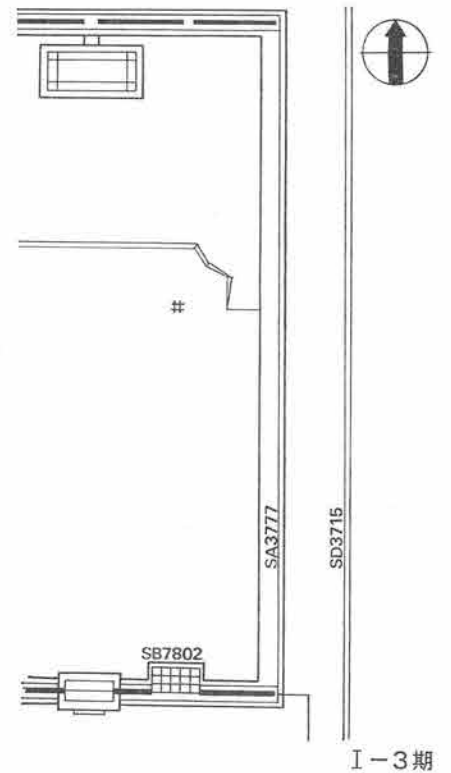


fig. 134 平城宮跡第1次大極殿地域遺構変遷略図(2)

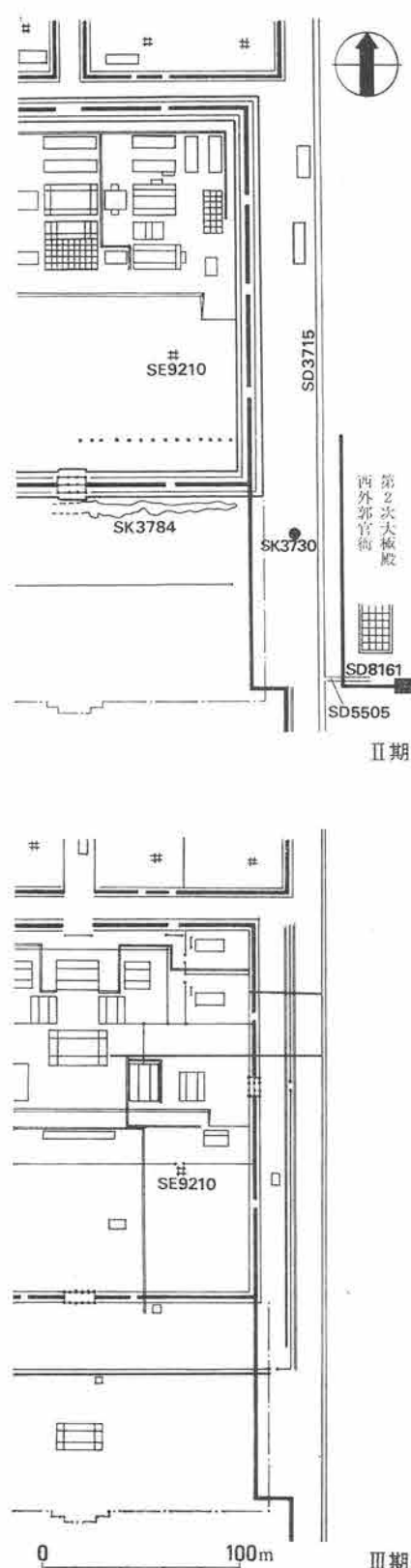


fig. 135 平城宮跡第1次大極殿地域遺構変遷略図(3)

22 第1次大極殿東外郭の溝SD5564 (6ABE-M区 41次調査)

第1次大極殿地域における第I期(和銅~天平勝宝5年)東面築地回廊 SC5500 の南端に設けた東西方向の木樋暗渠 SD5563 を受けて東流し、南北溝SD3715へ排水する素掘りの溝。幅2 m, 深さ 0.6 m, 全長6 mで、天平勝宝9年(757)の紀年木簡をふくむ8点の木簡や、鳥形・曲物などの木器が出土している。これらは、SD5564の東半部から出土し、堆積土の状況からするとSD3715からの溢水が流れこんだものらしい(fig. 134)。

〔木器番号〕 6010

〔文 献〕 前掲 井上「木製品」p. 203

23 第1次大極殿の井戸SE9210 (6ABQ-A区 117次調査)

第1次大極殿の広場地区(殿舎地区の埴積擁壁以南)の東寄りにある井戸。掘形は2段で、上段は一辺7.3 m, 深さ1.7 m, 下段は上段掘形の西北寄りに、東西4.9 m, 南北4.5 m, 深さ1.9 mの長方形に掘込む。下段掘形の底に、井戸枠が4段のこり、内法は方2.25 m。枠木の1段目と3段目とには長方形の板(長さ2.5~2.6 m, 幅22~24 cm)を用い、2段目と4段目とには校倉の校木を転用する。井戸底には拳大の玉石を厚さ10 cmにわたって敷く。玉石敷直上の堆積土から、10世紀代の土師器とともに瓦片・木器が出土した。井戸枠を取りさった後も、11世紀代まで泉として用いたらしい。なお、当初の開鑿は753年頃に想定できる(fig. 135)。

〔木器番号〕 3813, 4523

〔文 献〕 前掲 井上「木製品」p. 204

24 第1次大極殿の南面回廊楼風建物SB7802 (6ABR-H区 77次調査)

第1次大極殿地域における第I期(和銅~天平勝宝5年)南門SB7801の東の南面築地回廊に取り付く5間(22.9 m)×3間(11.52 m)の東西棟建物。総柱で側柱は掘立柱、内部の柱は礎石立。掘立柱の掘形は、3.5 m×2.5 m, 深さ2.75 mと超大型である。前面に南面築地回廊の南半部が廂状に取り付いた楼閣風建物とかがえられる。掘立柱抜取痕跡から、天平勝宝5年(753)の紀年木簡をふくむ243点の木簡、平城宮土器IVを主体とする土師器・須恵器、多量の瓦とともに、92点あまりの木器が出土した(fig. 133・134)。

〔木器番号〕 1101, 1601, 2904, 4220, 4235, 4307, 4316, 4318, 4319, 4322, 5303, 5726, 6002, 6301, 6302, 6305, 6306, 6307, 6308, 6309, 6310, 6311, 7006, 7105, 7123, 7221, 7222, 7230, 7233

〔文 献〕 前掲 井上「木製品」p. 188~195

25 第1次大極殿地域の土壌SK3784 (6ABR-P・G区 27・75次調査)

第1次大極殿地域における第II期(天平勝宝5年以降~天応元年)南面築地回廊 SC3810Aの南側基壇縁にそって東西にのびる不整形の大土壌。最大幅5.3 m, 深さ20~30 cmで、全長78 mを検出し、さらに西へのびる。埋土は上下2層にわかれ、多数の瓦片が出土し、部分的に滞水した痕跡がある。回廊 SC3810A 造成時の土取り痕跡の可能性が強い。平城宮土器IV(Ⅲも一部ふくむ)の土師器・須恵器、匙形木器が出土した(fig. 135)。

〔木器番号〕 4208

〔文 献〕 前掲 井上「木製品」p. 203

26 第1次大極殿外郭西大溝SD3825 (6ACC-F区 28次調査)

第1次大極殿西外郭の西端を貫流する南北溝。幅約3m、深さ0.7~1.0mで、長さ約40mを検出し、さらに南北へのびる。現在の佐紀池のあたりにあった園池の排水路。養老・天平18年(746)の紀年木簡をふくむ79点の木簡、土器・瓦などとともに、百万塔の未製品・漆塗柄頭・匙などの木器が出土した(fig. 127)。

〔木器番号〕1932, 1934, 4304, 5727, 6011, 6201, 6718

〔文献〕平城宮跡発掘調査部「昭和40年度平城宮発掘調査概報」『奈良国立文化財研究所年報 1966』(1966年) p. 36

27 朱雀門地区の大溝SD1900 (6ABX-H・I, 6ABY-G区 16・17次調査)

平城宮造営以前に、大和盆地を南北に縦断していた下つ道の西側溝で、南面中門(朱雀門)の北において、長さ約120mを検出。第119次調査区(6ABW・6ABV)でも、その北延長を確認した(SD1900A)。平城宮造営時に埋めたて、南面中門から北へのびる宮内道路の西側溝(SD1900B)として再利用する。遺物は主として下層のSD1900Aから出土した。SD1900Aは幅2.8~3.0m、深さ0.6~0.8mの素掘り溝。堆積土から藤原京時代の「過所符」をふくむ9点の木簡、平城宮土器Ⅰの基準となった大量の土師器・須恵器と、多数の木器が出土(fig. 136)。

〔木器番号〕0103, 0701, 0702, 0909, 0914, 0915, 0916, 0917, 1005, 1110, 2901, 3106, 3203, 3604, 3605, 4501, 6911, 7001

〔文献〕佐藤興治「木製品」『平城宮跡発掘調査報告Ⅸ』奈良国立文化財研究所学報第34冊(1978年) p. 66~70

28 宮域西南隅の井戸SE1230(6ADH-F区 14次調査)

宮域の西南隅、南面大垣の内側約30mの位置にある方形縦板組の井戸。掘形は方2.1m、深さ2.3m。井戸枠は隼人盾を転用したもので、長さ1.5m、幅0.5mの板を、各辺2枚ずつ立てて並べ、これを2段に組む。盾の彩色面を外側に向け、各辺の中央にある板の接合部、および上・下段の重なり部分には、外側から幅15~20cm、長さ80cmの板材を当てて目張りとする。井戸の内側では、下端と底面から約1mの高さの位置とに、10cm角の角材を方形に組んで補強する。底には礫を敷く。埋土から曲物の断片が出土した。南方の建物SB1222と同時に存在する可能性があり、8世紀前半に相当する(fig. 137)。

〔木器番号〕1401

〔文献〕前掲 佐藤「木製品」p. 62~65

29 宮域西南隅の井戸SE1247 (6ADH-I区 14次調査)

宮域の西南隅、南面大垣の内側約5mの位置にある方形縦板組の井戸。方1.9m、深さ1.0mの掘形内の四隅に柱を立て、横棧を桟留めにし、各辺の外側に縦板を5~6枚ずつ立てる。内法は方1m。枠板は建築部材を転用し、四隅の柱は仕口穴の位置と形状から垂木材、横棧は木舞。井戸の埋土から斎串が出土した。周囲の建物配置からみて8世紀後半の遺構(fig. 137)。

〔木器番号〕4612, 4706

〔文献〕前掲 佐藤「木製品」p. 76

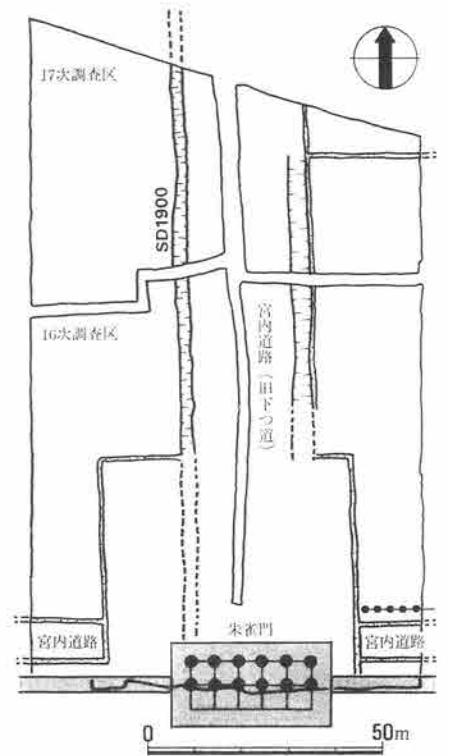


fig. 136 平城宮跡朱雀門地区遺構略図

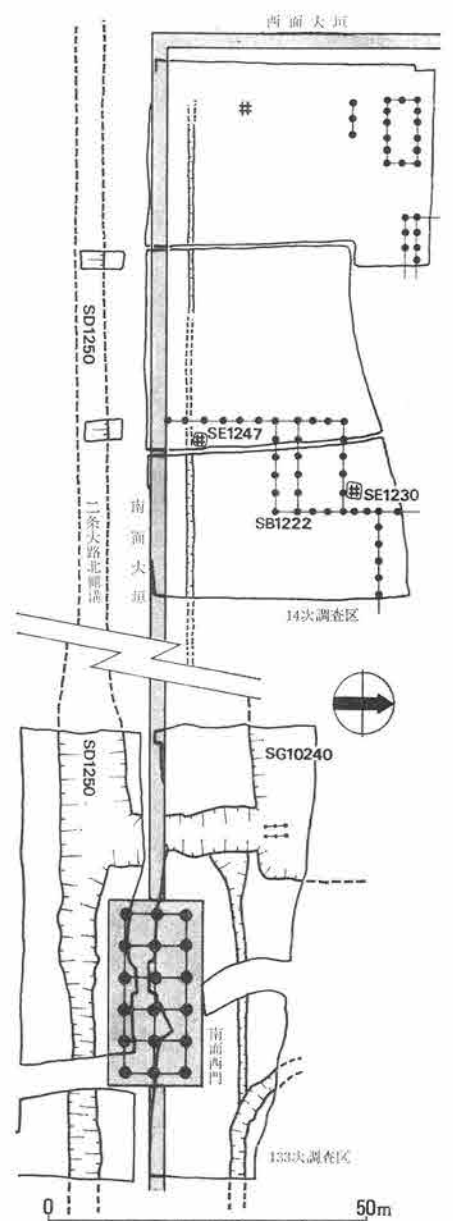


fig. 137 平城宮跡西南部遺構略図

30 西面大垣地区の土壌SK1979 (6ADF-J区 18次調査)

西面中門(佐伯門)と西面南門(玉手門)とのほぼ中間の西面大垣内にある鍛冶工房跡 SX1978 にともなう円形土壌。径約 1.4 m, 深さは 0.7 m をこえる。堆積土から、釘に関連した木簡をふくむ 19 点の木簡, 鉾・櫛の羽口などとともに, 金属器をかたどった形代や鉄身をぬきとった工具柄などの木器が多数出土した。8 世紀(fig. 138)。

〔木器番号〕 0216, 0217, 0218, 0220, 0223, 0224, 0306, 0322, 0323, 0332, 0333, 1202, 5614, 5724, 5725, 5737, 5738, 6803, 6804, 7306

〔文 献〕 前掲 佐藤「木製品」p. 71~76

31 西方官衙地区の溝SD5280 (6ACP-F区 37次調査)

第 1 次大極殿地域と西面大垣とのほぼ中間で検出した東西溝。総長約 110m を検出し, さらに東へのびる。西方では南折し, 推定馬寮の東側に隣接する官衙域の南半部西辺を区切る南北溝 SD5960 につらなる(第 47 次調査)。当初は幅 6.5 m, 深さ 0.3 m であったが, 後に北寄り幅 2.4 m, 深さ 0.4 m の狭い溝になる。刀子形などの木器が出土した(fig. 127)。

〔木器番号〕 5713

〔文 献〕 平城宮跡発掘調査部「昭和 41 年度平城宮発掘調査概報」『奈良国立文化財研究所年報 1967』(1967 年) p. 39~40

32 西方官衙地区の井戸SE5320 (6ACP-F区 37次調査)

第 1 次大極殿地域と西面大垣とのほぼ中間に位置する官衙で検出した方形縦板組の井戸。一辺 2.3 m, 深さ 1.3 m の方形掘形内の 4 隅に支柱を立て, 上下 2 段に横棧を柄どめにし, 各辺の外側に幅 10~20 cm の板を羽重ねに並べる。内法は方 1.4 m で, 底には径 60 cm の曲物をすえる。土器・斎串が出土した。8 世紀後半か(fig. 127)。

〔木器番号〕 4622, 4726, 4729

〔文 献〕 同 上

33 玉手門地区の井戸SE1596 (6ADF-T区 15次調査)

西面南門(玉手門)の南東, 西面大垣の内側約 10 m の位置にある曲物の井戸。一辺 1.3 m, 深さ 2.8 m の隅丸方形の掘形内の中央に, 径 37~41 cm の曲物側板を 8 段以上積む。各段の高さは一定せず, 総高は 1.9 m。曲物側板には底板を固定した痕跡はなく, 容器からの転用とはかんがえられない。土器などからみて, 10 世紀~11 世紀の井戸(fig. 138)。

〔木器番号〕 3304, 6703, 6704

〔文 献〕 前掲 佐藤「木製品」p. 76

34 玉手門地区の井戸SE1627 (6ADF-T区 15次調査)

西面南門(玉手門)の東 6 m の位置にある井戸。井戸枠は抜き取られ, 長径 4.5 m, 短径 2.2 m, 深さ 0.3 m の浅い抜取痕跡の西寄りに, 一辺 0.7 m, 深さ 0.5 m の土壌があり, これがもとの井戸の規模に近い。砥石・土釜・鎌柄が出土。土器によれば 12 世紀頃のもの(fig. 138)。

〔木器番号〕 0703

〔文 献〕 前掲 佐藤「木製品」p. 76

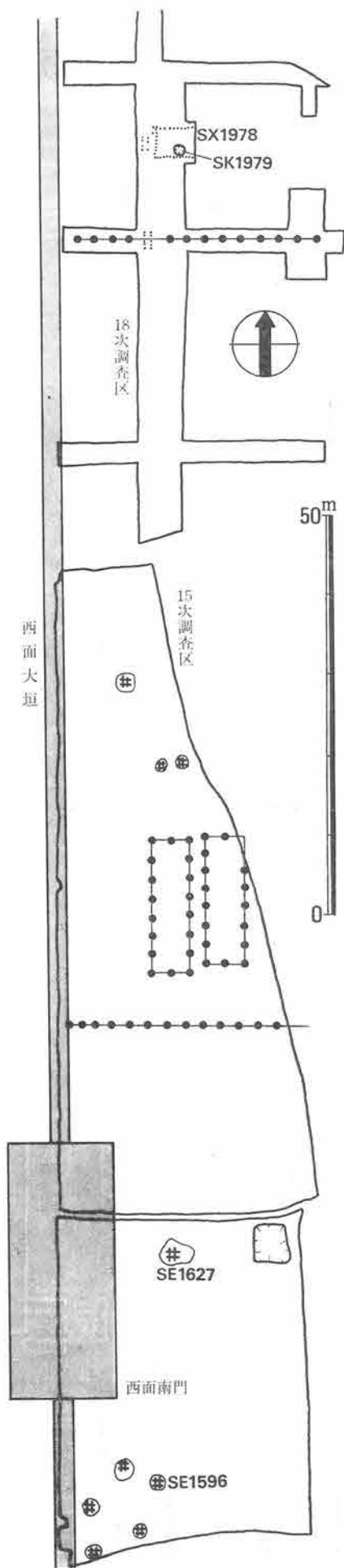


fig. 138 平城宮跡西面大垣・玉手門地区遺構略図

35 馬寮の建物SB5955 (6ADD-P区 51次調査)

馬寮の官衙域(宮西辺部において、西面中門と西面南門とにはさまれた東西84m、南北約250mの区域)の東部にある掘立柱建物。桁行8間(19.2m)、梁間2間(5.9m)の南北棟で、北に2間分の馬道を介し、東側柱筋をそろえた8間×2間の南北棟SB5956につらなる。基準尺の相違から、当初にSB5956を建て、後に南へSB5955を付加したことがわかる。東側柱筋の南から2番目の柱掘形から曲物が出土した。時期は馬寮開設時の8世紀前半(fig. 139)。

〔木器番号〕 3217

〔文 献〕平城宮跡発掘調査部「昭和43年度平城宮発掘調査概報」『奈良国立文化財研究所年報 1969』(1969年) p. 34~37

36 馬寮の井戸SE6166 (6ADC-K区 52次調査)

馬寮官衙域内にある方形横板組の井戸。一辺2.7mの方形掘形内の中央やや南寄りに、長さ1.3m、幅25cmの長方形の板を井籠組にする。井戸枠は10段をのこし、井戸の埋土から平城宮土器Vの土師器・須恵器、鉄製鋤先、斎串・曲物などの木器が出土した(fig. 139)。

〔木器番号〕 3306, 4619, 4628, 4712, 4824, 6701

〔文 献〕同 上

37 馬寮の土壌SK6509 (6ADC-G区 63次調査)

馬寮官衙域の北限を画する東西道路SF6475上に掘られた土壌。現代の井戸によって、南側を大きく破壊され、規模は不詳。埋土から11世紀末の瓦器とともに、軛が出土した(fig. 139)。

〔木器番号〕 1209

〔文 献〕平城宮跡発掘調査部「平城宮跡・飛鳥藤原宮跡発掘調査」『奈良国立文化財研究所年報 1971』(1971年) p. 24~27

38 馬寮の井戸SE7110 (6ADD-Q区 71次調査)

馬寮官衙域内にある井戸。掘形は3段をなし、上段は東西2.6m、南北3.3m、深さ0.7m、中段は上段掘形の南寄りに東西2.2m、南北2.4m、深さ0.4mの矩形に掘込み、下段は中段掘形の中央西寄りに径1.0m、深さ0.6mの円筒形に掘込む。下段の底部から、曲物が出土した。8世紀後葉の建物SB6100の柱穴に重複しているので、9世紀前葉にぞくする(fig. 139)。

〔木器番号〕 3402

〔文 献〕同 上

39 若犬養門地区の園池SG10240 (6ACU-D区 133次調査)

南面西門(若犬養門)の西北14mに位置する園池。東西約22m、南北6~10mの範囲を検出したが、さらに北と西へのびている。秋篠川旧流路の窪地を利用して作られたもので、10世紀初頭まで存続。深さ約1.5mで、南岸を杭・シガラミで護岸する。底に何箇所か深い窪みがあり、土器・瓦・木簡・木器などの遺物が出土した(fig. 137)。

〔木器番号〕 4524, 4912

〔文 献〕平城宮跡発掘調査部「平城宮大極殿後殿・若犬養門の調査」『奈良国立文化財研究所年報 1982』(1982年) p. 9~10

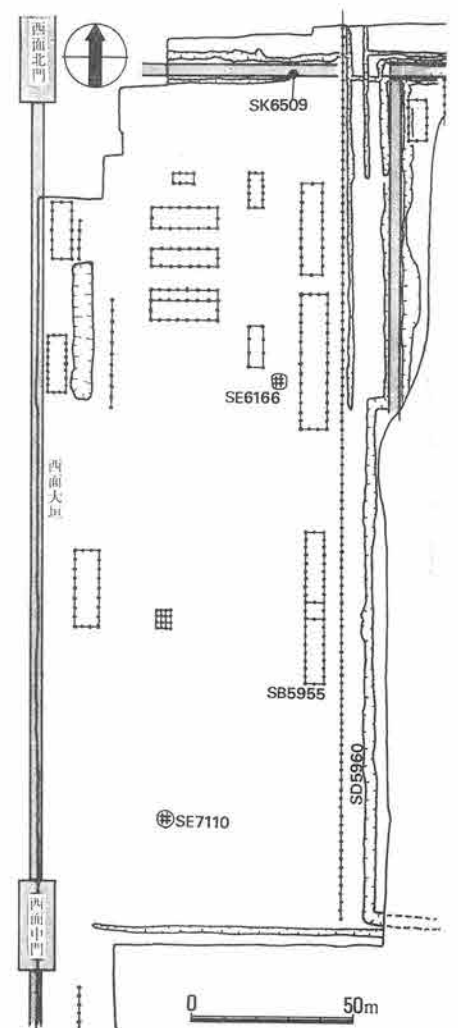


fig. 139 平城宮跡馬寮遺構略図

40 宮内省造酒司の溝SD3035 (6AAC-V区 22次北調査)

内裏の東方に位置し、東西に並ぶ大型の浅い井戸2基と、その東と北に付属する建物群を宮内省造酒司に比定する。SD3035は西側の井戸SE3049の南にある南北方向の溝。ただし、土壌の一部かもしれない。幅0.5m~0.7m、深さ20cm前後で、南部分は水溜り状に広がり、南へのびている。霊亀2年(716)~天平勝宝8年(756)の紀年木簡や造酒司関係の文書木簡をはじめとする562点の木簡、「酢」「酒」などと記した墨書土器をふくむ土師器・須恵器とともに、木器が出土した(fig. 140)。

〔木器番号〕 3204, 3213, 3504, 3814, 3904, 3919, 4107, 4303, 4306, 4412, 4522, 4803, 4823, 5728, 5734, 6008, 7003, 7216

〔文 献〕 前掲『奈文研年報 1965』p. 38

41 宮内省造酒司の井戸SE3049 (6AAC-U区 22次北調査)

宮内省造酒司の井戸2基のうち西側にある方形横板組の井戸。3間×2間(6.3m×4.2m)の東西棟掘立柱建物SB3408(覆屋)の中央にある。覆屋の周囲には、幅50cm、深さ20cm内外の溝が方形(一辺8.4m)にめぐり、溝の内側は人頭大の石と堰板とで護岸する。覆屋内はバラスを敷きつめ、南辺中央には凝灰岩切石を敷き並べて、井戸に至る通路にする。井戸本体は、方4.5m、深さ1.2mの掘形内の東西に、長さ2.9m、幅24cm、厚さ5cmの長方形の板を並べ、その内側に木口面を接して、長さ2.7m、幅24cm、厚さ5cmの板を南北に立てる。内法は方2.7m。各辺の外側は、やや短かい長方形の板で補強する。井戸枠は2段をのこす。井戸の埋土から人形・部材などの木器が出土した(fig. 140)。

〔木器番号〕 6821

〔文 献〕 同 上

42 宮内省造酒司の溝SD3050 (6AAC-U・V区 22次北調査)

造酒司の西井戸SE3049の周囲をめぐる溝の南東隅から発し、南流する溝で、長さ18mを検出した。上下2層にわかれ、上層溝は幅80cm、深さ20cmの素掘り溝で、東井戸SE3046からの排水溝SD3047が合流した部分では側板で護岸する。天平4年(732)・宝亀元年(770)の紀年木簡をふくむ14点の木簡や、「酒司」「造酒」などの墨書土器とともに、箸・杓子・曲物などが出土した。下層溝は幅50cmで、木簡2点と、曲物・箸などの木器が出土(fig. 140)。

〔木器番号〕 2408, 3912

〔文 献〕 同 上

43 東院西边地区の溝SD3113 (6AAF-K, 6ALR-Q区 22次南・128次調査)

平城宮東部の東一坊大路北延長地帯は、遷都当初は宮域外であったらしい。しかし、8世紀前半代に東方へ半坊分拡張して東院を形成する。当初、東一坊大路の北延長をとりこんで東院の西限を設けるが、後に、東一坊大路の北延長を、小子門(東張り出し部南面西端の門)から北進する宮内道路にあて、東院の西限は東へ移動する。

SD3113は、東院の西限が東へ移動する以前の排水路で、第22次南調査区では南流し、第128次調査区では進路をやや南西に向ける。上下2層にわかれ、上層の溝は幅0.9m、深さ0.2m、下層の溝は幅1.7m、深さ0.3~0.5mの素掘り溝である。堆積土から天平勝宝8年(756)の紀

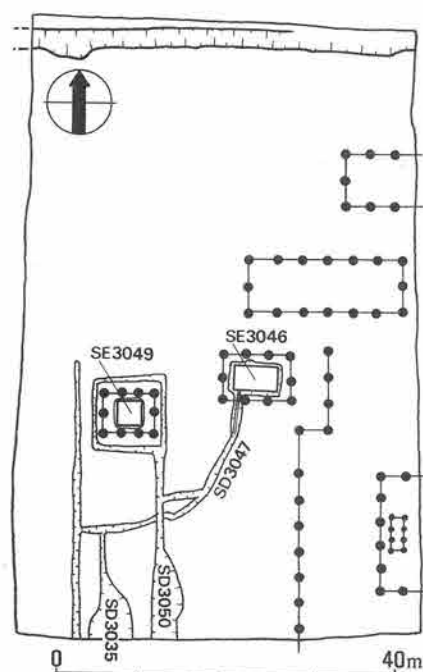


fig. 140 平城宮跡宮内省造酒司遺構略図

年木簡をふくむ9点の木簡、大量の檜皮とともに、曲物・杓子・櫛・挽物盤・折敷・箸などの木器が出土した(fig. 141)。

〔木器番号〕 2702

〔文 献〕 同 上

平城宮跡発掘調査部「平城宮跡と平城宮跡の調査」『奈良国立文化財研究所年報 1981』(1981年) p. 17~21

44 東院西辺地区の土壌SK3137・SK3139 (6AAF-J区 22次南調査)

小子門から北進する宮内道路の東10mにある南北に並ぶ土壌。北土壌SK3139は、南北10m、深さ15~24cm、南土壌SK3137は南北9m、深さ23~27cmで、幅は両土壌とも2m。両土壌は南北溝SD3155の上にあり、瓦・土器・檜皮などとともに、天平宝字3年(759)・景雲4年(770)の紀年木簡をはじめとする木簡9点や、和同開珎・神功開寶、曲物・挽物盤・有孔円板・漆塗高杯・糸巻・工具柄・算木などの木器が出土した(fig. 143)。

〔木器番号〕 SK3137; 2414, 2448, 2504, 2511, 4106, 6705,

SK3139; 3803, 3806, 4402, 6716, 6717

〔文 献〕 前掲『奈文研年報 1965』p. 38~40

45 東院西辺地区の溝SD3154 (6AAF-J区 22次南調査)

東北から南西に向けて斜行する素掘り溝。幅2.0~2.5m、深さ40cmで、溝内には周囲を玉石積にした径2mの会所がある。堆積土から、天平19年(747)の紀年木簡をふくむ41点の木簡や、曲物・有孔円板・糸巻・鳥形などの木器が出土した(fig. 141)。

〔木器番号〕 1106, 2513

〔文 献〕 同 上

46 東院西辺地区の溝SD3236(6AAF-N・O・P, 6ALR-S・T・U区 22次南・104次調査)

素掘りの南北溝。東一坊大路西側溝のほぼ北延長上に位置し、ある時期に小子門から北進する宮内道路の西側溝として機能した。総長約170mを確認している。2回の改修があり、3時期にわけられる。最も古いSD3236Aとそれに続くSD3236Bは幅2mで、Aでは西岸の一部、Bでは両岸の一部に丸杭を打ち込んで護岸する。最も新しいSD3236Cは、幅0.9~1.2mの小規模な溝。A~Cから出土した土器には顕著な時期差はなく、平城宮土器Vを主体とする。天平勝宝年間から宝亀6年(775)までの紀年木簡をふくむ190点以上の木簡、平城宮瓦編年第三期を主体とする瓦、金属器とともに、木器が出土した(fig. 142・143)。

〔木器番号〕 3311, 6019, 7113

〔文 献〕 同 上

前掲『奈文研年報1978』p. 23~25

47 東院西辺地区の土壌SK3264・SK3265・SK3271 (6AAF-O区 22次南調査)

東一坊大路路面敷の北延長上、掘立柱東西棟SB3288の南東付近に散在する土壌群。径0.4~1.6mで、埋土から天平勝宝7年(755)の紀年木簡をはじめとする27点の木簡や、人形・糸巻などの木器が出土した(fig. 142)。

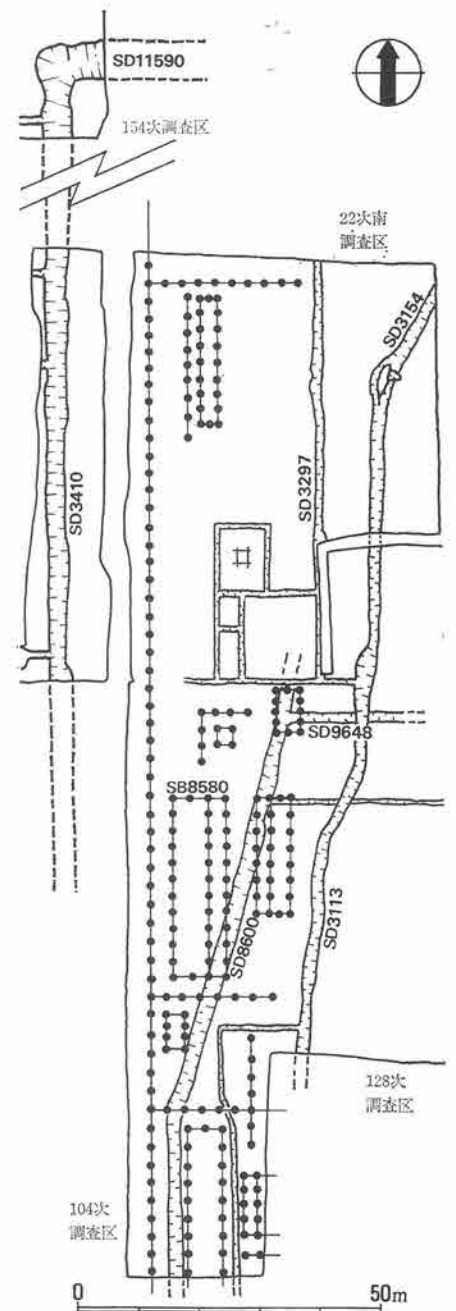


fig. 141 平城宮跡東院西辺地区遺構略図(1)

〔木器番号〕 5513

〔文 献〕 前掲『奈文研年報 1965』p. 38~40

48 東院西辺地区の溝SD3297 (6AAF-N・O・P, 6ALR-Q区 22次南・128次調査)

素掘りの南北溝。東一坊大路東側溝のほぼ北延長上に位置し、総長約 130 m を検出。新旧 2 時期あり、古い時期の溝 SD3297A は、局地的な排水路として機能したが、東院西辺地区の再整備にともない、新たに SD3297B を設け南へ延長する。この溝の廃絶後、やや東寄りに南北堀SA5760を設け、小子門から北進する宮内道路と東院地区西限とがととのう。SD3297B は幅 1.2m, 深さ 20 cm で、第22次南調査区では、部分的に玉石で護岸する。SD3297B から天平勝宝年間の紀年木簡、新古両溝あわせて44点の木簡とともに、多数の木器が出土(fig. 142)。

〔木器番号〕 1311, 2503, 2602, 4410, 5201, 5729, 6815

〔文 献〕 同 上

前掲『奈文研年報 1981』p. 17~19

49 東院西辺地区の建物SB3322 (6AAF-N・O区 22次南調査)

東一坊大路路面の北延長上にある東西棟掘立柱建物。7間×5間 (18.9m×13.5m) で、四面庇と北側に孫庇とがつく。東妻の南から2番目の柱掘形の埋土の最上層にたまった褐色砂から45点の木簡、東北隅の柱穴から栓状木器が出土した(fig. 142)。

〔木器番号〕 6913

〔文 献〕 前掲『奈文研年報 1965』p. 38~40

50 東院西辺地区の建物SB8580 (6ALR-U区 104次調査)

11間×3間 (29.7m×9.0m) の東庇付掘立柱南北棟建物。身舎南妻柱の抜取痕跡から、天平十□年の紀年木簡2点が出土し、墨絵を描いた板や杓子などの木器が共伴した(fig. 141)。

〔木器番号〕 7017

〔文 献〕 前掲『奈文研年報 1978』p. 23~25

51 東院西辺地区の溝SD8600 (6ALR-S・T・U区 104次調査)

北々東から南々西に向けて斜行する溝。平城宮遷都当初に機能するが、東院西辺地区の整備によって埋立てる。南端部分で、後の南北溝SD3236が重複。溝幅は平均 3 m, 深さ 0.6 m で、全長約 92 m を検出した。両岸をシガラミで護岸する。溝の埋土および上部の木屑層から、和銅の紀年木簡 9 点をふくむ 125 点の木簡、平城宮土器 I・II の土師器・須恵器とともに、木器が出土した(fig. 141)。

〔木器番号〕 6707, 6921

〔文 献〕 同 上

52 東院西辺地区の溝SD9648 (6ALR-Q区 128次調査)

溝 SD8600 に東方から合流する東西溝。幅 1.4 m, 深さ 0.5 m で、両岸をシガラミで護岸する。調査区内で約 18 m を検出したが、東は削平されてのこっていない。木簡 2 点、曲物・人形・部材などの木器が出土した(fig. 141)。

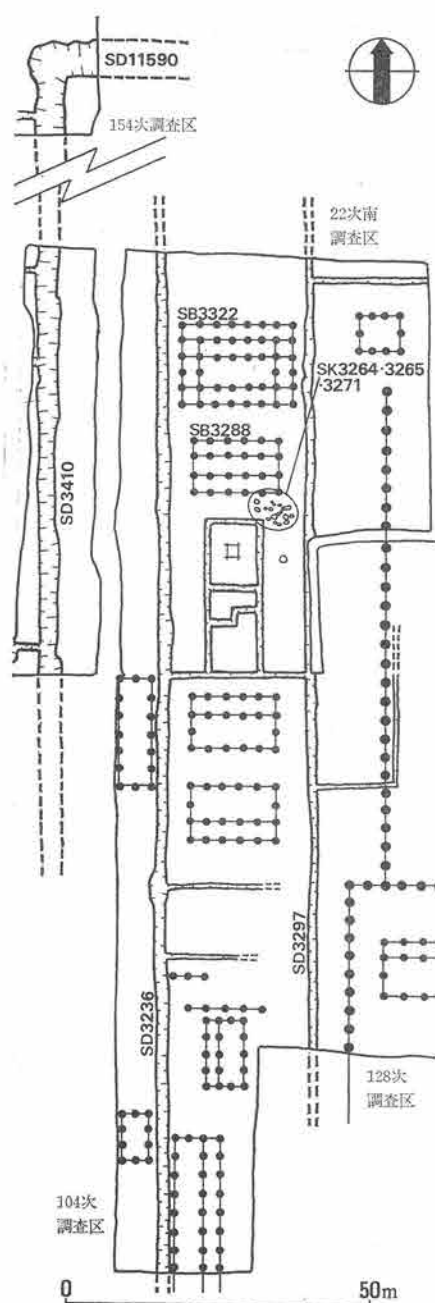


fig. 142 平城宮跡東院西辺地区遺構略図(2)

〔木器番号〕 7111

〔文 献〕 前掲『奈文研年報1981』p. 17~19

53 東院西辺地区の溝SD9649 (6ALR-Q区 128次調査)

東院地区の西限を画する南北築地SA5760の東雨落溝SD3109に東から合流する東西溝。幅1.3m、深さ0.2mで、削平されて両岸の護岸施設を失なうが、底に20~30cm大の玉石を敷く。檜皮と粘土とで埋立てている。刀柄・曲物・人形などの木器が出土した(fig. 143)。

〔木器番号〕 0227

〔文 献〕 同 上

54 東方大溝 SD3410 (6AAF-A・B, 6AAE-C, 6AAG-M, 6AAH-C, 6AAI-C, 6AAD-C区 22次南・29次・32次補足・154次調査)

第2次朝堂院の東方約150mにある南北溝。東院地区のほぼ中央を西流する東西溝SD11590を受けて南に折れ、第2次大極殿院および第2次朝堂院の東方官衙地区の東限を画して南下、曲折部の東面大垣の西側を南流して、宮域の南限で二条大路北側溝SD1250に合流する。全長約650mである。幅3~4m、深さ0.5~1.5mで、SD1250との合流点付近では幅5.5mにひろがる。当初は素掘りであったが、第22次南・154次調査区では、後に西岸を玉石積や杭列で護岸。溝の堆積土は2~3層にわかれ、多量の木簡・瓦・土器・木器が出土。8世紀(fig. 141~144)。

〔木器番号〕 0202, 0222, 1923, 2217, 2407, 2438, 3010, 4011, 4021, 4030, 4502, 5402, 5403, 5739, 6605, 6912, 7231

〔文 献〕 前掲『奈文研年報 1965』p. 38~40

前掲『奈文研年報 1967』p. 36・37

前掲『昭和58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』p. 27~33

55 宮域東南隅の溝SD4100A (6AAI-C区 32次補足調査)

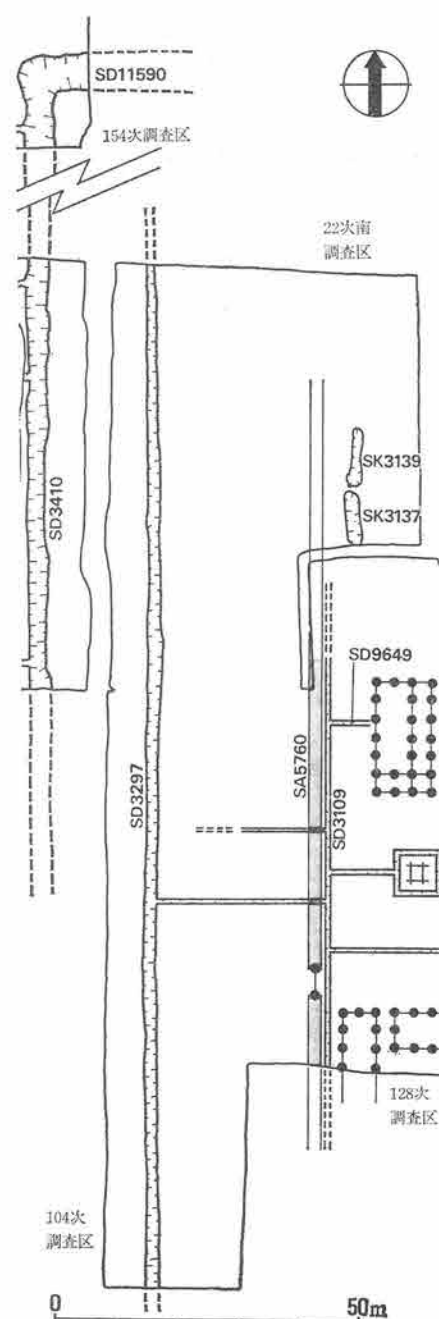
二条大路に面する宮域東南隅において、南面大垣SA1200の内側に接して西から東へ流れる溝。SA1200の北雨落溝あるいは南面大垣の内側を東西に走る宮内道路SF1761の南側溝。幅約3m、深さ0.4~0.9mの素掘り溝で、長さ約50mを検出し、さらに西へのびている。東端は南北溝SD3410に合流する。堆積土から、神亀5年(728)~宝亀元年(770)の紀年木簡をふくむ13,140点の木簡、土器・瓦・金属器・木器が出土した(fig. 144)。

〔木器番号〕 0206, 0308, 1913, 4503, 4504, 4507, 5601, 5602, 5801

〔文 献〕 前掲『奈文研年報 1967』p. 36・37

56 東南入隅東面外濠SD4951 (6AAI-M・N・O, 6ALS-J, 6AFJ-V・H区 32・39・118-8次調査)

東一坊大路の西側溝で、宮域の東面外濠をかねる。第32次調査区では宮東南隅の二条大路との交叉点、第39次調査区では小子門の南で宮域内の排水を受ける部分、第118-8次調査区では、左京三条一坊十五坪の西端部分を検出した。幅3.5~10m、深さ1.2m前後の素掘り溝で、二条大路との交叉点には、橋SX4020がある。690点の木簡、瓦・土器、金属器・石製品・木器が出土した。第118-8次調査の土器は、平城宮土器Vを主体とする。8世紀後葉(fig. 144)。



ig. 143 平城宮跡東院西辺地区遺構略図(3)

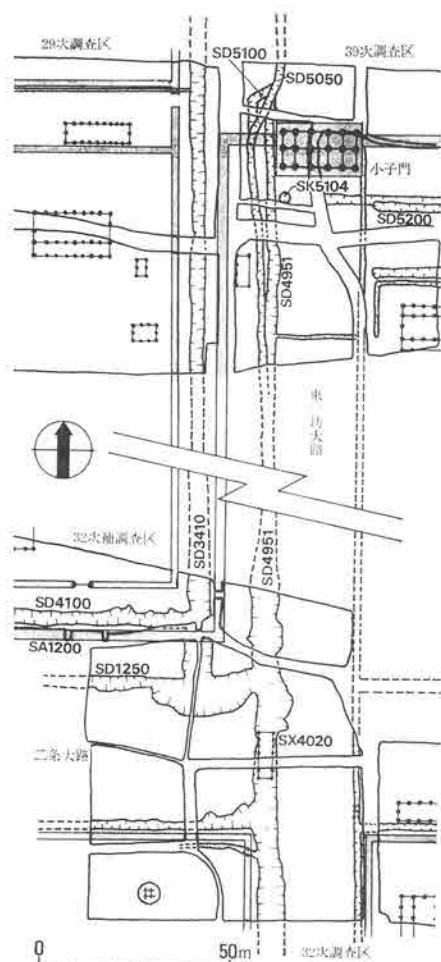


fig. 144 平城宮跡東入隅部遺構略図

〔木器番号〕 0102, 0209, 1009, 1018, 1902, 1910, 1937, 2218, 3108, 4022, 4203, 4219, 4904, 4925, 5716, 5723, 6007, 6017, 6608, 6610, 6819, 6910, 7232

〔文 献〕 平城宮跡発掘調査部「昭和40年度平城宮跡調査概報」『奈良国立文化財研究所年報 1966』(1966年) p. 36~39

前掲『奈文研年報 1967』p. 42~45

平城宮跡発掘調査部「平城宮跡と平城宮跡の調査」『奈良国立文化財研究所年報 1980』(1980年) p. 33・34

57 東南入隅の東面外濠迂回路SD5050・SD5100 (6ALS-J区 39次調査)

SD5100は、東一坊大路の西側溝SD4951を、小子門SB5000の造営にともなって、西へ一部迂回させた溝。両岸を杭と側板とで護岸しており、両側板間の幅1.5m、深さ0.8mをはかる。SD5100の設置にともなって廃絶した旧流路(SD4951の一部)から、養老3年(719)~神亀2年(725)の紀年木簡、SD5100の堆積土から、神亀5年(728)~神護景雲年間の紀年木簡が出土しており、開鑿の時期は神亀年間のことと推定される。SD5100は小子門の西北で東へ急角度で屈曲するが、後になって屈曲が穏やかなSD5050に改修される。SD5050も両岸を杭と側板とで護岸しており、底に径20~30cmの玉石を敷き、両側板間の幅1.2m、深さ0.2m。SD5100からは、55点の木簡とともに人形・杓子・部材・琴柱・鎌柄・火鑽板などの木器、SD5050からは、31点の木簡とともに人形・二官八省名を習書した檜扇などが出土した(fig. 144)。

〔木器番号〕 SD5050; 4906 SD5100; 5706, 6401

〔文 献〕 前掲『奈文研年報 1967』p. 42~45

58 宮域東南入隅の土壙SK5104 (6ALS-J区 39次調査)

小子門SB5000の西南、東一坊大路西側溝SD4951の東にある南北に長い楕円形土壙。長径2.5m、短径2.3m、深さ0.7mで、檜皮・釘のはつり屑、作門所に関する木簡をふくむ5点の木簡、建築部材の残欠、斎串などが出土。SB5000造営時の塵芥処理用の土壙(fig. 144)。

〔木器番号〕 4610

〔文 献〕 同上

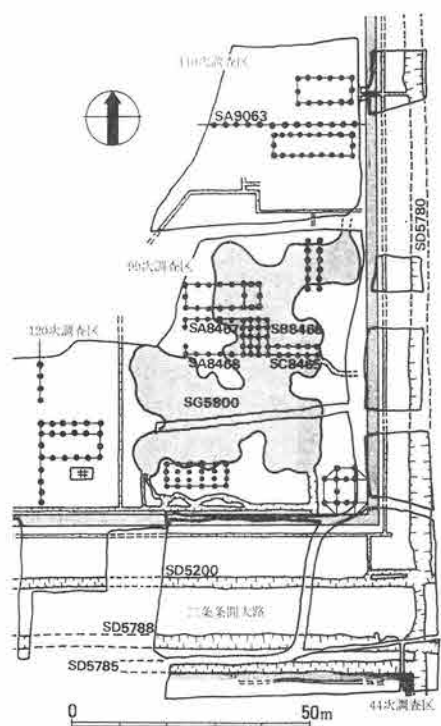


fig. 145 平城宮跡東院東南隅遺構略図

59 東院の園池SG5800B (6ALF-J・K・L・P区 44・99・120次調査)

東院の東南隅にある園池。南北約60m、東西約60mで、鉤の手状に複雑に屈曲した汀線をもつ。上下2層にわかれ、下層園池SG5800Aは汀線に沿って幅2~6mにわたり、径30cm前後の扁平な安山岩を敷き詰め、水深は50cm内外。上層園池SG5800Bは東北隅を東へ拡張し、池底の全面に玉石を敷き、中島・景石・橋・釣殿風建物などを設け、水深は30cm内外。下層園池の造成は8世紀前葉、上層園池への改作は天平勝宝年間、園池廃絶は9世紀前半と推定される。木器は上層のSG5800Bから出土(fig. 145)。

〔木器番号〕 1108, 1912, 2703, 4018, 4020, 4214, 5816, 6304, 6807, 6809, 6812, 7009, 7016, 7226, 7238

〔文 献〕 「調査研究概況」『奈良国立文化財研究所年報 1968』(1968年) p. 38・39

前掲『奈文研年報 1977』p. 24~28

前掲『奈文研年報 1980』p. 27～30

60 東院園池の棧敷様施設SB8466 (6ALF-J・K区 99次調査)

上層園池 SG5800B の西岸で、池中にのびる棧敷様施設。4間×3間の総柱の掘立柱南北棟で、岸辺の柱囲い SA8467・SA8468・SA8469 の東延長に建つ。桁行は、端間 1.5m、中央2間が 3mだが、東側柱の南端間は 2.4m と広く、園池東岸へ通ずる渡廊 SC8465 と柱を共用する。梁間は西1間が 1.5m、他は 2.4mである。柱掘形には鬼瓦・凝灰岩切石を敷く。ただし、西側柱の南北両端から各2個目の柱は礎石立。柱掘形から斎串・くさび・栓などの木器が出土した。収録した黒漆塗薄板は南西隅の柱穴から出土(fig. 145)。

〔木器番号〕 6801, 6802

〔文献〕 前掲『奈文研年報 1977』p. 24～28

61 東院の木堀SA9063 (6ALF-I区 110次調査)

園池SG5800の北方にある掘立柱東西堀。南面大垣の心から北 100.5mの位置にある。10尺等間で12間分を検出し、さらに西へのびている。東は東面大垣近くまで検出したが、大垣へのとりつき状況は不明。柱掘形の埋土から、杓子・折敷・箸などの木器が出土した(fig. 145)。

〔木器番号〕 4226

〔文献〕 平城宮跡発掘調査部「平城宮跡と平城宮跡の調査」『奈良国立文化財研究所年報 1979』(1979年) p. 21～23

62 東面外濠SD5780 (6ALF-D・E・F・H, 6ALG-A・B, 6ALH, 6AFI-R区 44・68・99・118-23・123-26次調査)

東二坊坊間大路の西側溝で、第44・99次調査区では、東院地区東面外濠をかねている。第68・123-26・118-23次調査区では、左京二条二坊六坪・五坪、左京三条二坊七坪における南延長を確認。溝の規模は場所によって差がある。第44次調査区の二条条間大路の北では幅 4～6m、深さ 0.5mの素掘り溝、二条条間大路を横断する部分では、古くは幅 4mの素掘り溝だが、後に杭と側板とで護岸して、幅 1.2mに縮小する。第68次調査区では幅 3m、第123-26・118-23次調査区では幅 2.5m、深さ 1m弱、第123-26次調査区では、西岸をシガラミで護岸する。第44・99次調査区では天平15年(743)～20年の紀年木簡をふくむ600点以上の木簡と土器・瓦、第68次調査区では宝亀2年(771)の紀年木簡をふくむ79点の木簡や三彩瓦・土器、第123-26次調査区では神亀4年(727)の紀年木簡をふくむ18点の木簡、平城宮土器Ⅲを主体とする土師器・須恵器、緑釉平瓦・帯金具、第118-23次調査区では木簡18点、平城宮土器Ⅰ～Ⅱを主体とする土師器・須恵器などが木器と共伴した(fig. 145)。

〔木器番号〕 0328, 0335, 1903, 4019, 5730, 6903

〔文献〕 前掲『奈文研年報 1968』p. 38・39

前掲『奈文研年報 1971』p. 27

前掲『奈文研年報 1977』p. 24～28

奈良国立文化財研究所「左京三条二坊七坪の調査(第118-23次)」『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(1980年) p. 29

前掲『奈文研年報 1981』p. 27

第三章 遺跡解説

63 東院南面外濠SD5200 (6ALS-D・G, 6ALF-F・M・Q区 39・44・120次調査)

二条条間大路の北側溝で、東院地区の南面外濠をかねる。新旧の2時期があり、古い時期の溝は、幅2.4m、深さ0.5mの素掘り溝で、東一坊大路を横切って、SD4951に接続する(第39次調査区)。新しい時期の溝は、古い時期の溝よりも南へ約3mずれた位置にあり、東一坊大路の東端から始まり(第39次調査区)、東二坊坊間大路の西側溝SD5780に合流する(第44次調査区)までの全長約230mを確認。径20~30cmの玉石で両岸を護岸し、幅2~3m、深さ0.6m。新旧両溝あわせて木簡約200点と木器が出土(fig. 145)。

〔木器番号〕2514, 6902

〔文献〕前掲『奈文研年報 1967』p. 42~45

前掲『奈文研年報 1968』p. 38・39

前掲『奈文研年報 1980』p. 27~30

64 南面外濠SD1250 (6AAI-N, 6AAY-C・F, 6ABZ-E, 6ACU-E・H, 6ABY-L区 32・122・130・133・143次調査)

二条大路の北側溝で、平城宮の南面外濠をかねる。第32次調査区では、東一坊大路西側溝SD4951および東方大溝SD3410との合流点、第122次調査区では南面東門(壬生門)前、第130・143次調査区では朱雀大路東側溝SD9920および同西側溝SD10950との合流点、第133次調査区では南面西門(若犬養門)前において確認した。このほか、第14次調査区(6ADH区)でも、その北肩を検出。幅3.0~4.2m、深さ0.6~1.2mの素掘り溝であるが、宮域内からの排水路(SD3410, SD10250)を受ける部分では、幅が著しく拡大し、杭で護岸する。また、壬生門前では、東西約32mにわたって、両岸に人頭大の石を積んで護岸する。大量の木簡・土器・瓦・金属器・木器が出土し、とくに壬生門前では、霊亀4年(718)~天平6年(734)の紀年木簡とともに、200点以上の人形をふくむ形代類が出土した(fig. 137・144・146)。

〔木器番号〕0204, 1938, 2106, 4104, 4406, 4613, 4821, 4910, 4911, 5304, 5413, 5504, 5505, 5506, 5514, 5605, 5607, 5613, 5809, 5911, 6005, 6204, 7234

〔文献〕前掲『奈文研年報 1967』p. 42~45

前掲『奈文研年報 1981』p. 14~16

前掲『奈文研年報 1982』p. 9・10

前掲『奈文研年報 1983』p. 2・3

65 平城宮内で出土遺構未確認の木器

6AAI区; 0120 6AAC区; 1904, 7125 6AAG区; 3109, 3706, 6602,
6ADI区; 3202 6AAB区; 3209 6ALS区; 6517

M 平城京跡 へいじょうきょう

平城京を構成する条坊の発掘調査は近年著しく進展し、奈良市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所、奈良国立文化財研究所が発掘の任にあたっている。以下の遺構解説でとくに調査機関を明記していないのは、奈良国立文化財研究所が調査したもの。木器は大路の側溝あるいは条坊内の溝・井戸などで発見される場合が多く、出土状況は宮域内と大差ないが、木器の種

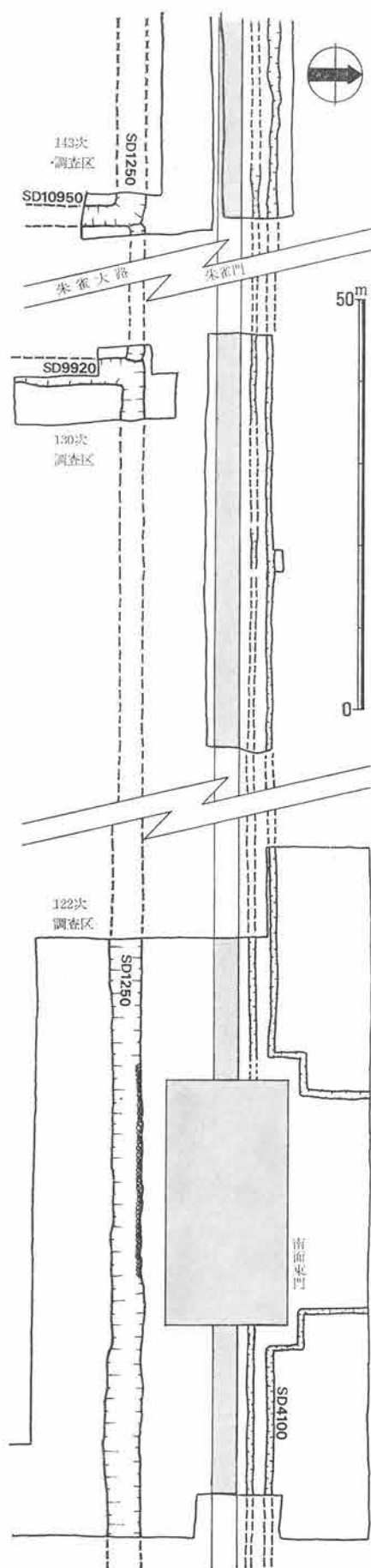


fig. 146 平城宮跡南限遺構略図

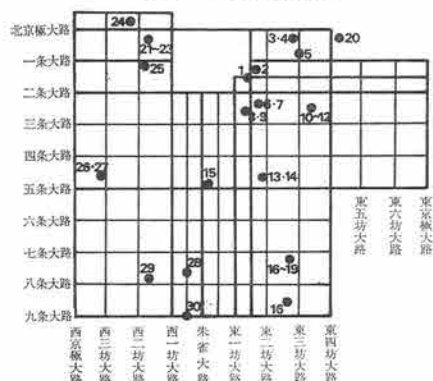


fig. 147 平城京条坊概念図

類や組成・質・量の比較は今後の課題である。低地の左京のほうが出土量が多い(fig. 147)。

1 左京二条条間大路の南側溝SD5785・SD5788(6ALG-A・C, 6ALF-Q区 44・120次調査)

平城宮東院の南側にあたる二条条間大路南側溝。SD5785は平城京造営当初の溝。のちに北へ移動し、3回にわたって改作する(SD5788・SD5787・SD5786)。SD5785は幅2.5m、深さ0.3~0.6mの素掘り溝。SD5788は幅3m以上、深さ0.5mの素掘り溝で、玉石で護岸したSD5787が南岸を破壊している。SD5785からは和銅7年(714)の紀年木簡と木器が出土(fig. 145)。

〔木器番号〕SD5785; 0302, 1931, 4509, 7124, 7229

SD5788; 1905, 4404

〔文献〕前掲『奈文研年報 1968』p. 38・39

前掲『奈文研年報 1980』p. 27~30

2 法華寺南限の溝SD03 (6BFK-D区 123-4次調査)

平城宮東院の東は、本来、藤原不比等の邸宅で、のちに光明皇后の皇后宮となり、天平17年(745)に宮寺に改められた。これが法華寺のはじまりで、その西南方に天平宝字3年(759)、光明皇太后の発願によって着工した阿弥陀浄土院がある。

SD03は法華寺旧境内の西南隅で検出した東西溝で、北側の掘立柱東西塀とともに、法華寺と阿弥陀浄土院との境界を画する。幅2.7m、深さ0.5mの素掘り溝で、43点の木簡・瓦・土器とともに、「廣石」の墨書のある曲物・杓子・鳥形・楔・建築部材などが出土(fig. 148)。

〔木器番号〕6021

〔文献〕奈良国立文化財研究所「法華寺西南隅の調査(第123-4次)」『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(1981年) p. 44~45

3 左京一条三坊十五・十六坪の溝SD485 (6AFB-I・H区 55・56次調査)

左京一条三坊十五・十六坪で2坪の敷地をもつ邸宅跡を発掘した。数棟の掘立柱建物があり、その間をSD485が東西方向から南へと曲尺状に流れる。溝幅は2m内外で、部分的に分流・氾濫し、一部を杭で護岸する。和銅6年(713)・霊龜3年(717)・養老7年(723)の紀年木簡をふくむ33点の木簡、平城宮土器Ⅱの土師器・須恵器・施釉陶器や116点の墨書土器・土馬とともに木器が出土した(fig. 149・150)。

〔木器番号〕0304, 0327, 0719, 1302, 3103, 3308, 4012, 4227, 4506, 4920, 5404, 5742, 5917, 5918, 6709, 6720, 7014, 7114, 7121

〔文献〕黒崎直「木製品」『平城宮発掘調査報告Ⅵ』奈良国立文化財研究所学報第23冊(1975年) p. 78~82

4 左京一条三坊十五坪の井戸SE495 (6AFB-H区 56次調査)

方形縦板組の井戸。一辺1.8m、深さ3.5mの方形掘形内の各辺に、幅20cm内外の板6枚を縦に並べ、方6cmの角材で内側に横棧を組んで固定する。整地土との関係などから、8世紀前葉の年代があたえられる。埋土から斎串・曲物などの木器が出土した(fig. 150)。

〔木器番号〕3214

〔文献〕同上

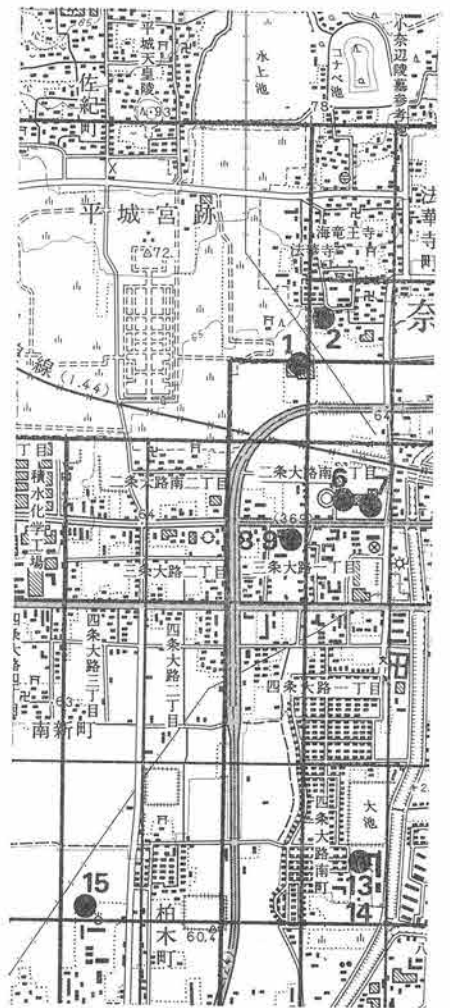


fig. 148 平城京跡木器出土地点(1)
(1:25000 奈良)

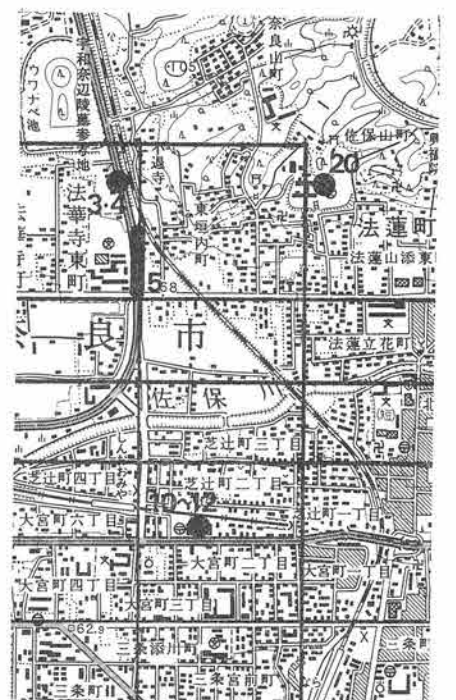


fig. 149 平城京跡木器出土地点(2)
(1:25000 奈良)

5 左京一条三坊東一坊大路の東側溝SD650 (6AFB-A~E区 57次調査)

東三坊大路の東側溝。一条大路の北約 240 m の間を検出した。溝は新旧 2 時期にわかれる。

下層の溝 SD650A は幅 2.5m 前後、深さ 1.1m 内外の素掘り溝、上層の溝 SD650B は幅 2m 前後、深さ 0.5~0.9m で、部分的に杭や石で護岸する。発掘南限の一条大路付近で大きく氾濫している。遺物の多くは SD650A にぞくし、天長 5 年(828)の告知札をふくむ 33 点の木簡、和同開珎から貞観永寶に至るまでの 9 種の銭貨、土師器・須恵器・施釉陶器・黒色土器・瓦などとともに木器が出土した(fig. 149・150)。

[木器番号] 0107, 0111, 0221, 0226, 0231, 0704, 0711, 0716, 0913, 1007, 1102, 1203, 1204, 1205, 1207, 1308, 1926, 2203, 2207, 2213, 2214, 2215, 2216, 2301, 2302, 2303, 2401, 2402, 2403, 2404, 2409, 2410, 2419, 2423, 2440, 2442, 2443, 2444, 2447, 2501, 2605, 2701, 2704, 2708, 3006, 3111, 3115, 3201, 3210, 3307, 3310, 3703, 3704, 3709, 3808, 3903, 3906, 3910, 4007, 4009, 4014, 4230, 4310, 4321, 4409, 4510, 4517, 4733, 4908, 5209, 5415, 5416, 5606, 5608, 5612, 5620, 5701, 5707, 5709, 5743, 5802, 5806, 6020, 6109, 6202, 6203, 6205, 6403, 6414, 6507, 6509, 6513, 6604, 6621, 6622, 6623, 6625, 6706, 6708, 6710, 6813, 6820, 6829, 6830, 6904, 6907, 7008, 7101, 7110, 7120, 7218, 7227

〔文 献〕 小野昭「漆器」・黒崎直「木製品」『平城宮発掘調査報告VI』p. 75~78, 83~97

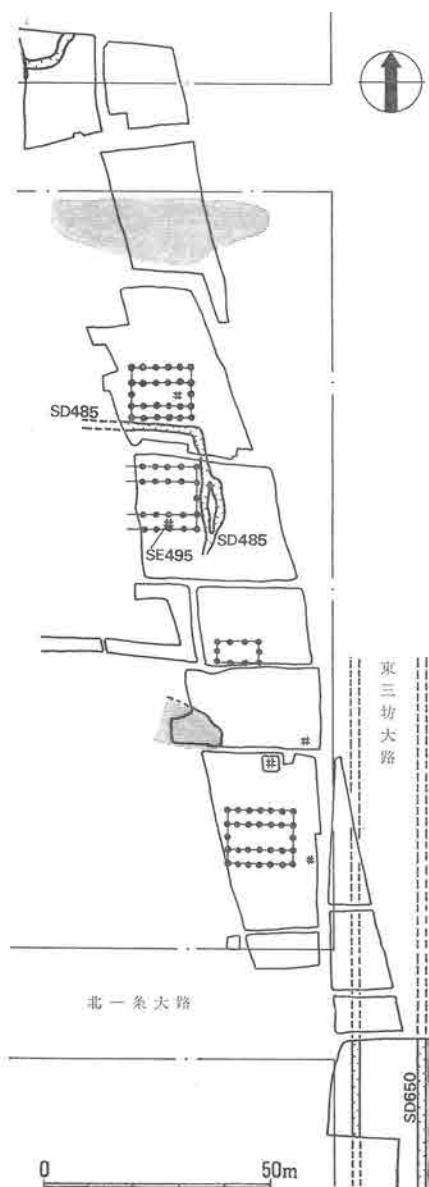


fig. 150 平城京左京一条三坊十五・十六坪遺構略図

6 左京三条二坊十坪の井戸SE877(6AFI-H区 83次調査)

左京三条二坊十坪の邸宅の東辺にある方形横板組の井戸。一辺 2.3 m の方形掘形内に、長さ 1.1 m、幅 20~25 cm、厚さ 8 cm 前後の長方形の板を井籠組にし、井戸底には玉砂利を 25 cm ほどの厚さに敷く。井戸枠は 12 段がのこり、枠板外面に墨書の番付がある。底の玉砂利のなかから平城宮土器Ⅱの土師器・須恵器小片、井戸埋土から平城宮土器Ⅴの土師器・須恵器とともに、斎串・曲物・木槌・櫛などの木器が出土した(fig. 148・151)。

〔木器番号〕 0106, 3503, 4623

〔文 献〕 山本忠尚「木製品」『平城京左京三条二坊』奈良国立文化財研究所学報第25冊
(1975年) p. 29~31

7 左京三条二坊十五坪の井戸SE967 (6AFI-H区 86次調査)

左京三条二坊十五坪は 1 坪敷の邸宅で、SE967 はその中心部にある方形横板組の井戸。一辺 3.6 m の方形掘形内に、長さ 1.5 m、幅 27 cm、厚さ 5 cm の長方形の板を井籠組にし、さらに鉄釘で固定する。井戸枠は 3 段をのこし、底に砂利を 2～5 cm の厚さに敷く。埋土から平城宮土器Ⅴの土師器・須恵器・施釉陶器・瓦とともに、木簡 1 点、斎串・剝物・挽物盤・曲物・陽物形などの木器が出土した(fig. 148・151)。

〔木器番号〕 2507, 2903, 3406, 4707, 4802, 6107

〔文 献〕同 上

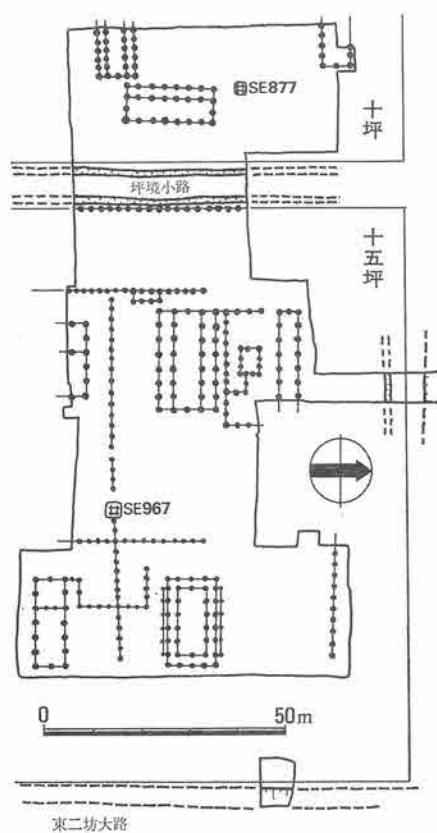


fig. 151 平城京左京三条二坊十・十五坪遺
構略図

8 左京三条二坊六坪の導水路SD1525 (6AFI-Q区 96・109・121次調査)

左京三条二坊六坪は1坪敷の邸宅で中央に園池SG1504を設け、西方に建物群を配する。SD1525は北東部の河川から園池に給水する導水路。幅2.5~7.0m、深さ0.4~0.7mの素掘り溝で、園池と同様、六坪の東北から坪の中心部を南流していた旧河川SD1560を再利用する。園池の北でいったん水をため、木樋SX1523をへて園地に導水する。堆積土の下層から、和銅の年紀木簡をふくむ100点余りの木簡、8世紀前半の土師器・須恵器、木器が出土(fig. 148・152)。

〔木器番号〕0331, 1003, 2437, 5502, 6407, 6702, 6826, 7236

〔文献〕奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』(1976年) p. 17・18

奈良市教育委員会『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』(1980年) p. 9

9 左京三条二坊六坪の旧河川SD1560 (6AFI-P・Q区 109・121次調査)

左京三条二坊六坪内で、平城京造営以前に存在した河川。六坪の東北から坪の中心部を南流し、幅は約12m(fig. 152)。

〔木器番号〕0715

〔文献〕同上

10 左京三条四坊七坪の土壙SK1796 (6AFG-N区 116次調査)

左京三条四坊七坪の西南部分約4分の1を調査し、和同開珎の鑄銭官衙跡を確認した。SK1796は南半部にある円形土壙で、鑄銭工場の廃止後に1坪敷の邸宅として利用した時期のもの。径約4m、深さ0.9m。井戸の可能性もある。「造仏」「左」「別女」などの墨書土器をふくむ平城宮土器Ⅳの土師器・須恵器、装飾棒・刀子柄・斎串などの木器が出土(fig. 149・153)。

〔木器番号〕3509, 4520, 6721

〔文献〕奈良国立文化財研究所『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』p. 22・23

11 左京三条四坊七坪の井戸SE1801 (6AFG-N区 116次調査)

左京三条四坊七坪の南半部にある方形横板組の井戸。鑄銭工場が廃止した後の邸宅にぞくする。1間四方(東西3.3m、南北3.0m)の覆屋SB1800内にある。井戸掘形は2段をなし、上段掘形は東西3.9m、南北3.2m、深さ0.6m、下段掘形は上段掘形の東寄りに、一辺2.2m、深さ0.5mの正方形に掘込んでいる。下段掘形の中央に、長さ1.7m、幅30cm前後の長方形のヒノキ板材を井籠組にする。井戸枠は4段をのこし、内法は東西1.60m、南北1.63m。平城宮土器Ⅴの土師器・須恵器とともに、櫛・斎串などの木器が出土した(fig. 153)。

〔木器番号〕1807, 4708

〔文献〕同上

12 左京三条四坊七坪の土壙SX15 (6AFG-O区 116次調査)

左京三条四坊七坪の中央部にある和同開珎の鑄銭工場に関連する焼土土壙31基のひとつ。南北1.8m、東西0.9m、深さ40cmの長方形で、底は2段に掘込んでいる。焼土・木炭とともに、炉壁の残片・和同銭範・銅滓・るつぼ・ふいごの羽口、平城宮土器Ⅲの土師器・須恵器、曲物・斎串などの木器が出土した(fig. 153)。

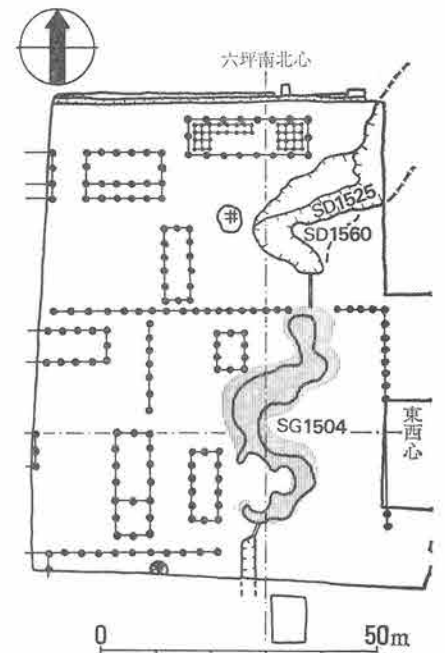


fig. 152 平城京跡左京三条二坊六坪遺構略図

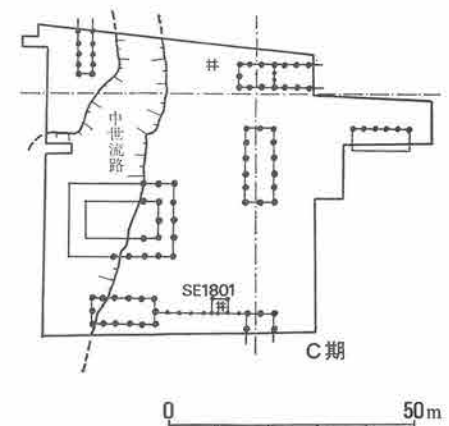
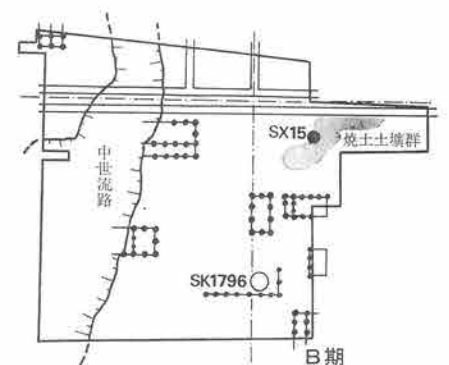
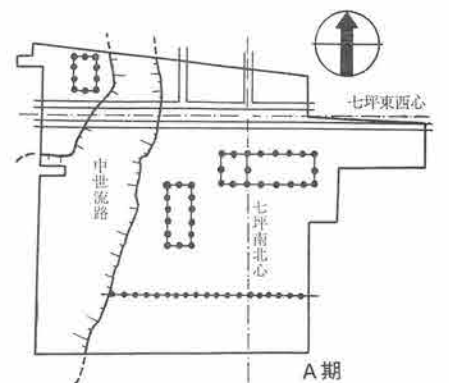
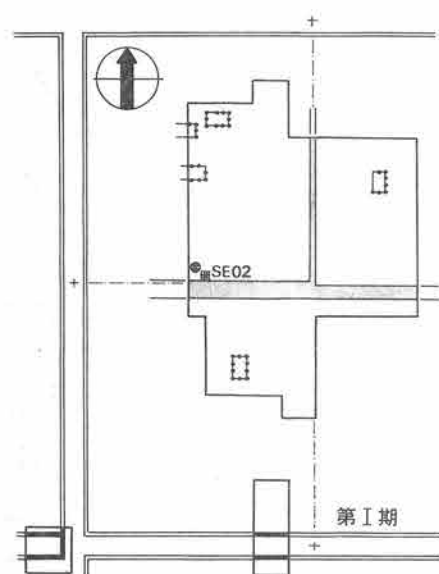


fig. 153 平城京左京三条四坊七坪遺構変遷図

〔木器番号〕 4728

〔文 献〕 同 上

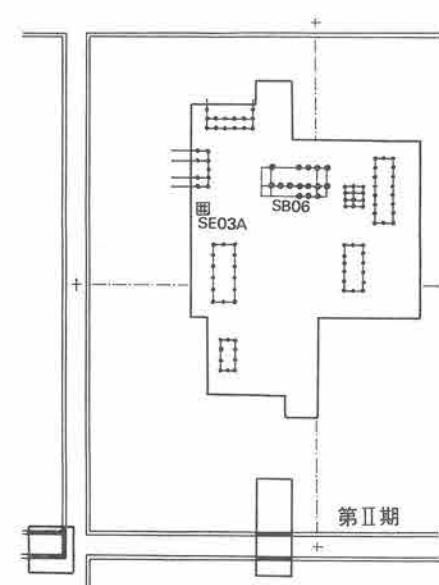


13 左京五条二坊十四坪の井戸SE02 (6AFQ-F区 奈良市調査)

左京五条二坊十四坪は8世紀中葉には1坪敷で内裏に似た建物配置の邸宅を形成するが、当初は4分の1坪に区画していた。SE02は当初の遺構で、十四坪西北部の住宅にともなう井戸。1辺1.8m、深さ0.95mの方形掘形の底に、長径(南北)69cm、短径(東西)37cmの曲物をすえる。埋土から平城宮土器Ⅲの土師器・須恵器が出土した(fig. 148・154)。

〔木器番号〕 3601

〔文 献〕 金子裕之「平城京左京五条二坊二十四坪発掘調査概要報告・木製品」『奈良市埋蔵文化財調査報告書(昭和54年度)』(1980年) p. 32~38

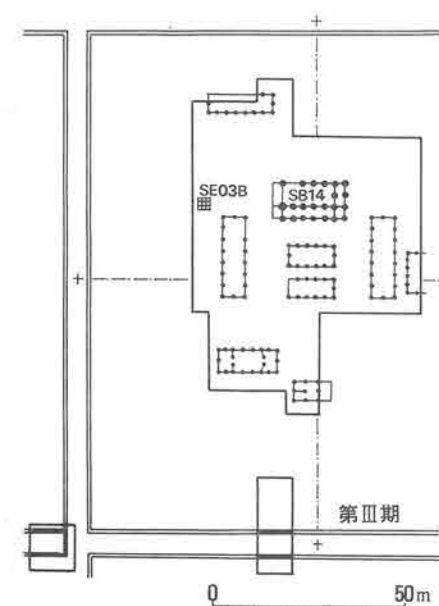


14 左京五条二坊十四坪の井戸SE03 (6AFQ-F区 奈良市調査)

左京五条二坊十四坪を1坪敷として利用した時期、正殿SB06・SB14の西に付設した井戸。当初の井戸SE03Aは、一辺3.3m、深さ1.3mの方形掘形内に、長さ137cm、幅25cm内外の長方形の板を井籠組にする。井戸枠は4段をのこし、内法は方1.3m。SE03Aの内側に、後になって方形縦板組の井戸SE03Bをつくる。SE03Bの構築に際しては、SE03Aの内面に沿って、垂直に1.3mほど掘下げ、四隅に長さ1.7m、10cm角の柱を立て、上中下3段に横棧を渡し、その外側に幅15~27cmの板を各辺6枚前後並べる。内法は方1m前後。井戸のなかからは、平城宮土器Ⅵを主体とする土師器・須恵器・施釉陶器、るつぼ・瓦・碁石・ガラス玉、漆器とともに、斎串・独楽・刀子鞘・櫛・檜扇・曲物・釣瓶などの木器が出土した(fig. 154)。

〔木器番号〕 1701, 4521, 4804, 6408

〔文 献〕 同 上



15 左京五条一坊四坪の井戸SE1081 (6AFR-L区 90次調査)

左京五条一坊四坪で四分劃の宅地割りを行い、主屋と付属屋からなる遺構を検出した。SE1081は主屋にともなう円形縦板組の井戸。掘形は平面楕円形で、上下2段に掘込む。上段掘形は東西1.8m、南北1.5m、深さ0.9m、下段掘形は東西1.0m、南北0.8m、深さ1.1mで、底に径48cm内外の曲物側板を3段に積み、外側に接して幅20cm内外、長さ1.5m以上の板21枚を2重に立て並べる。なかから少量の瓦や土器片が出土した。8世紀中葉のもの(fig. 148)。

〔木器番号〕 3413

〔文 献〕 前掲『奈文研年報1975』p. 22・23

16 東堀河SD1300 (6ATI-I・J, 6AHN区 93・141-23次調査)

平城京の東堀河。東市北辺の左京八条三坊九坪(第93次調査区)、および左京九条三坊十坪の九条条間路との交叉点(第141-23次調査区)の2個所で確認。第93次調査区では、当初、幅約10m、深さ1.4mの素掘りの溝であったが、後に8mにせばめてシガラミで護岸する。第141-23次調査区では、幅約11m、深さ1.3mの素掘り溝で、改修の痕跡はなく、九条条間路との交叉点に橋SX2350を架ける。堆積土から、8世紀後半~9世紀前葉の土師器・須恵器、人面墨書土器、土馬、金属製品などとともに、木器が出土した(fig. 155・156)。

fig. 154 平城京左京五条二坊十四坪遺構変遷図

〔木器番号〕 0805, 1901, 2406, 2436, 2449, 2505, 2506, 2906, 4015, 5002, 5003, 5106, 5401, 5609, 6817

〔文 献〕 奈良県『平城京左京八条三坊発掘調査概報』(1976年) p. 40・41
奈良国立文化財研究所『平城京東堀川』(1983年) p. 22~24

17 左京八条三坊十坪の小路側溝SD1155 (6ATI-H区 93次調査)

左京八条三坊で宅地ならびに小路の発掘調査を行い、庶民住宅の宅地割りが具体的に判明した。SD1155は九・十坪の坪境小路 SF1160 の南側溝。幅3.4~3.8m, 深さ1.2mの素掘り溝で、西流して東堀河 SD1300 に合流。十坪の東半部を東西2等分する位置に、小橋 SX1157 がある。東端で南北の坪境小路 SF1331 を横断する部分は、杭と板とで暗渠 SX1165 にする。堆積土から25点の木簡、8世紀中葉を主とする土師器・須恵器・施釉陶器・古越磁とともに木器が出土した。漆器工房に関連する遺物の多い点が注目される(fig. 155・156)。

〔木器番号〕 0303, 0309, 0310, 0311, 0312, 0313, 1107, 1307, 1906, 2311, 2512, 3215, 3505, 3920, 4204, 4625, 4916, 5604, 6012, 6828, 7004, 7005

〔文 献〕 前掲『平城京左京八条三坊発掘調査概報』p. 40・41

18 左京八条三坊九坪の井戸SE1230 (6ATI-I区 93次調査)

左京八条三坊九坪は、当初は8分の1町の宅地割り、のちに北部の1画を16分の1町に細分する。SE1230は北部の南東にあって、当初および細分後もひきつづいて使われる方形縦板組の井戸。掘形は上下2段をなし、上段掘形は東西2.3m, 南北2.8m, 深さ0.6m, 下段掘形は上段掘形の北寄りに、東西1.4m, 南北1.7m, 深さ1.0mの長方形に掘込む。下段掘形の底に10cm角の木材を方形に組んで土台とし、四隅に丸柱を立て、上中下3段に横棧を渡し、外側に幅5~20cmの板を羽重ねにして井戸枠とする。内法は方0.9m。底から、須恵器・土師器とともに、黒漆塗の薬壺・曲物などが出土した。8世紀後半(fig. 156)。

〔木器番号〕 2434

〔文 献〕 同 上

19 左京八条三坊十坪の井戸SE1350 (6ATI-G区 94次調査)

左京八条三坊十坪の東辺中央部にある方形横板組の井戸。一辺90cm, 深さ3.5mで、長さ96cm, 幅20cm, 厚さ1.5cmの枠板が8段残存する。掘形底部の四隅に方形柱のあたり痕跡がある。埋土から奈良時代各期の土器が出土し、8世紀後葉まで存続したことがわかる(fig. 156)。

〔木器番号〕 4315

〔文 献〕 前掲『平城京左京八条三坊発掘調査概報』

20 左京二条五坊北郊遺跡

奈良市法蓮町の奈良高等学校敷において、1954年に掘立柱建物1棟と井戸1基を発見した。建物は2間×5間以上の規模で、南側に井戸がある。井戸は径約1.2mの円形縦板組で20枚の板を用い。底には青灰色砂層があり、上部に土師器・須恵器・瓦磚・土馬・斎串・木履が自然木とともに堆積していた。出土遺物から井戸が8世紀後半に廃絶したことがわかる(fig. 149)。



fig. 155 平城京跡木器出土地点(3)
(1:25000 大和郡山)

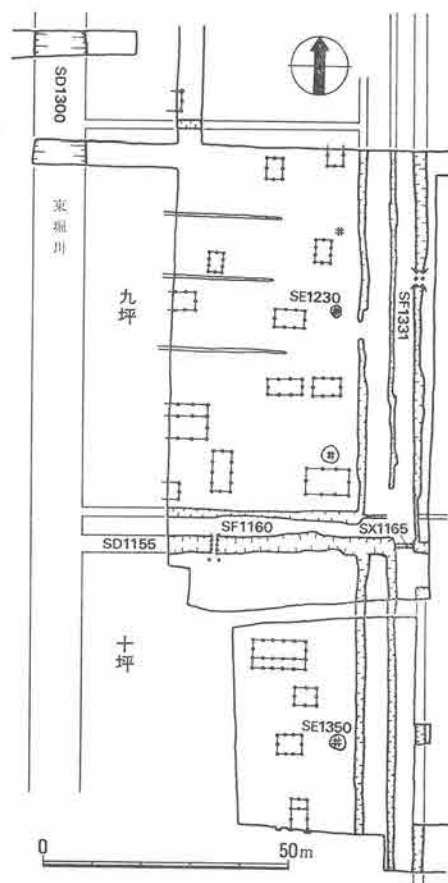


fig. 156 平城京左京八条三坊九・十坪遺構略図

〔木器番号〕 2001

〔文 献〕 田中一郎「奈良高等学校校庭発見の1号丸井戸調査概報」『文化史論叢』奈良国立文化財研究所（1955年）p. 139～154

岡幸二郎「木履考」『関西大学考古学研究年報Ⅱ』関西大学考古学研究会（1978年）p. 48～50



fig. 157 平城京跡木器出土地点(4)
(1:25000 奈良)

21 西隆寺跡の土壇状遺構SX033・SX035 (6BSR-東門地区 1次調査)

西隆寺は神護景雲年間(767～770年)、稱徳女帝が造営した官営の尼寺。寺地は平城京右京一条二坊九・十・十五・十六坪の4町を占め、南は一条条間大路、西は西二坊大路に面し、西に西大寺、東に平城宮が隣接する。1971年～1973年の6次にわたる発掘調査の結果、金堂・塔・東門および西隆寺造営以前の奈良時代の掘立柱建物・塀・井戸・園池や十・十五坪の坪境小路、古墳時代の遺構などを検出した。木器は、古墳時代の土壇(SX037)、西隆寺造営以前の奈良時代の井戸(SE080・SE130)、西隆寺関連遺構(SD005・SE010・SX033・SX035)から出土。

SX033・SX035は、西隆寺東門の北側から西へのびる寺内築地SA004と、東門の西方約10mの位置にある南北溝SD005とが交叉する付近(SX033)、およびその西北(SX035)にある。堆積土は木簡・檜皮・土器・瓦・木器などを多量にふくむ黒色土層。西隆寺造営に関する塵芥処理用の土壇の可能性はある。天平神護3年(767)～神護景雲4年(770)の紀年木簡をふくむ西隆寺造営関連の木簡とともに、杓子・糸巻・斎串・挽物盤・箸・部材などの木器が出土(fig. 157)。

〔木器番号〕 SX033; 0908 SX035; 2604, 7302 出土遺構未確認; 5741

〔文 献〕 黒崎直「木製品」『西隆寺発掘調査報告』西隆寺調査委員会（1976年）p. 62～66

22 西隆寺跡の土壇状遺構SX037 (6BSR-東門地区 1次調査)

西隆寺東門の西北方にある下層遺構。土器溜りとかんがえられるが、遺構の性格は明確ではない。古墳時代の須恵器・土師器とともに、糸巻・太刀把頭などが出土した(fig. 157)。

〔木器番号〕 0911

〔文 献〕 同 上

23 西隆寺跡の井戸SE130 (6BSR-金堂地区 3次調査)

西隆寺金堂基壇の西側にある方形横板組の井戸。東西 2.35 m、南北 1.8 m、深さ 2.0 m の方形掘形内のやや東寄りに、長さ 120～130 cm、幅 20～24 cm の長方形の板を井籠組にする。内法は一辺 0.8 m、井戸枠は6段をのこす。埋土から平城宮土器Ⅲを主体とする土師器・須恵器、斎串・部材などの木器が出土。西隆寺造営以前の住宅にともなう井戸である(fig. 157)。

〔木器番号〕 7116

〔文 献〕 同 上

24 右京北辺三坊一坪の井戸SE237 (6AGS-A区 112-4次調査)

北辺三坊一坪推定地の南寄りにある方形縦板組の井戸。一辺約 2.5 m の方形掘形内の四隅に径 10 cm の丸柱を立て、上下2段に横棧をわたして、下段横棧の外側に幅 25 cm、厚さ 5 cm、長さ 90～100 cm の横板をはめ込み、外側に幅 16～28 cm の板を各辺5枚ずつ立てる。内法は方約 1 m。堆積土から平安時代前期の土師器、曲物・斎串などの木器が出土した(fig. 157)。

〔木器番号〕 4813

〔文献〕 奈良国立文化財研究所「北辺三坊の調査（第112-4次）」『昭和53年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1979年）p. 28・29

25 右京二条二坊十六坪の井戸SE540（6AGC-S区 137次調査）

右京二条二坊十六坪内の中央やや西寄りにある方形縦板組の井戸。東西約2.5m、南北約3m、深さ2.2mの不整楕円形の掘形内のやや西寄りに、東西60cm、南北70cmの井戸枠を設ける。井戸枠は四隅に角柱を立て、上下2段に横棧をわたり、その外側に幅15cm内外の板を立てる。掘形の埋土から平城宮土器Ⅱの土器、井戸の堆積土から平城宮土器Ⅲの土師器・須恵器、るつぼ、鉄鎌、木製杓子などが出土した(fig. 157)。

〔木器番号〕 4206

〔文献〕 奈良国立文化財研究所『平城京右京二条二坊十六坪発掘調査概報』(1982年)p. 23

26 右京五条四坊三坪の埋納施設SX30（6AGQ区-Lトレンチ 100次調査）

右京五条四坊三坪に建つ掘立柱建物の入口で発見された胞衣の埋納施設。一辺0.4m、深さ0.5mの掘形内に、宝珠形つまみの蓋をもつ薬壺形の須恵器（高さ15.5cm、最大径15.5cm）を安置する。須恵器内に和同開珎4枚・唐墨・筆管・織物をいれる。『御産所日記』や『貞丈雑記』などに見られる胞衣埋納作法に合致する。須恵器は平城宮土器Ⅲに該当する(fig. 158)。

〔木器番号〕 4413

〔文献〕 奈良国立文化財研究所『平城京右京五条四坊三坪発掘調査概報』(1972年)
p. 12・13

27 右京五条四坊三坪の井戸SE20（6AGQ区-Lトレンチ 100次調査）

右京五条四坊三坪の中央やや西北寄りにある円形縦板組の井戸。掘形は2段をなし、上段掘形は長辺5.4m、短辺3.2mの不整矩形、下段掘形は一辺2.5mの隅丸方形で、深さは掘形上面から約5.1m。井戸枠は幅28cm、厚さ6cmの細長い板材14枚を縦に組み、各板を上中下3カ所の雇納で固定する。円形に組むために、枠材の両側辺を鋭角につくり、外面を中高に削って曲面に仕上げる。内法径は1.1m、井戸枠高は、内部に落込んだ上端部の板材6枚の枘穴の間隔から4.5mに復原できる。板材6枚のうちの2枚には、上端木口面に枘を作り出すので、円形井戸枠の上部に、方形の枠を組んで固定した可能性がある。埋土から平城宮土器Ⅲ～Ⅳの土師器・須恵器とともに、刀子柄・曲物などが出土(fig. 158)。

〔木器番号〕 0210, 3206, 3302, 3506

〔文献〕 同上 p. 15

28 右京八条一坊十一坪の西一坊坊間大路西側溝SD920（6AII-N・O区 149次調査）

平城宮南面西門から南へのびる西一坊坊間大路(SF910)の西側溝。右京八条一坊十一坪の東端で検出した。九条大路北側溝との交叉点においても、南延長を確認している（6AIM区125次調査Ⅱトレンチ）。溝上面の幅5.5～11.0m、底幅3.0～8.0m、深さ約1.5～1.75m。埋土の状況からA期(平城京造営当初、堆積層なし)、B期(8世紀前半)、C期(8世紀後半～9世紀前葉)の3期にわかれる。B期の溝は両岸を粘土で護岸する。土器・墨書人面土器・模造土



fig. 158 平城京跡木器出土地点 (5)
(1:25000 奈良)



fig. 159 平城京跡木器出土地点(6)
(1:25000 大和郡山)

器・土馬・墨書土器・瓦・木簡などとともに木器が出土した(fig. 159)。

〔木器番号〕 0205, 0207, 0230, 1315, 5910

〔文 献〕 工楽善通「木製品」『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所(1984年) p. 38~44

29 右京西市跡の井戸SE395 (6ASI区-Hトレンチ 2次調査)

右京八条二坊五・六・十一・十二坪の4坪は西市推定地である。1980年~1981年にかけて、3次にわたり同推定地の西南部(右京八条二坊十二坪)を調査し、3期におよぶ奈良時代の掘立柱建物群や井戸などを検出した。SE395は十二坪内の中央北寄りにある方形縦板組の井戸。平城京造営以前の自然流路に堆積した荒砂層を、一辺1.2m、深さ2mの方形に掘込んで、一辺約0.6mの井戸枠を組む。井戸枠は多足机の天板・棚板状木製品や幅20cm内外の板を縦に重ね、内側に横棧を方形に組んで固定。掘形の埋土から平城宮土器Ⅱ、井戸の埋土から平城宮土器Ⅱ・Ⅲの土師器・須恵器やモモ・クルミ・ヒョウタンの種子などが出土(fig. 159)。

〔木器番号〕 6516

〔文 献〕 上原真人「木器・金属器」『平城京西市跡』奈良国立文化財研究所(1982年)
p. 26・27

30 右京九条一坊四坪の九条大路北側溝SD950 (6AIM区-I~IVトレンチ 125次調査)

大和郡山市観音寺町に所在する九条大路北側溝。右京九条一坊四坪の西南隅、同五坪の西南隅、同十二坪の東南隅と西南隅とにおいて確認した。羅城門跡の発掘調査に際しても、同四坪の東南隅で確認している。幅2.5~3.0m、深さ0.8mの素掘り溝で、四坪と五坪の西南隅では、北岸をシガラミで護岸する。四・五坪の坪境小路との交叉点では、兩岸を杭と板とで護岸。堆積土は大きく上下2層にわかれ、下層から平城宮土器Ⅲ、上層から平城宮土器Ⅲ~平安時代前期の土師器・須恵器が出土した。木器には、斎串・人形・留針・糸巻・曲物・折敷などがあり、ほかに木簡2点、小型海獣葡萄鏡が出土(fig. 159)。

〔木器番号〕 1313, 1911, 3603, 3915

〔文 献〕 鬼頭清明・甲斐忠彦「木簡・木製品」『平城京九条大路』奈良国立文化財研究所(1981年) p. 28~29

7 和歌山県

A 野田地区遺跡 のだちく

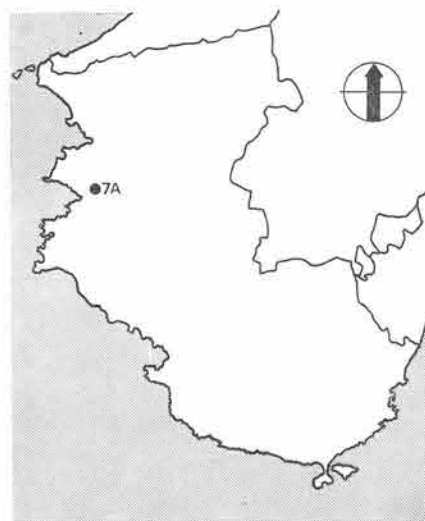


fig. 160 和歌山県の木器出土遺跡

有田郡吉備町野田に所在。1980年5月~1981年3月に調査。有田川下流域左岸の沖積平野と河岸段丘上に位置する。平野部および段丘との境目で、層位・流路・規模をかえて流れる10条の溝を検出。これらの溝は弥生時代後期末から室町時代に至る農業用水路であろう。

木器は溝2~溝10から出土している。溝2は14世紀初頭、溝3は13世紀中葉~後葉、溝4は11世紀中葉~13世紀前葉、溝5は10世紀後半、溝6は9世紀末~10世紀前半、溝7は9世紀、溝8と9は古墳時代、溝10は弥生時代後半にぞくする。本書では溝4~溝7から出土した木器を収録。溝4は幅9m、深さ1mの素掘り溝で、黒色土器・瓦器・土師器とともに、曲物・下

駄・鋤柄・刀子形などの木器が出土。溝5は推定幅 2.4m, 深さ 0.4m の素掘り溝で, 黒色土器・土師器とともに, 人形・曲物・匙・下駄・杓子などの木器が出土した。溝6は幅 2.5m, 深さ 0.3m の素掘り溝で, 土師器・須恵器とともに, 人形・斎串・机・曲物・箸・叩き板などの木器があった。溝7は幅 3m, 深さ 0.5m の溝で, 土師器・須恵器とともに, 人形・斎串・馬形・曲物・箸・横槌・刳物槽・下駄・折敷などの木器が出土した(fig. 161)。

〔木器番号〕 溝4 ; 0506, 3905, 4232 溝5 ; 2115 溝6 ; 0334, 3708,
5007, 5204, 5208 溝7 ; 0714, 2308, 3112, 3607, 5119

〔文 献〕 渋谷高秀「野田地区遺跡」『野田・藤並地区遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会・(社)和歌山県文化財研究会 (1981年) p. 4~16

渋谷高秀『野田・藤並地区遺跡第1次整理概報—野田地区遺跡4区出土木製品の概要—』和歌山県教育委員会文化財課 (1983年)

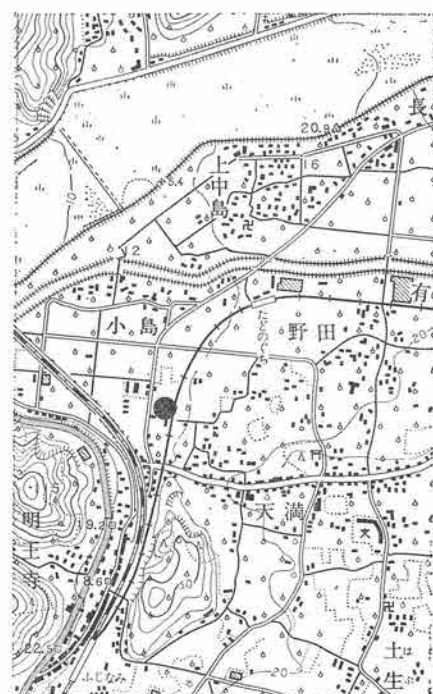


fig. 161 野田地区遺跡木器出土地点
(1:25000 湯浅)